

安曇野市の埋蔵文化財第21集

三枚橋遺跡 3

店舗建設に伴う第3次発掘調査報告書



2020. 10

安曇野市教育委員会

安曇野市の埋蔵文化財第21集

三枚橋遺跡 3

店舗建設に伴う第3次発掘調査報告書



2020. 10

安曇野市教育委員会

表紙写真

1 住出土須恵器塚

裏表紙写真

調査地遠景（南東から）



1 1住完掘状況（西から）※2枚の連続写真を合成



2 2住カマド（左）と5住（右）（北から）



3 6住遺物出土状況（西から）



4 6住出土遺物

序

安曇野市の埋蔵文化財は、この地域の歴史を理解するためにかげがえのない市民共有の財産です。安曇野市教育委員会では、埋蔵文化財の発掘調査等を通じて得られた、地域の歴史資料の蓄積及び調査結果の公開普及に努めてまいりました。

この度、平成7年に穂高町教育委員会が実施した三枚橋遺跡第3次発掘調査の成果をまとめた『安曇野市の埋蔵文化財第21集』を発刊することになりました。本書で報告する三枚橋遺跡は、安曇野市穂高地域の矢原から等々力町にかけて広がる矢原遺跡群を構成する遺跡のひとつです。これまでに7次の発掘調査が行われ、奈良時代を中心とした集落が存在したことがわかってきました。

そして、本書に掲載した第3次発掘調査では、6軒の竪穴建物跡を確認しました。5軒は奈良時代の遺構で、このうち1軒からは土器類だけでなく、麻や苧麻などの茎から繊維を取り出す際に使ったと考えられる苧引金具など生業に直接かかわる道具も出土しました。また、残る1軒は平安時代の建物跡で、そこには大量の土器が捨てられていたことから、平安時代の竪穴建物跡の廃絶方法について、新たな知見が加わったものと考えています。

末筆となりますが、本書をまとめるにあたり、多くの皆様、諸機関にご協力とご指導を賜りましたことに、厚く御礼申し上げます。

本書が地域を理解するために活用され、調査成果が広く安曇野地域の歴史・文化の解明に役立つことを祈念し序といたします。

令和2年(2020)10月

安曇野市教育委員会
教育長 橋渡 勝也

例言

- 1 本書は、長野県安曇野市ながのけん あづみのに所在する、三枚橋遺跡さんまいばし第3次発掘調査の報告書である。
- 2 本書掲載の調査では、現場作業を穂高町ほたか教育委員会が、整理作業を安曇野市教育委員会が実施した。
- 3 本書の編集は、安曇野市教育委員会教育部文化課が行った。執筆は横山幸子、土屋和章が担当し、株式会社加速器分析研究所に業務委託した自然科学分析結果を得て、中谷高志が統括した。調査成果及び総括については、山下泰永の助言を得た。執筆分担は以下のとおりである。
土屋和章：第6章 株式会社加速器分析研究所：第7章 土屋和章・横山幸子：第8章
横山幸子：前記以外
- 4 本書で使用した主な引用・参考文献は、巻末に一括して掲載した。ただし、第7章では節末に掲載した。
- 5 本書掲載の調査に関する出土遺物及び事務書類、記録類は安曇野市教育委員会が保管している。
- 6 調査全般にわたり以下の方々から、ご指導・ご協力をいただきました。(敬称略・五十音順)
大澤慶哲、白鳥章、原明芳、逸見大悟、矢口健陽児

凡例

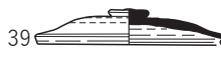
- 1 発掘調査及び整理作業に際し、調査略号として遺跡名（矢原三枚橋遺跡）のアルファベット（Yabara-Sanmaibashi iseki）と調査年度（西暦1995年）の組み合わせである次の表記を、遺物注記等に使用した。

三枚橋遺跡第3次発掘調査：YS95

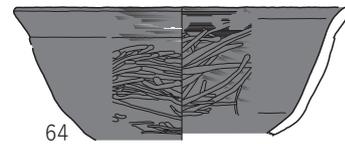
- 2 本書での遺構名は、発掘調査時に使用した略号を引き継ぎ、竪穴建物跡は「●住」、ピットは「P」を使用している。
- 3 遺構の規模について、残存箇所のみを計測した値は、（ ）内に示した。
- 4 本書実測図で遺物は次のように表現した。また、縮尺は各図に示した。



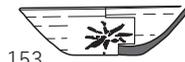
107 土師器 断面無地



39 須恵器 断面黒



64



153

軟質須恵器 断面灰色（70%）



178

灰釉陶器 断面灰色（18%）



111

黒色土器 灰色（60%）

- 5 土器の記載では器形について、「形土器」の表記を省略した。

例 甕形土器：甕

- 6 本書では、平成17年（2005）10月1日の町村合併より前の旧郡名・旧町村名について「旧」を省略し、「南安曇郡」、「穂高町」のように表記した。
- 7 本書掲載の地形図は個別の記載のない場合、安曇野市都市計画基本図（1/2,500）を基図とし、調製したものである。
- 8 文献引用等に際し、各機関の名称を以下のように省略した。

埋蔵文化財センター：埋文セ 教育委員会：教委 編纂委員会：編纂委 豊科建設事務所：豊建

目次

序

例言・凡例

目次・挿図目次・挿表目次・写真目次

第1章 調査の契機と経過	1
1 調査の概要	1
2 調査の契機と事業計画の概要	1
3 調査の経過	2
4 試掘調査	2
5 調査体制	5
6 発掘作業・整理作業の経過	5
第2章 遺跡の位置と環境	6
1 地理的環境	6
2 歴史的環境	6
3 三枚橋遺跡の概要	8
第3章 調査の方法	10
第4章 層序	15
第5章 遺構	17
1 竪穴建物跡	17
2 土塋	19
3 ピット	20
第6章 遺物	28
1 土器類	28
2 石製品	34
3 金属製品	35
第7章 自然科学分析	57
1 放射性炭素年代（AMS測定）	57
2 出土炭化材の樹種同定	61
第8章 調査の総括	64
1 遺構と遺物	64
2 「穂高・穂高柏原の古代遺跡群」と三枚橋遺跡	67
写真図版	69
引用・参考文献	82
調査報告書抄録	

挿図目次

第1図	調査地位置図	1	第22図	6住出土土器口径・器高分布	34
第2図	試掘トレンチ配置図	3	第23図	土器類（試掘）	36
第3図	試掘調査北区土層概念図	4	第24図	土器類（1住・2住）	37
第4図	試掘調査南区土層概念図	4	第25図	土器類（2住）	38
第5図	三枚橋遺跡付近の遺跡	7	第26図	土器類（2住・3住）	39
第6図	三枚橋遺跡発掘調査区配置図	9	第27図	土器類（3住・4住）	40
第7図	グリッド配置図	11	第28図	土器類（5住）	41
第8図	調査区全体図	12	第29図	土器類（6住）	42
第9図	北区全体図	13	第30図	土器類（6住）	43
第10図	南区全体図	14	第31図	土器類（6住）	44
第11図	土層観察地点と遺構	15	第32図	土器類（6住）	45
第12図	基本層序	16	第33図	出土石製品・金属製品	46
第13図	基本層序と遺構土層の対比	16	第34図	分析試料（試料1）	60
第14図	1住	21	第35図	分析試料（試料2）	60
第15図	2住	22	第36図	暦年較正年代グラフ（試料1）	60
第16図	3住	23	第37図	暦年較正年代グラフ（試料2）	60
第17図	4住	24	第38図	試料の走査型電子顕微鏡写真	63
第18図	5住	25	第39図	6住遺物出土状況	65
第19図	6住、土壙1、P12・13	26	第40図	穂高・穂高柏原の主な古代遺跡	66
第20図	P1～4	27	第41図	「穂高・穂高柏原の古代遺跡群」 の遺構別出土土器年代	67
第21図	P5～11	27			

挿表目次

第1表	事務手続き経過	2	第9表	石製品観察表	56
第2表	三枚橋遺跡付近の遺跡	7	第10表	金属製品観察表	56
第3表	三枚橋遺跡発掘調査履歴	8	第11表	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	59
第4表	遺物注記	10	第12表	放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、 暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)	59
第5表	器種分類	29	第13表	樹種同定結果	62
第6表	種別組成	33			
第7表	種別・器種組成	33			
第8表	土器類観察表	47			

写真目次

1 調査状況(南区) ……………	69	8 土器類(2住・3住) ……………	76
2 調査状況(試掘・1住・2住・3住・5住) ……	70	9 土器類(3住・4住・5住・6住) ……………	77
3 調査状況(4住・6住・ピット) ……………	71	10 土器類(6住) ……………	78
4 試掘土層(北区) ……………	72	11 土器類(6住) ……………	79
5 試掘土層(北区・南区)、 試掘トレンチ(南区) ……………	73	12 土器類(6住)、金属製品 ……………	80
6 土器類(試掘(南区・北区)・1住) ……………	74	13 金属製品、石製品 ……………	81
7 土器類(2住) ……………	75		

第1章 調査の契機と経過

1 調査の概要

さんまいばし
三枚橋遺跡第3次発掘調査

所在地	安曇野市穂高 ^{ほたか} 1800番1 外1筆
調査面積	366㎡
発掘作業	平成7年(1995)4月8日(土)～平成7年(1995)4月28日(金)
整理作業	平成7年(1995)5月1日(月)～令和2年(2020)10月30日(金)
調査契機	店舗建設

2 調査の契機と事業計画の概要

三枚橋遺跡第3次発掘調査の調査原因となった事業は、民間事業者による店舗2棟の建設である。新築建物は鉄骨造平屋建で、建築面積は敷地内北側の建物で約543.8㎡、南側の建物で455.5㎡の計画である。施工地は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、南東側の隣接地では、平成6年(1994)の三枚橋遺跡第2次発掘調査で遺構等が発見されていることから、保護協議を開始した。平成7年(1995)には穂高町教育委員会が試掘調査を実施し、埋蔵文化財の存在を確認した。



第1図 調査地位置図

3 調査の経過

三枚橋遺跡第3次発掘調査は、店舗建設に伴う緊急発掘調査である。この遺跡では、調査地南東側約20mの地点で三枚橋遺跡第2次発掘調査を実施し、遺構が良好に残存していたため、平成7年（1995）3月29日に敷地内で試掘調査を実施した。試掘調査では、地表下70～140cmまで掘削し、奈良～平安時代の多量の遺物を確認した。試掘結果をもとに、再度事業者と協議したが、本件工事での掘削による埋蔵文化財への影響は不可避であることが判明したため、記録保存のための発掘調査を実施した。

4 試掘調査

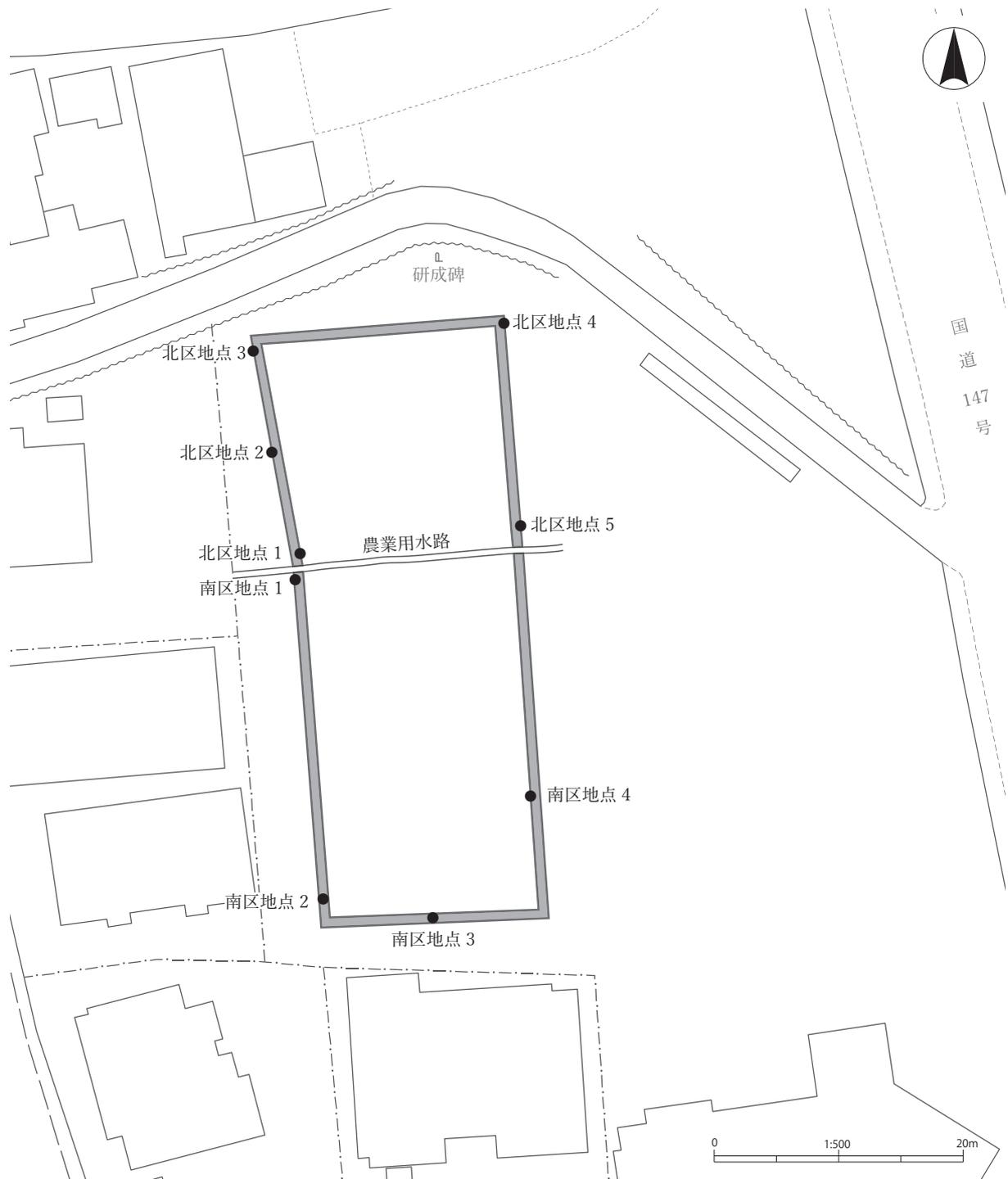
試掘調査では、第2図のとおり事業地を囲むようにトレンチを設置した。事業地中央付近に、東西方向の農業用水路が存在したため、この水路を境界として、調査地を北区と南区として設定した。土層観察は、北区5箇所、南区4箇所で行った。

観察できた土層は、第3・4図のとおりで、耕作土の下位にシルト層、砂礫層が残存していた。南区地点2では、地表下30～50cm付近で焼土を確認した。南区地点4の地表下約50cm付近で、暗褐色シルト層中に土器が集積しており、付近に遺構が存在する可能性が高いと判断した。その他の箇所で遺構は検出できなかった。北区の西側トレンチに位置する北区地点1・2でシルト層、粘土層を確認したが、北区地点3では、層厚70cm以上の礫層が存在した。西側トレンチは、地点3と同様に礫層が主体的であった。南区地点1でも、地表下30cm以深で、層厚40cmの礫層が堆積していた。また、トレンチ全体で、奈良～平安時代の須恵器、土師器が出土したため、資料化して詳細を第6章に掲載した。

第1表 事務手続き経過

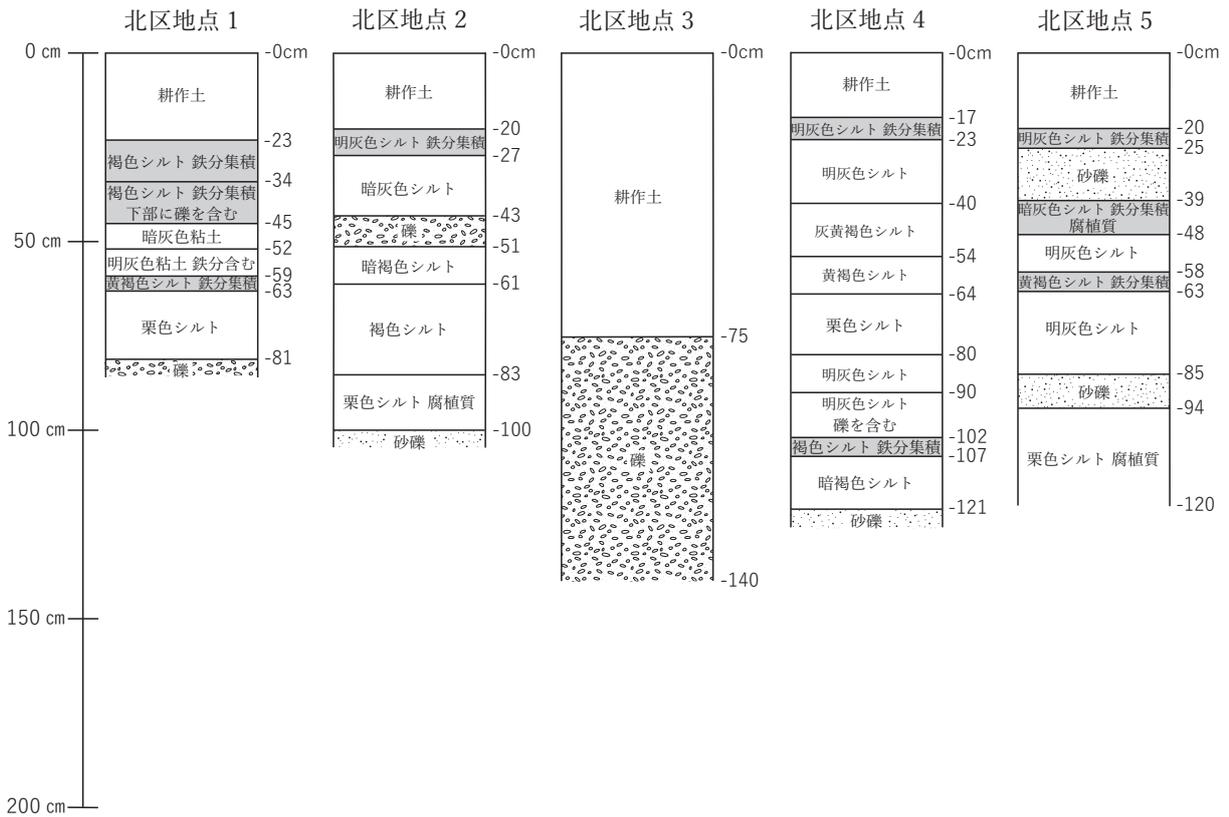
	年月日	文書番号	内容
1	平成7年1月	—	事業者と穂高町教委の保護協議開始。
2	平成7年2月3日	—	平成7年2月3日付けで、事業者から文化庁長官あて文化財保護法第57条の2第1項、第57条の3第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出される。
3	平成7年3月1日	6穂教第030103号	上記2の届出を受け、穂高町教委教育長から、文化庁長官あて文化財保護法第98条の2第1項に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を発出する。
4	平成7年3月29日	—	試掘調査を実施。
5	平成7年4月8日～平成7年4月28日	—	発掘調査を実施。
6	平成7年5月2日	6穂教第030103号	穂高町教委教育長から「発掘調査終了報告書」「埋蔵文化財保管証」を県教委教育長あて、「埋蔵文化財の拾得について」を豊科警察署長あて提出する。
7	平成7年5月19日	7教文第5-41号	「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)」にて県教委教育長から、発掘調査の指示通知が発出される。
8	平成7年6月28日	7教文第4-56号	「埋蔵物の文化財認定について(通知)」が県教委教育長から発出される。

試掘調査の結果、施工地南側に建設を予定している店舗については、建物基礎設置箇所が発掘調査を行うこととした。北側に建設予定の店舗については、西側トレンチの大半が礫層であったほか、水路付近のトレンチで厚い礫層が存在したため、建物基礎設置箇所のうち北東部分を調査対象とした。

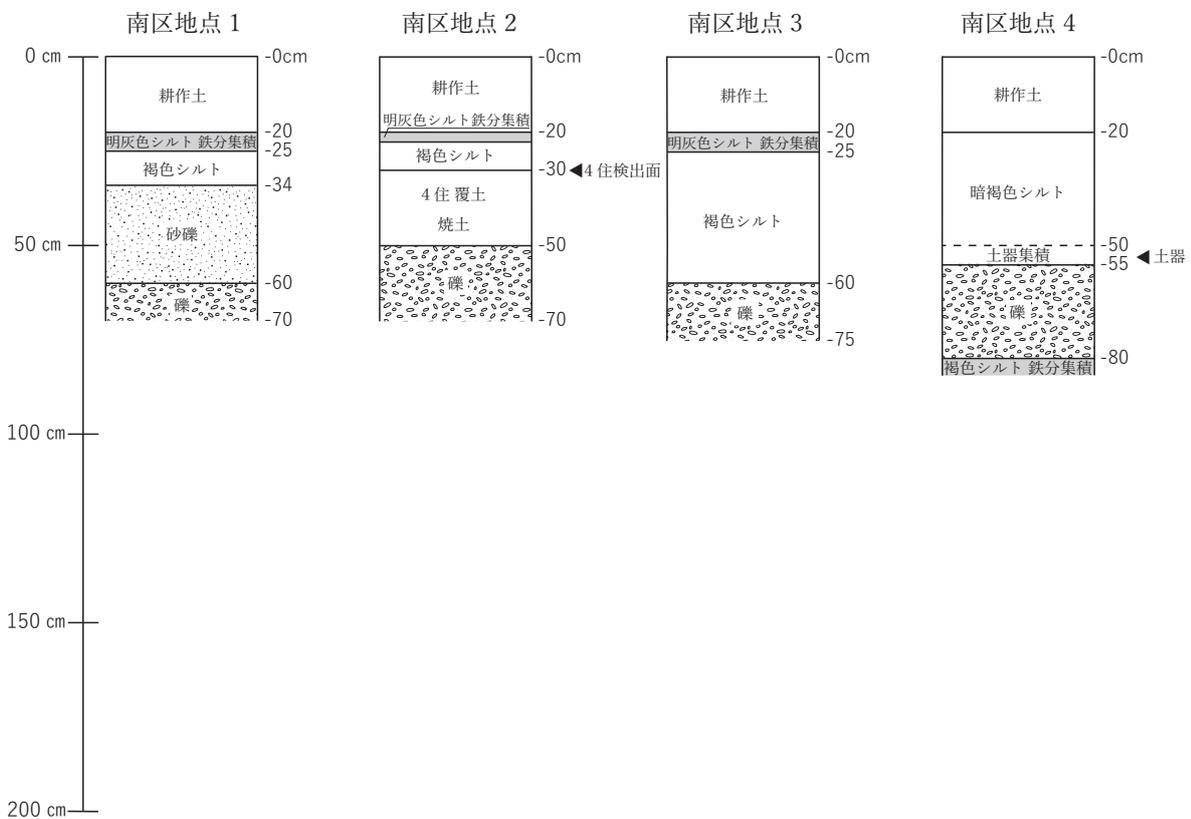


第2図 試掘トレンチ配置図

第1章 調査の契機と経過



第3図 試掘調査北区土層概念図



第4図 試掘調査南区土層概念図

5 調査体制

穂高町教育委員会（事務手続、試掘調査、発掘調査、整理作業）

	平成6年度	平成7年度
事務局	穂高町教育委員会 生涯学習課	穂高町教育委員会 生涯学習課
生涯学習課長	中島芳孝	中島芳孝
調査員	山下泰永	山下泰永
内容	試掘調査	発掘調査、整理作業

安曇野市教育委員会（整理作業）

	令和元年度	令和2年度
事務局	安曇野市教育委員会教育部 文化課	安曇野市教育委員会教育部 文化課
文化課長	那須野雅好	山下泰永
文化財保護係	山下泰永（課長補佐兼係長） 土屋和章、横山幸子	中谷高志（係長） 土屋和章、横山幸子
調査員	横山幸子、土屋和章	横山幸子、土屋和章
作業参加者	田多井智恵、宮下智美、望月裕子、細尾みよ子	白居直之、田多井智恵、宮下智美、望月裕子
内容	整理作業、自然科学分析	整理作業

6 発掘作業・整理作業の経過

三枚橋遺跡第3次発掘調査における現場での発掘作業は、平成7年（1995）4月8日（土）～平成7年（1995）4月28日（金）に実施した。整理作業は、平成7年の発掘調査終了後に開始し、図面の整理、遺物の洗浄、注記を行った。

平成31年（2019）4月1日（月）～令和2年（2020）10月30日（金）に遺物接合、図版整理、遺物実測図作成、写真撮影及び報告書作成を実施し、本書を発行し全事業を終了した。

第2章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

安曇野市を含む松本盆地は長野県のほぼ中央にあたり、西を標高2,000m超の飛騨山脈に、東を標高1,000m程度の筑摩山地に画される。安曇野市は盆地の中央付近、松本市街地から北西に10km程度の距離に位置する。安曇野市内で現在の集落が分布する範囲は、飛騨山脈山麓の標高700m付近から、安曇野市北東部の東筑摩郡生坂村との境界地点の標高500m付近までで、標高差にして約200mの範囲である。

安曇野市内を流れる主な河川としては、高瀬川、烏川、穂高川、黒沢川、犀川が挙げられる。盆地北部から南流する高瀬川と、安曇野市北部において東流する穂高川、盆地南部から北流する犀川の三河川が、安曇野市明科地域で合流し、犀川丘陵内を生坂村、大町市八坂、長野市信州新町を経て長野盆地へ流入する。盆地西側ではこれらの水系に合流する中房川、烏川、黒沢川などの扇状地が発達し、大規模な扇状地群を形成している。

三枚橋遺跡が所在する安曇野市穂高地域は、安曇野市の北部に位置する。平地の大部分は、飛騨山脈から東流する烏川の扇状地で、扇頂付近には縄文時代の遺跡や後期古墳が分布する。扇状地内では、縦堰と呼ばれる、自然流を利用した用水路が西から東へ鳥趾状に広がっている（小穴1987）。縦堰の流下する扇央～扇端には、主に古墳～平安時代の遺跡が立地し、弥生時代の遺構も確認されている。三枚橋遺跡周辺には、穂高沢、柏原沢といった主要な縦堰が存在し、三枚橋遺跡第3次発掘調査の調査地の北側約40mの位置には、柏原沢から分流した大坪沢が東流する。小穴喜一氏は、穂高沢、柏原沢周辺で古墳や土師器・須恵器を伴う多くの遺跡が発見されていることから、古代～中世に、これらの縦堰を軸に水田開発が進んだと考察している（小穴1987）。

2 歴史的環境

三枚橋遺跡の所在する安曇野市穂高地域における遺跡は、『穂高町誌』にまとめられている（穂高町誌編纂委1991）。『穂高町誌』によると、穂高町に所在する遺跡数は、縄文時代39、弥生時代6、古墳時代（古墳そのものは除く）10、奈良時代2、平安時代28、中世3を数える。三枚橋遺跡の所在する穂高地域の矢原・白金地籍では、広い範囲で遺跡が確認されている。以下で、矢原・白金地籍の弥生時代及び古代について歴史的環境を記載する。

弥生時代の資料としては、発掘調査及び採集等で赤彩を施した弥生土器片とそれに関連する遺構が確認されている。三枚橋遺跡では7次にわたる発掘調査で、弥生時代後期の集落跡や、櫛描波状文のある甕などの弥生土器を検出している（安曇野市教委2010）。八ツ口遺跡第2次発掘調査では、赤彩のある弥生土器が出土している（安曇野市教委2010）。

矢原遺跡群は、『倭名類聚抄』にある「安曇郡八原郷」、平安時代後期の「矢原御厨」を念頭に設定された概念である。矢原地籍の周辺では、馬場街道遺跡第1・2次発掘調査で、縄文土器、弥生土器、土

師器、須恵器、鉄器、灰釉陶器、青磁・白磁、山茶碗などの出土があり、古墳時代中期～後期、平安時代、中世の遺構を確認した（長野県豊建・穂高町教委1987）。^{ふじつか}藤塚遺跡では、平成19年（2007）に実施した第2次発掘調査で奈良～平安時代前半の竪穴建物跡25棟を検出した（安曇野市教委2009）。ハツ口遺跡では、平成20年（2008）に実施した第2次発掘調査で、奈良～平安時代の竪穴建物跡6棟を検出した（安曇野市教委2010）。^{やばらごりんばた}矢原五輪畑遺跡では、平成29年（2017）に安曇野市教育委員会が実施した試掘調査で、櫛描波状文のある弥生土器片や、外面ハケメの施された土師器甕等の奈良時代の遺物を検出した（安曇野市教委2019）。

なお、三枚橋遺跡第3次発掘調査及び第7次発掘調査の調査地北側には、^{けんせいぎじゅく}研成義塾 校舍跡の石碑がある。研成義塾は、^{いぐちきげんじ}井口喜源治がキリスト教に基づいた人格主義教育を目指し、開いた私塾である。明治31年（1898）に^{ひがしほたか}東穂高村矢原集会所に創立し、明治34年（1901）に、三枚橋地籍において新校舍を建設した。



第5図 三枚橋遺跡付近の遺跡（「安曇野市埋蔵文化財包蔵地図」（平成22年3月31日調整）を加工）

第2表 三枚橋遺跡付近の遺跡

No.	名称	種類	時代
2-34	宮脇遺跡	集落跡	弥生・平安・中世
2-36	穂高神社境内遺跡	集落跡	弥生・奈良・平安
2-37	北才の神遺跡	集落跡	古墳・平安
2-38	藤塚遺跡	集落跡	古墳・平安
2-39	宗徳寺遺跡	集落跡	平安
2-40	芝宮南遺跡	集落跡	弥生・平安
2-41	穂高高校北遺跡	集落跡	平安
2-42	大坪沢遺跡	集落跡	平安
2-43	南原遺跡	集落跡	弥生
2-44	長者池遺跡	集落跡	古墳・平安
2-45	追堀遺跡	集落跡	平安
2-46	矢原権現池遺跡	集落跡	平安
2-47	三枚橋遺跡	集落跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世
2-48	矢原五輪畑遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安
2-49	矢原宮地遺跡	集落跡	縄文・古墳・奈良・平安
2-50	梅池遺跡	集落跡	縄文・平安
2-51	四反田遺跡	集落跡	古墳・平安
2-52	正鳥遺跡	集落跡	縄文・中世
2-53	馬場街道遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安
2-56	ハツ口遺跡	集落跡	奈良・平安・中世
2-57	柏原遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安
2-59	堀之内遺跡	集落跡	古墳・中世
2-60	矢原巾上遺跡	集落跡	古墳
2-61	弥之助畑遺跡	集落跡	平安

3 三枚橋遺跡の概要

三枚橋遺跡は、土師器、須恵器の破片が出土したことを契機として、古代の遺跡と認識されるようになった（南安曇郡誌改訂編纂会1968、穂高町誌編纂委1991）。令和2年までに、7次にわたる発掘調査を実施した。

穂高町教育委員会は、平成3年（1991）～平成14年（2002）に、第1～5次の発掘調査を実施し、調査面積は合計約3,700㎡となった。第7次までの調査において、奈良～平安時代前半の集落跡を検出した。また第1・2・4次調査では、弥生時代の竪穴建物跡も確認した（未報告）。

本書で報告する平成7年（1995）の三枚橋遺跡第3次発掘調査では、奈良～平安時代の6棟の建物跡を検出し、同時代の土師器、須恵器、鉄製品、石製品のほか、平安時代の灰釉陶器が出土した。

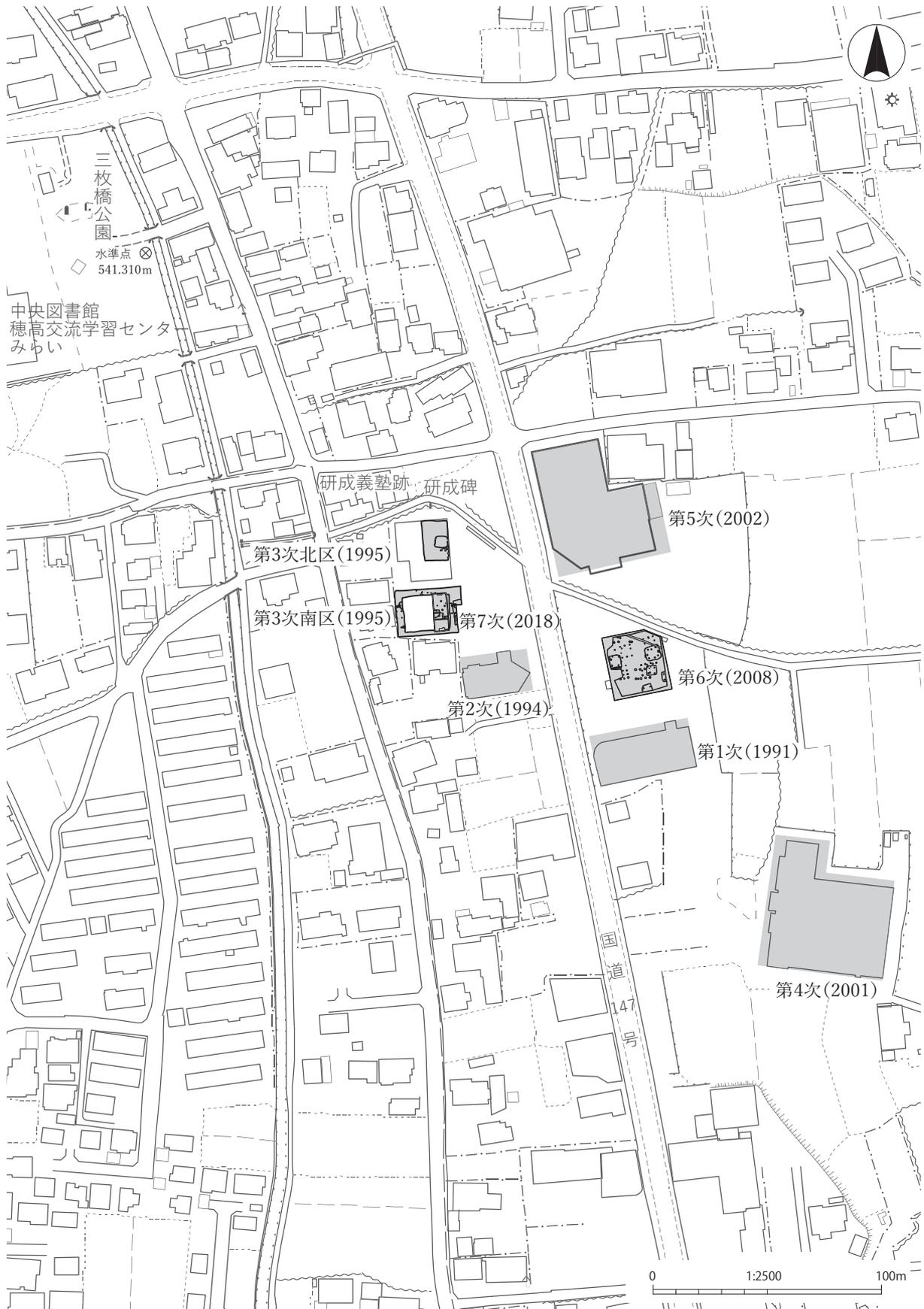
安曇野市教育委員会は、平成20年（2008）に第6次発掘調査を実施し、奈良時代前半～平安時代前半の竪穴建物跡を5棟検出した（安曇野市教委2010）。竪穴建物跡のうち1棟は、西側に入口施設と考えられる階段状の構造をもち、須恵器高盤等の遺物が出土した。また、遺構外からは、櫛描波状文の施された弥生土器が出土した。

平成30年（2018）には、第3次発掘調査と同一敷地内で、第7次発掘調査を行い、竪穴建物跡2棟を検出した（安曇野市教委2020）。この調査では、奈良～平安時代の須恵器、土師器、灰釉陶器が出土したが、弥生時代の遺構・遺物は確認できなかった。

以上から、三枚橋遺跡は弥生時代後期を初源とした奈良～平安時代の集落跡と捉えている。

第3表 三枚橋遺跡発掘調査履歴

調査次	調査年	調査原因	遺構・遺物の概要	文献
第1次	平成3年 (1991)	店舗建設	竪穴建物跡（弥生5、奈良～平安12） 弥生土器、須恵器、土師器	未報告
第2次	平成6年 (1994)	店舗建設	竪穴建物跡（弥生1、奈良～平安4）、掘立柱建物跡（奈良～平安3）、人工河川、弥生土器、須恵器、土師器、石製品	未報告
第3次	平成7年 (1995)	店舗建設	竪穴建物跡（奈良～平安6）、須恵器、灰釉陶器、金属製品、石製品	本書
第4次	平成13年 (2001)	店舗建設	竪穴建物跡（弥生4、奈良～平安11）、掘立柱建物跡（奈良～平安4）、溝跡、弥生土器、須恵器、土師器	未報告
第5次	平成14年 (2002)	店舗建設	竪穴建物跡（奈良～平安10、平安末2）、掘立柱建物跡（奈良～平安6）、須恵器、土師器、墨書土器、転用硯、羽口	未報告
第6次	平成20年 (2008)	店舗建設	竪穴建物跡（奈良時代1、平安時代4）掘立柱建物跡1、土坑、ピット、弥生土器、須恵器、土師器、鉄製品、石製品	安曇野市教委2010
第7次	平成30年 (2018)	店舗建設	竪穴建物跡（奈良～平安1、不明1）、焼土1、ピット、須恵器、土師器	安曇野市教委2020



第6図 三枚橋遺跡発掘調査区配置図

第3章 調査の方法

三枚橋遺跡第3次発掘調査の調査原因である店舗建設の計画地が、周知の埋蔵文化財包蔵地内であり、南側隣接地での第2次発掘調査で多数の遺構を確認していることから、記録保存のための発掘調査を念頭に事業者と保護協議を継続した。

平成7年（1995）に試掘調査を実施し、計画地に遺構が残存していることが判明した。確認できた遺構の深度は、南区地点2で約30cmであり、当該工事での掘削によって埋蔵文化財への影響が不可避であることを確認したため、事業者と保護協議を再度実施し、発掘調査を実施して遺跡の記録保存を図ることとした。

発掘調査は、北側の店舗建設予定地のうち、礫層の分布が少なく、遺構が残存している可能性が高い箇所に北区を、南側の店舗建設予定地のうち、建物基礎設置箇所に南区を調査区として設定した。調査面積は北区約179㎡、南区約187㎡である。

記録作成にはグリッド法を採用し、1辺5mの任意グリッドを設定した。グリッドは、真北から西へ約5.1度傾く。また、標高の基準としてグリッド測量実施の際にベンチマークを設定した。ベンチマークの標高は、調査地北西約220m、三枚橋公園内に位置する一等水準点の標高541.310m（平成7年当時）から調査地へ移設し、539.485mとした。なお、調査地付近では、令和元年（2019）に基準点（C-1、C-2）の座標が得られている（第7図）。C-1、C-2の基準点測量では、世界測地系を採用しており、座標は以下の通りである。

C-1 X=36937.669 Y=-54695.285 C-3 X=36923.097 Y=-54693.365

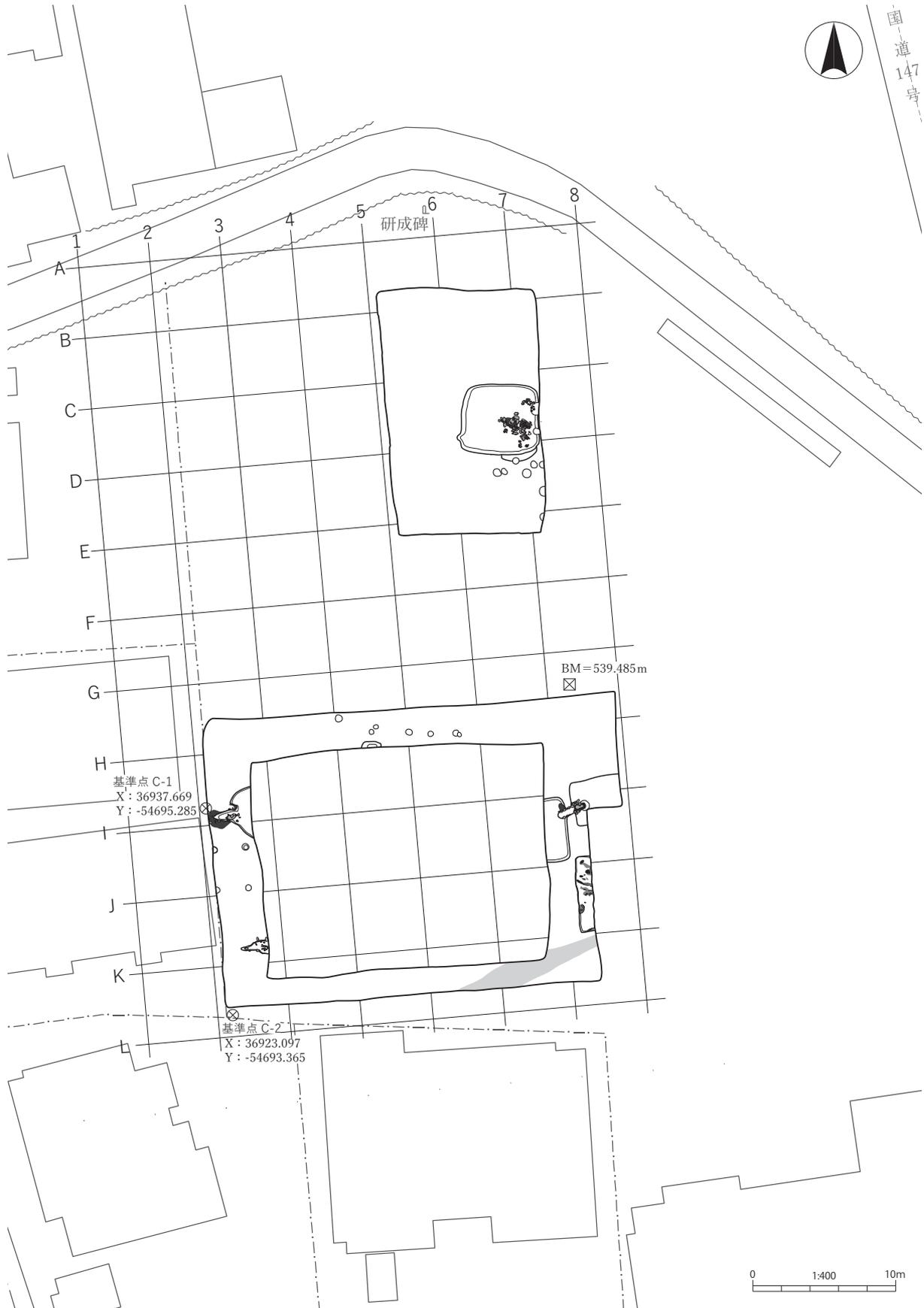
表土除去は建設用重機を用い、造成土及び遺構検出面直上までの堆積土を除去した。以深は遺構が検出されるまで人力により掘削した。

遺物の取り上げは、原則として遺構ごとに行った。遺構観測は調査用グリッドを基準として、調査員・作業員が現場で簡易遺方測量を実施した。記録写真は、現場作業ではフィルムカメラを使用し、平成7年度の整理作業ではフィルムカメラを、令和2年度の整理作業ではデジタルカメラを使用した。

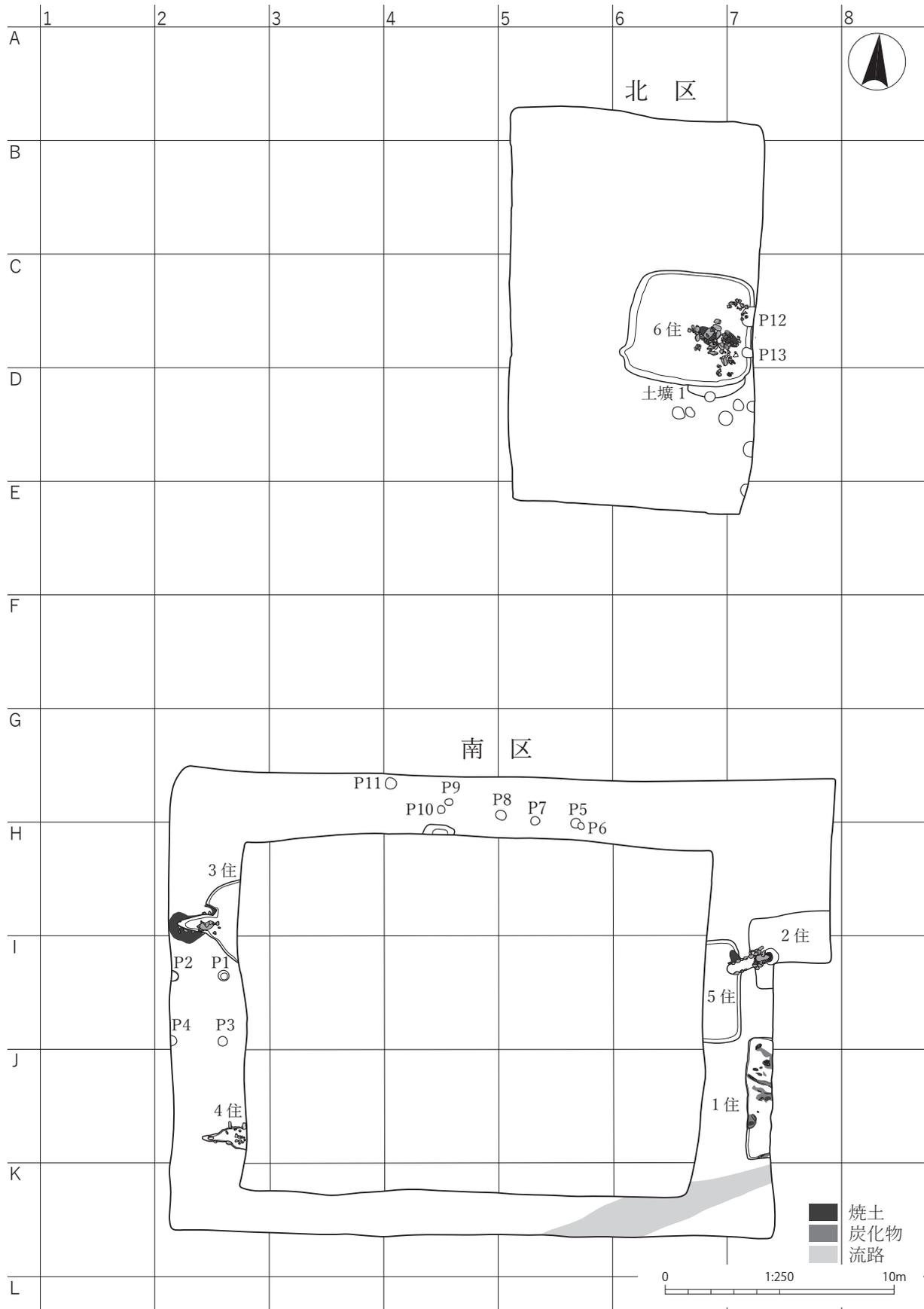
整理作業は、現場作業終了後に室内で行い、土器等の洗浄、注記、接合、実測、属性観察、図版作成・調整、写真撮影等及び報告書作成を行った。整理作業のうち自然科学分析は業者委託した。記載には、調査略号「YS95」を使用し、以下の例に拠った。

第4表 遺物注記

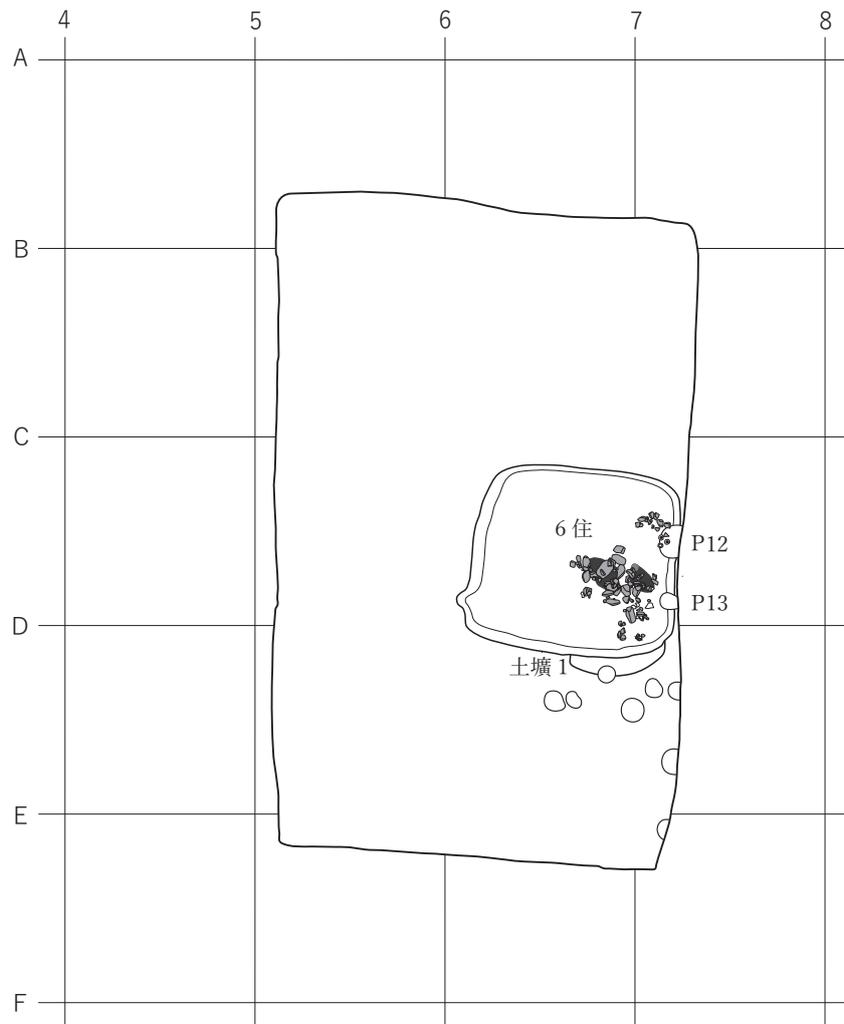
内容	注記				
出土位置記録遺物	YS95 「出土位置」				
「出土位置」略号	北区→北田、N田	南区→南田	試掘→試、シ	検出→ケ	覆土→フ
	トレンチ→ト	床→ユ	ベルト→ベ	カマド→カ	カマド付近→カ付
出土遺構記録遺物	YS95 「出土遺構」 「No.●」 / YS95 「出土遺構」 「出土位置」				
試掘調査出土遺物	北田 「出土位置」 / 南田 「出土位置」				



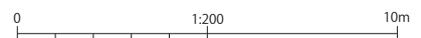
第7図 グリッド配置図



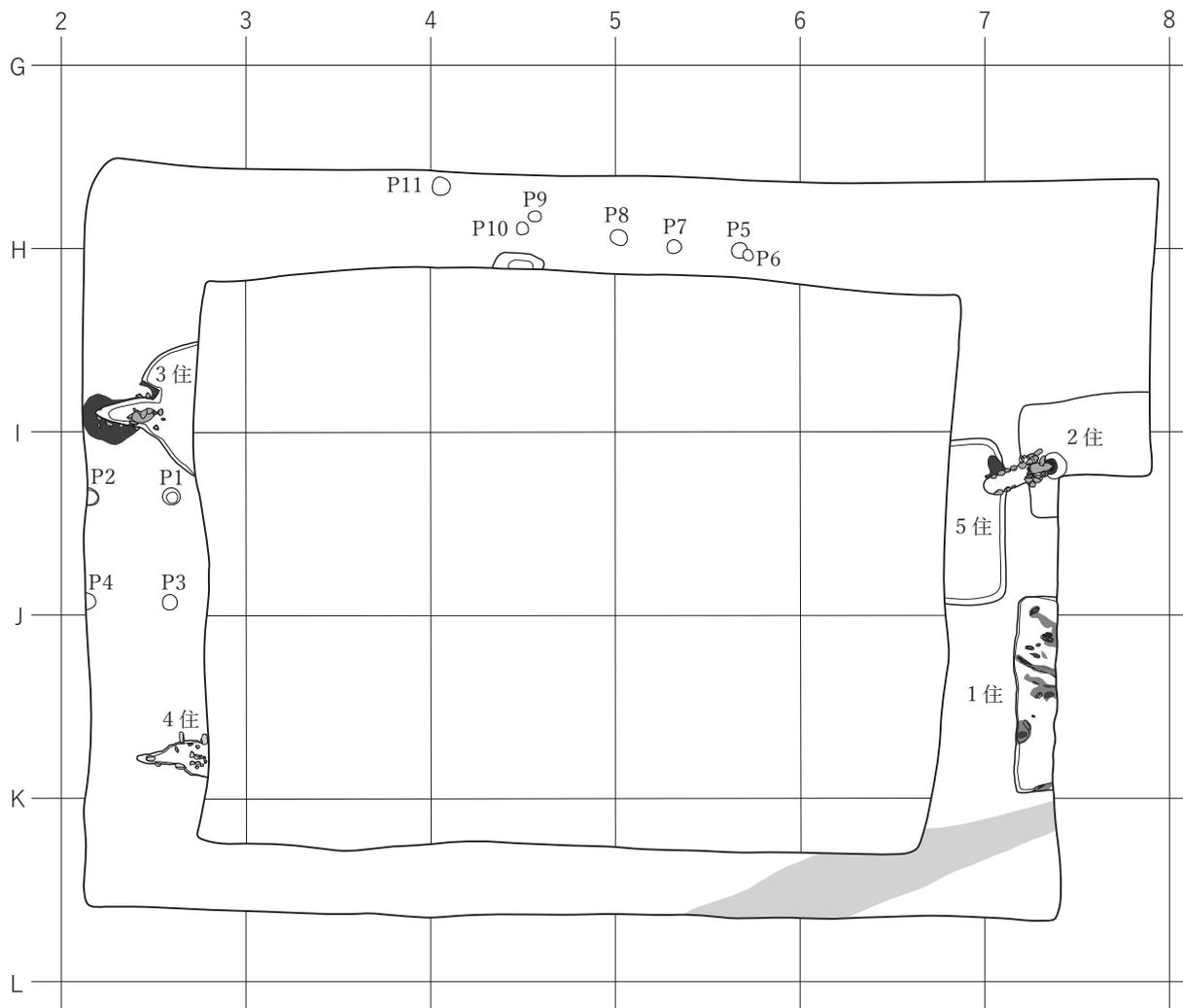
第8図 調査区全体図



■ 焼土
■ 炭化物



第9図 北区全体図



第10図 南区全体図

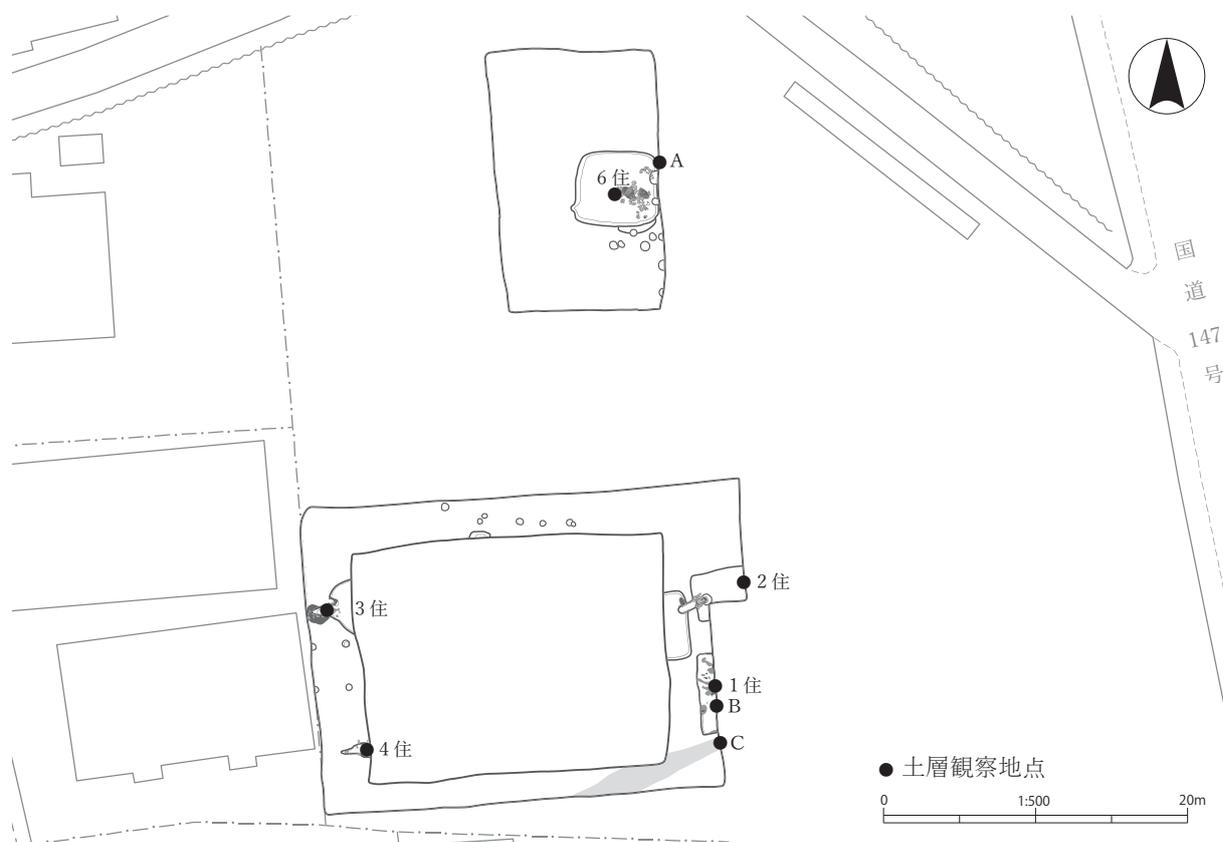
第4章 層序

今回の調査では、北区1箇所（A地点）、南区2箇所（B・C地点）で土層観察を行った（第11図）。第4～6層、第12層は、北区のA地点、南区のB・C地点で共通して確認できる。なお、現場作業では、土層の色、大まかな粒径などの簡易な記録のみを行った。整理作業で、現場記録、土層の堆積順、写真を元に土層を対比し、基本層序を組み立てた（第12図）。

北区に設定したA地点では、深度136cmまで掘削し、砂礫、礫、シルト層を確認した。第1層の耕作土直下には、第2層の砂礫層が存在し、下位には第3～7層のシルト層が連続する。第3・5・7層は、鉄分の粒子を多く含む。第8層の礫の下位（地表下93cm）では、6住のプランを検出した。6住は、第9・10層のシルトを掘り込む。第10層の下位には、第12層の砂礫が存在した。

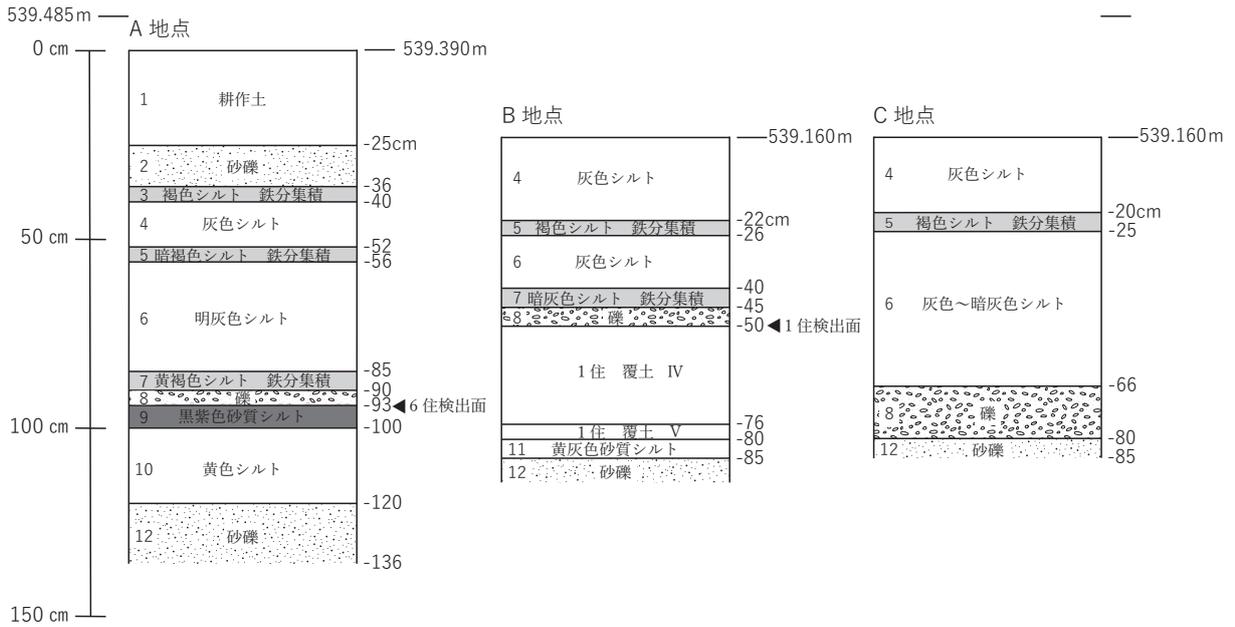
南区に設定したB・C地点では、深度85cmまで掘削し、礫、砂礫、シルト層を確認した。B地点は、1住が調査区東壁にかかる箇所である。B地点では、A地点と共通する第4～8層のシルト層と礫層が連続した。第8層の礫の下位は、1住の覆土で、厚さ30cmを測った（第5章1）。1住は第9・10層を掘り込んでいる。C地点では、第4～6層のシルトが堆積し、以深では、第8層の礫及び第12層の砂礫を確認した。

また、南区の北、西、南側では、広い範囲で砂礫層を検出した。3住・4住・P1・P2はこの砂礫層を掘り込んで構築されている。



第11図 土層観察地点と遺構

第4章 層序



第12図 基本層序

基本層序	1住	2住	3住	4住	5住	6住
第1層			3住 I	4住 I		
第2層	不明	不明				
第3層				×		
第4層	1住 I	2住 I		4住 II		不明
第5層		2住 II	×	4住 III		
第6層	1住 II	2住 III				
第7層		2住 IV		×	不明	6住 I
第8層	1住 III					×
第9層	[覆土]	[覆土]	[覆土]	[覆土]		[覆土]
第10層	1住 IV 1住 V	2住 V	3住 II 3住 III 3住 IV 3住 V 3住 VI	4住 IV 4住 V 4住 VI 4住 VII		6住 II 6住 III 6住 IV
第11層		2住 VI				×
第12層	○	不明	○	○		○

×：観察地点では存在していなかった土層

○：観察地点・遺構壁面で検出した土層

第13図 基本層序と遺構土層の対比

第5章 遺構

三枚橋遺跡第3次発掘調査で確認した遺構は、竪穴建物跡6棟、土壇1基、ピットである。南区には竪穴建物跡の1～5住と、P1～11が、北区には6住・P12・13及び土壇1が位置する。三枚橋遺跡では、過去に弥生時代の遺構を確認しているが、今回の調査では検出できなかった。以下にそれぞれの詳細を記載する。なお、時期は第6章の段階区分に準じる。

1 竪穴建物跡

(1) 1住 (第14図)

検出層位 第9層上面と推定 (第13図)

位置 I7・J7グリッド

平面形・規模 調査区東壁にかかるため、全体像は不明だが、調査区内では、北西と南西の隅2箇所を確認した。南北5.4m、東西方向の長さは不明であるが、方形を呈すると推定される。主軸は不明である。

壁・覆土 残存している壁高は約0.3mで、やや開くように立ち上がる。覆土はIV、V層の2層に分層でき、V層は炭化物、焼土を大量に含む土層であった。床面からは炭化した木材片が多量に検出された。炭化材は、最長0.7m、径は0.1mであった。炭化木材は床全面に広がり、周辺には焼土も散在していることから、建物が焼失したと推測できる。1住に伴う柱穴は検出できなかった。

カマド 調査区内で、カマドは確認できなかった。

重複関係 他の遺構との重複関係はない。

遺物出土状況 床面付近から、炭化物とともに土器小破片が多数出土した。

時期 出土土器から、3期に比定できる。

(2) 2住 (第15図)

検出層位 第8層上面と推定 (第13図)

位置 H7・I7グリッド

平面形・規模 調査区東壁にかかるため全容は不明である。調査区内では、北西と南西の隅2箇所を確認した。南北3.0m、東西(3.5)mと推定される規模で、長方形を呈すると考えた。

壁・覆土 残存している壁高は約0.4mで、カマドを基準とした主軸は約N62°Eである。覆土は単層で、炭化物を包含する。カマドから東にやや離れた位置で、炭化物と微細な骨片を検出した。柱穴は確認できなかった。

カマド 西壁で、礫を芯材とする袖部を検出した。焚口の幅は約0.4m、残存する煙道の長さは1.6mである。礫は一部が被熱していた。右袖の構築材には、凹部の多い球形の礫が1点含まれていた(写真図版13「2住カマド出土石製品」)。焚口火床からは、火床を覆うように大型の扁平な河原石が検

第5章 遺構

出された。この礫はカマド構築材としての礫より大きく、長楕円型であり、礫の下から焼土層を検出した。

重複関係 カマド煙道が5住を切る。

遺物出土状況 カマド周辺及び焚口の大型礫の下から、土器が多数出土した。

時期 出土土器から、3～4期に比定できる。

(3) 3住 (第16図)

検出層位 耕作土直下

位置 H2・I2グリッド

平面形・規模 カマドと壁の一部を検出したが、遺構の大半が調査区外にかかるため、平面形は不明である。カマド焚口からの煙道の状況を長軸とした軸方向は、N82°Eである。

壁・覆土 残存する壁高は、高さ約0.5mである。覆土の土層観察はできなかった。

カマド 西側でまとまった焼土が検出され、カマドと判断した。推定できる焚口の幅は約0.9m、煙道の長さは1.8mである。煙道の外側には、焼土が分布していた。芯材となる袖石は確認できなかったが、焚口の中央部に約70cmの被熱礫を検出した。カマド内は、焼土の含有量を基準に5層に分層した。

重複関係 調査区内で、他の遺構との重複関係はない。

遺物出土状況 カマドの焚口手前から大型の黒色土器B (No.64) が、焚口から北へ約1m付近で筭引金具が出土した (第33図206)。

時期 出土土器から、3期に比定できる。

(4) 4住 (第17図)

検出層位 第6層上面と推定 (第13図)

位置 J2グリッド

平面形・規模 礫と焼土を主体とする土層を検出し、カマドと判断した。南北幅約1.0mを測り、東西約1.9mの長軸を持ち、主軸はN86°Eである。

カマド 残存する壁高は、高さ約0.3mで、西に向かい緩やかに浅くなる煙道となる。焼土の含有量から覆土を4層に分層した。調査区壁面に30cm大の礫が点在し、焚口から煙道にかけて被熱した15cm大の礫が重なり合って検出された。これらを、カマドの袖石の崩落と判断した。

重複関係 他の遺構との重複関係はない。

遺物出土状況 覆土から、土器小破片が出土した。

時期 出土土器が少ないため断定できないが、1～2期の可能性がある。

(5) 5住 (第18図)

検出層位 不明 (記録なし)

位置 I6・I7グリッド

平面形・規模 遺構の大半は調査区外となり、全体像は不明である。調査区内では、北東隅、南東隅のみ確認し、南北約4.5mを測り、方形を呈すると推定される。主軸方向は不明である。

壁・覆土 残存する壁高は、約0.35mである。第18図には、試掘時に近接箇所である南区地点4で確認した土層を掲載したが、5住の覆土と対比することはできなかった。5住に伴う柱穴は検出できなかった。

カマド 調査区内で、カマドは検出できなかったが、北東隅で焼土の広がりを検出した。

重複関係 南東隅で、2住のカマドに切られる。

遺物出土状況 覆土から、多数の土器片が出土した。

時期 覆土から、1～4期の土器と7期の土器が出土した。2住に切られるため、1～4期に廃絶した可能性がある。

(6) 6住 (第19図)

検出層位 第9層上面 (第13図)

位置 C6・C7・D6・D7グリッド

平面形・規模 南北約5m×東西約5.4mを測り、方形を呈するが、南西隅付近で、西に約0.4mのふくらみをもつ形状となる。主軸方向はN10°Eである。

壁・覆土 残存する壁高は約0.4mで、緩やかに立ち上がる。覆土は3層を確認した。遺構の東半分で、焼土、炭化物と混じりあった礫を多数検出した。大小の大きさをもつ礫には被熱したものが含まれ、多数の須恵器、土師器、灰釉陶器等が礫と共に出土した。6住に伴う柱穴は検出できなかった。

カマド 調査区内で、カマドは検出できなかった。

重複関係 P12・13に切られる。土壙1との重複関係は不明である。

遺物出土状況 遺構東半分で、多量の礫と、焼土、炭化物とともに、完形品を含む多数の土器が出土した。

時期 出土土器から、8期に比定できる。

2 土壙

(1) 土壙1 (第19図)

検出層位 不明

位置 D6・D7グリッド

平面形・規模 6住の南東で、一部のみを確認した。全体像は不明である。南北約(0.5m)×東西約2.5mを測る。

壁・覆土 6住と重複するが切り合いが不明瞭であるため、覆土及び壁の立ち上がりは不明である。

重複関係 6住と重複するが、新旧は不明である。

時期 確実に土壙1出土といえる土器がなく、帰属時期は不明である。

その他 土壙1は現場調査段階で平面形及び規模から墓壙の可能性を考慮し命名したが、整理段階では積極的に墓壙であると認められる自然遺物・人工遺物はなかった。

3 ピット

(1) P1～4 (第20図)

検出層位 不明

位置 I2グリッド

平面形・規模 P1・3は円形を呈する。P2・4は調査区西壁にかかるため全体は不明だが、円形と推測できる。径約50cm、深さ13～23cmを測る。軸はほぼ南北で、3.0×2.4mの方形の配置をとるため、掘立柱建物跡の可能性はある。

重複関係 調査区内では、他の遺構との重複関係はない。

時期 出土土器がなく、帰属時期は不明である。

(2) P5～11 (第21図)

検出層位 不明

位置 G4・G5・H5グリッド

平面形・規模 南区北側で、平面プランのみ確認した。全て円形を呈し、径約30～50cmを測る。P5～9、11はややばらつきがあるものの西北西-東南東に並ぶ。遺構間隔はP5・7間が1.8m、P7・8間が1.5m、P8・9間が2.4m、P9・11間が2.7mと不均一である。検出面は不明であり、同時代のピットか判断できない。

重複関係 P6がP5を切る。他の遺構との重複関係はない。

時期 出土土器がなく、帰属時期は不明である。

(3) P12・13 (第19図)

検出層位 不明

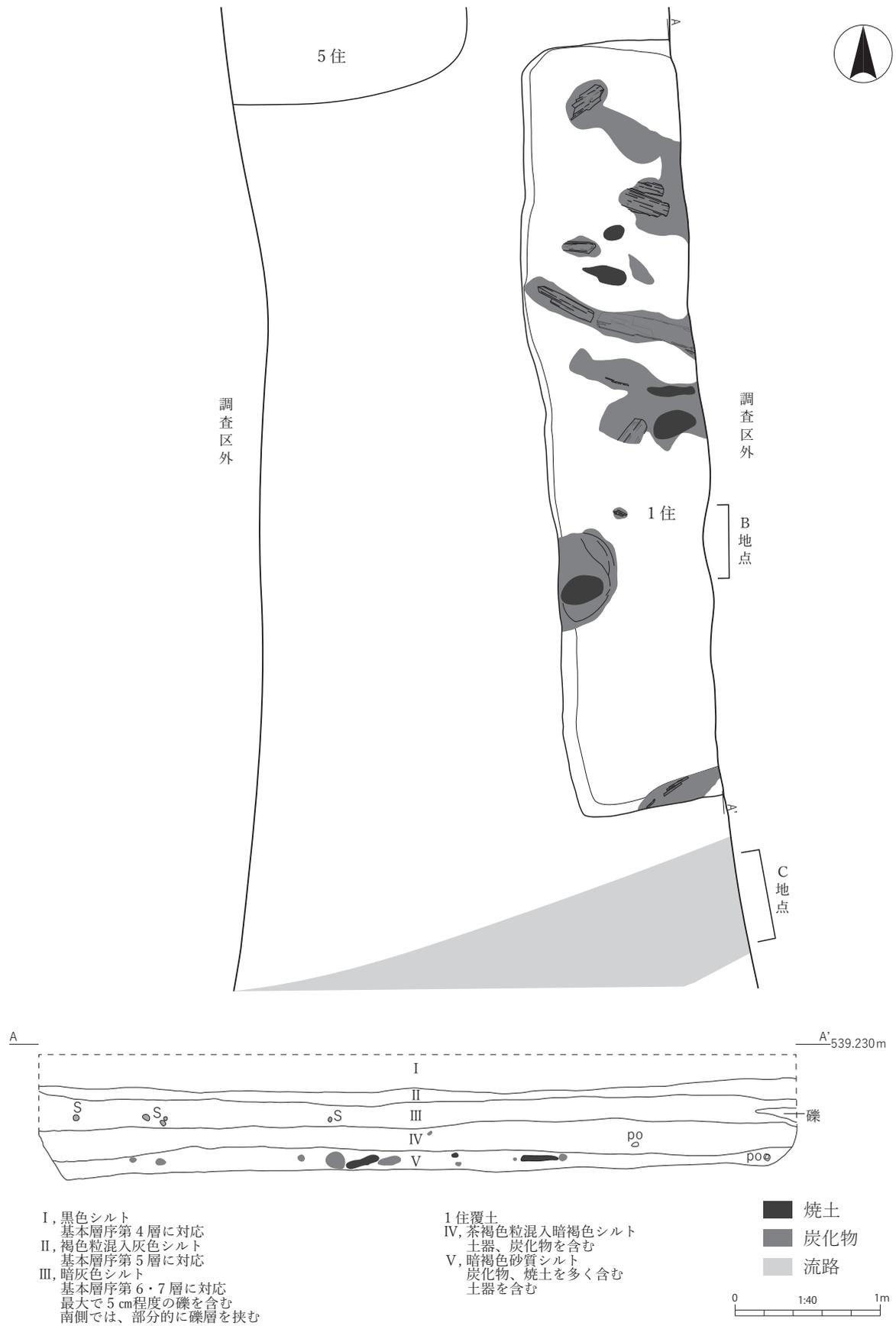
位置 C7グリッド

平面形・規模 調査区東壁にかかるため、全体像は不明である。P12は、調査区内で径約90cmを測る。

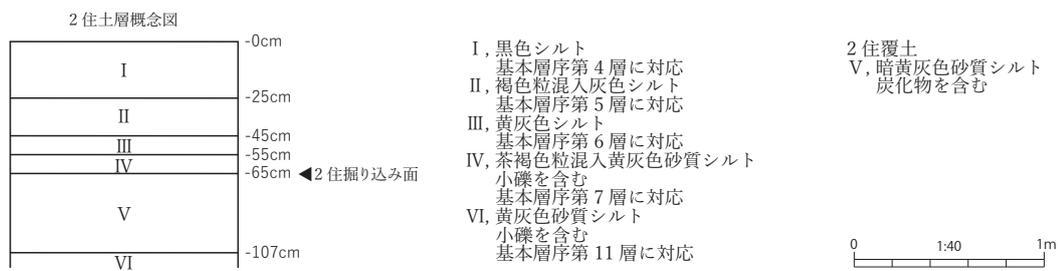
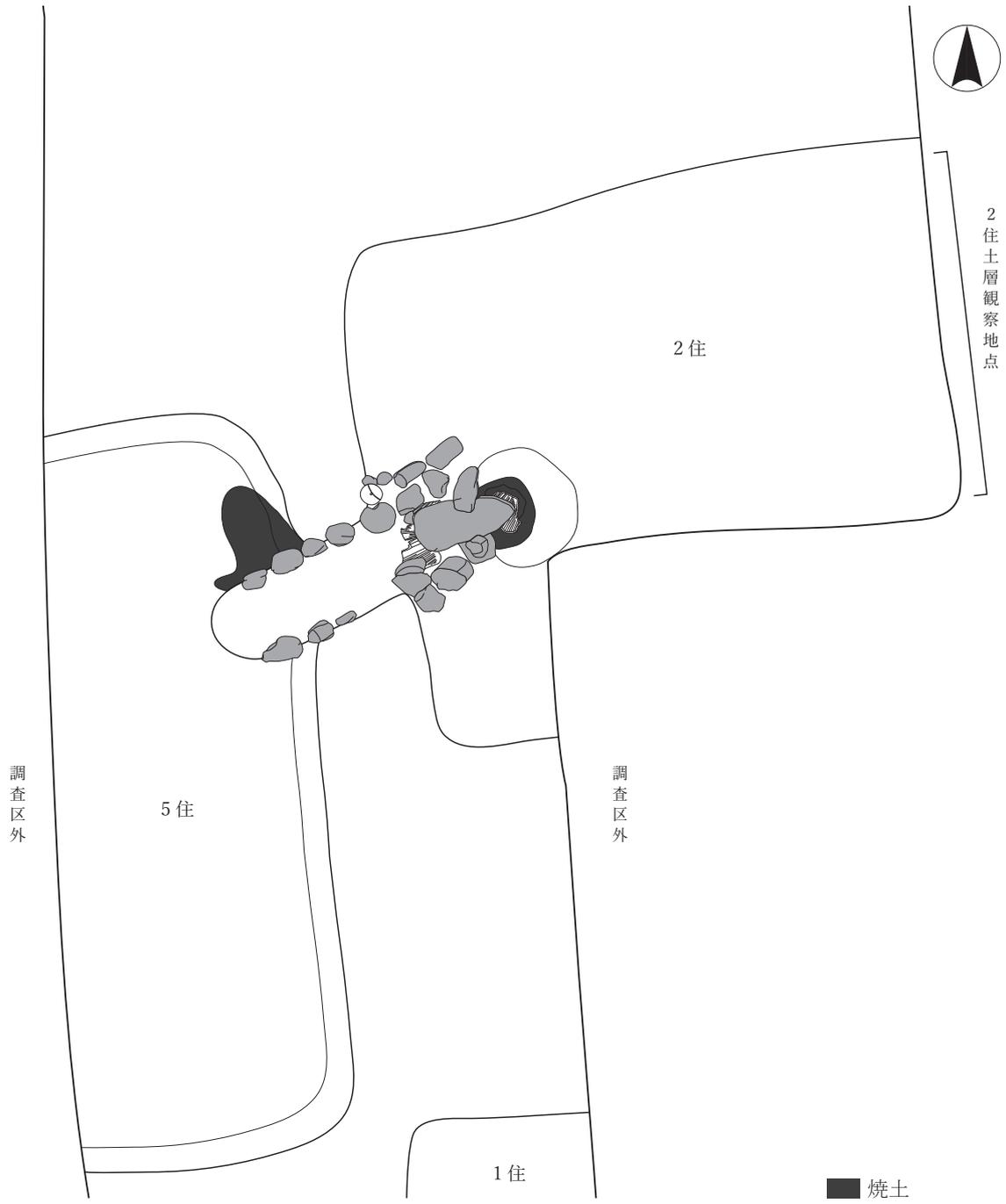
P13は、調査区内では東西方向にやや長い楕円形をとり、南北30～45cm、東西約50cmである。

重複関係 6住を切る。

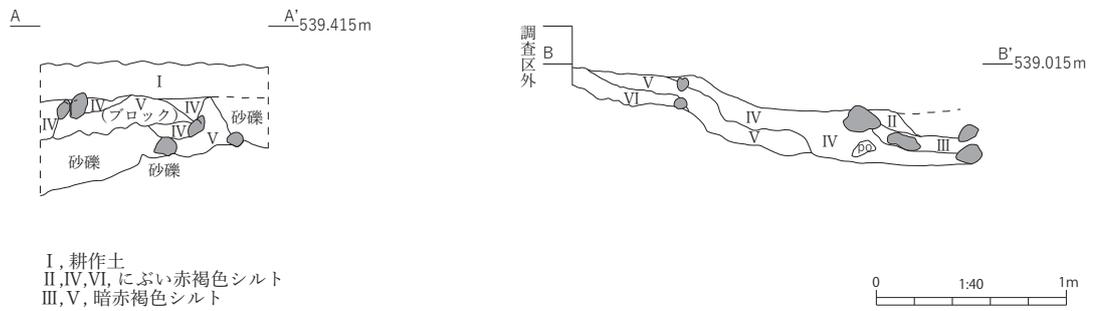
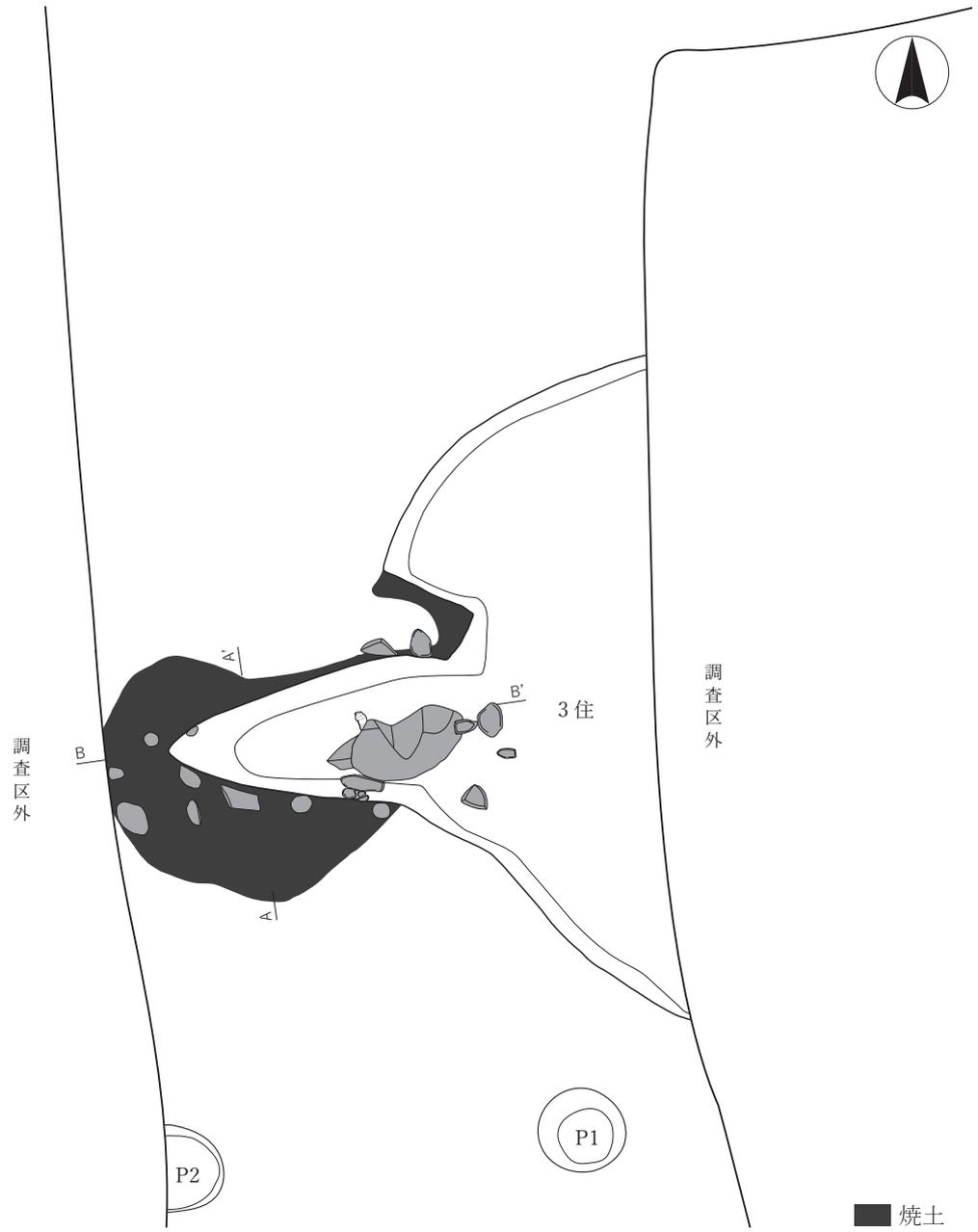
時期 出土土器がなく、帰属時期は不明である。



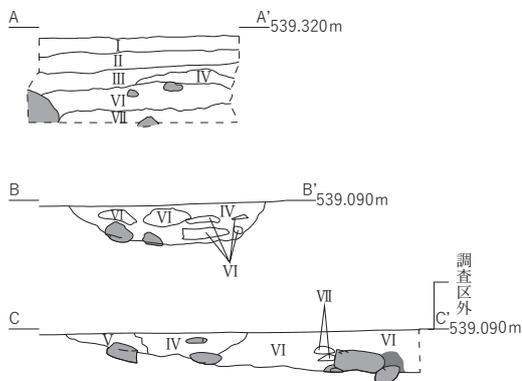
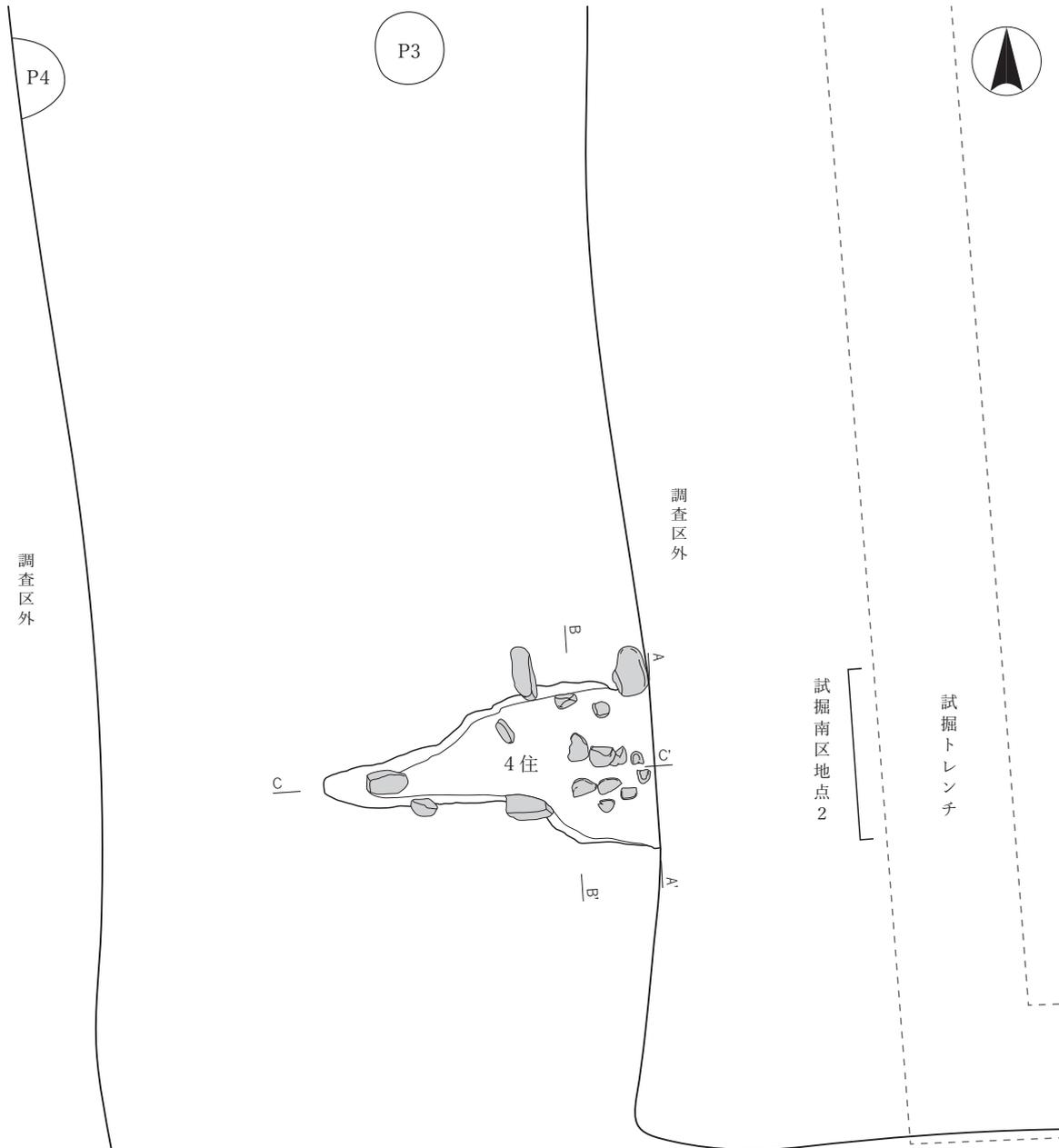
第14図 1住



第15図 2住



第16図 3住



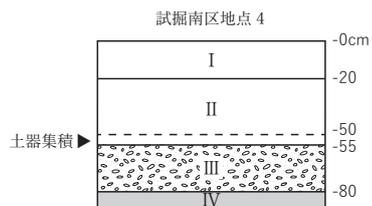
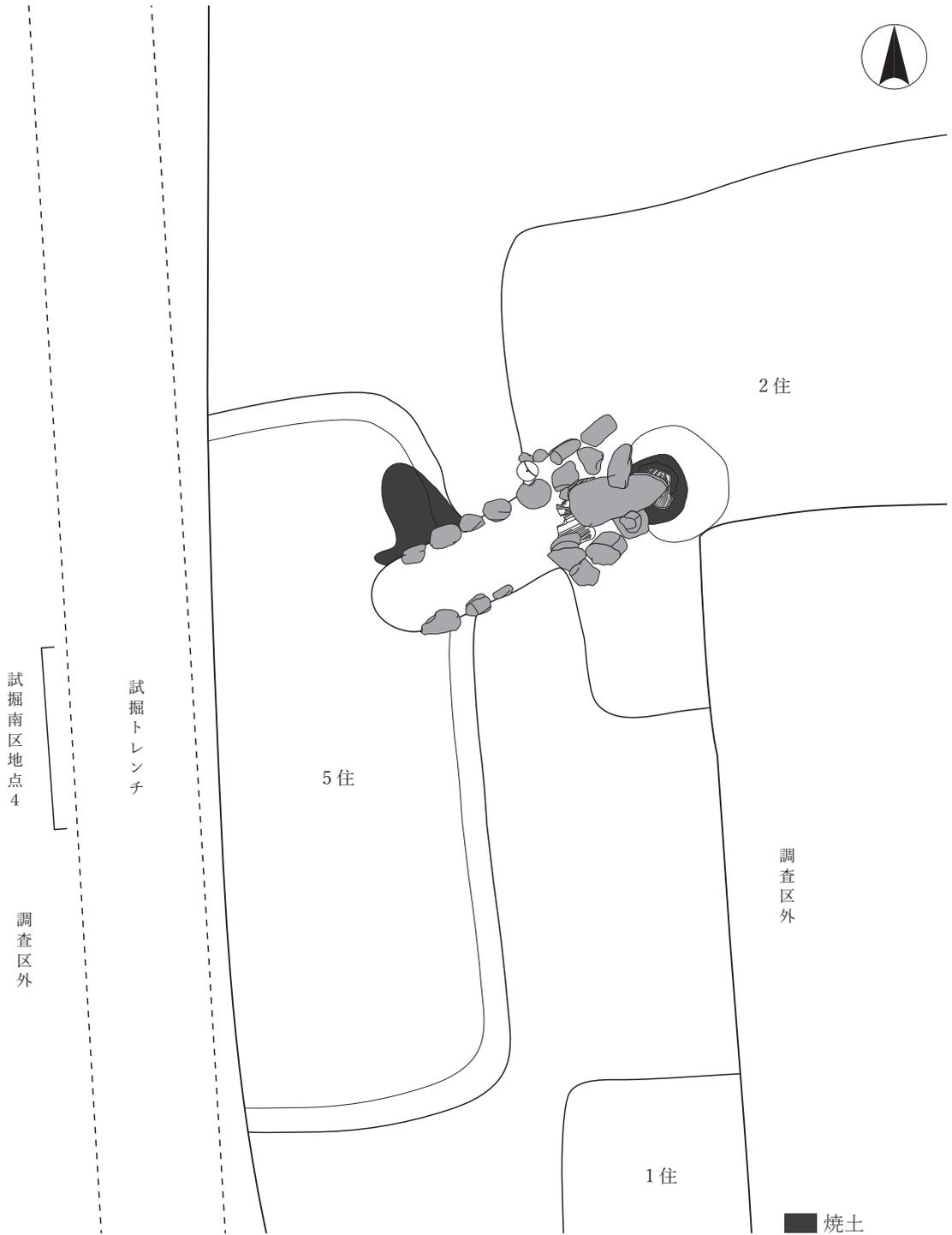
- I, 耕作土
基本層序第1層に対応
- II, 明灰色シルト
鉄分が集積する
基本層序第4層に対応
- III, 褐色シルト
基本層序第5層に対応

- 4住覆土
- IV, におい赤褐色砂質シルト
東壁では砂が優勢
VI層のブロックを含む
- V, 茶褐色砂
- VI, 暗赤褐色シルト
VII層のブロックを含む
- VII, におい赤褐色シルト

■ 炭化物



第17図 4住

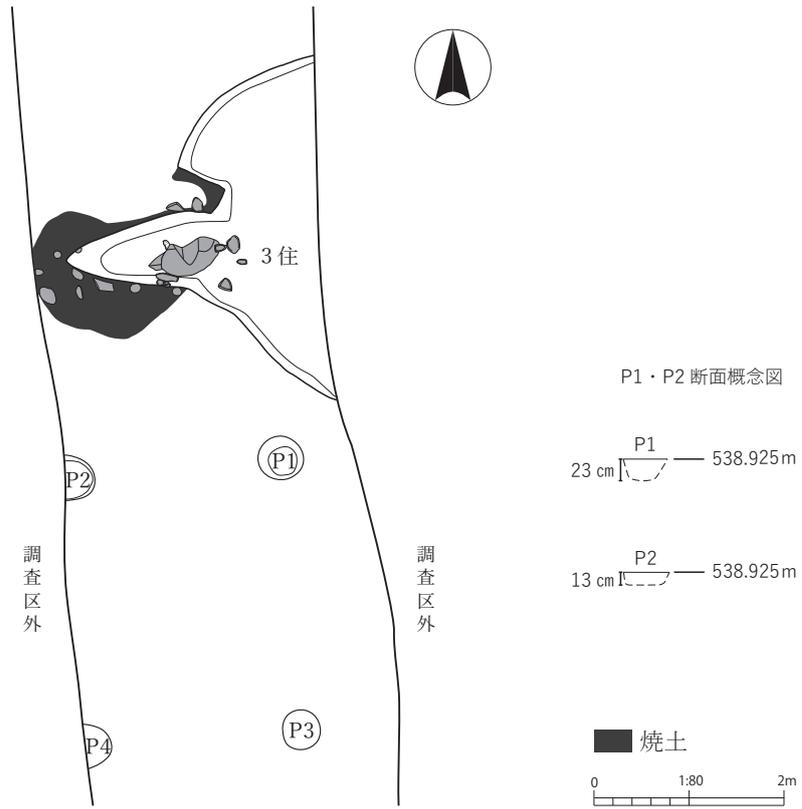


- I, 耕作土
- II, 暗褐色シルト
下部に土器が集積する
- III, 礫
- IV, 褐色シルト
鉄分が集積する

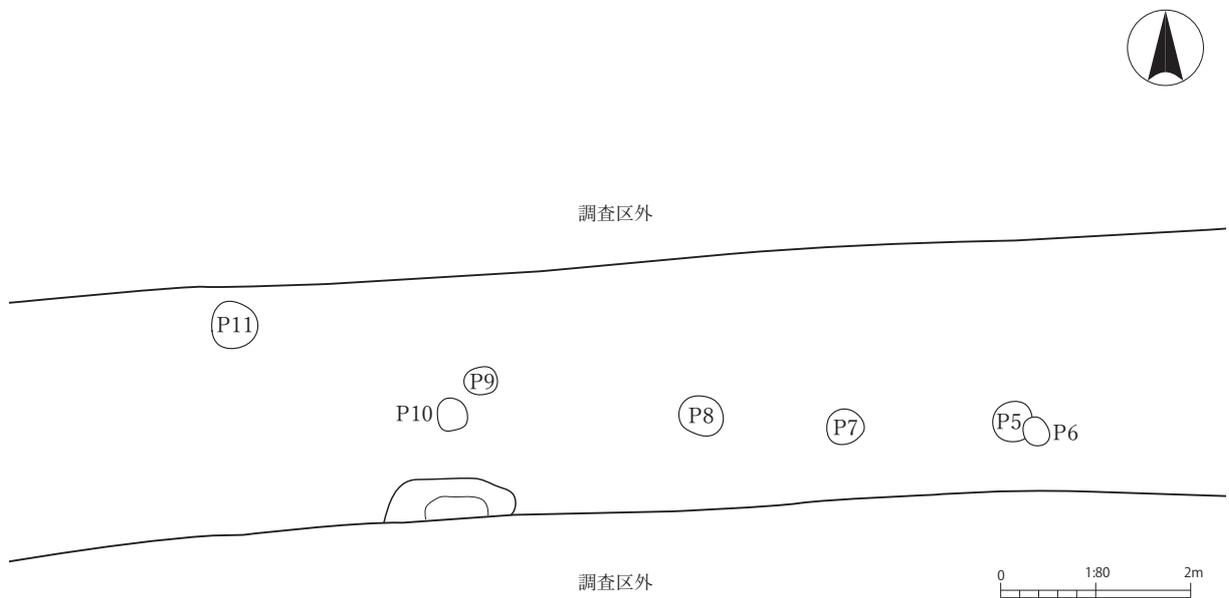
第18図 5住



第19図 6住、土壙1、P12・13



第20図 P 1 ~ 4



第21図 P 5 ~ 11

第6章 遺物

三枚橋遺跡第3次発掘調査では、6棟の竪穴建物跡から奈良、平安時代を中心とした遺物が出土した。以下に、各資料の特徴を記載する。

1 土器類

奈良、平安時代の土器類（土師器、黒色土器、須恵器、軟質須恵器、施釉陶器）の記載に際して、吉田川西遺跡報告書（長野県埋文セ1989）及び中央自動車道関連埋蔵文化財発掘調査の所見（小平1990）を基本に分類した（第5表）。段階区分は、中央自動車道関連埋蔵文化財発掘調査の所見（小平1990）を準用し、1～15期と記載する。

土器の種別は中央自動車道関連埋蔵文化財発掘調査の所見に拠り、種別として、土師器、黒色土器 A（内面のみにミガキ及び黒色処理を施す）、黒色土器 B（内外両面にミガキ及び黒色処理を施す）、須恵器、軟質須恵器、灰釉陶器に大別した。また、種類は用途に応じて、食膳具、煮炊具、貯蔵具に分類し、器形に応じて器種を設定した（第5表）。

（1）試掘

事前の試掘調査で出土した土器は、1～23の23点を資料化した（第23図）。内訳は、南区が1～13の13点、北区が14～23の10点となる。

南区では、1・2が須恵器坏で、1は、高台を有する坏 B となる。4は、須恵器短頸壺とした。体部上半は平坦に近く、頸部近くに2条の平行沈線を描出する。6は、把手付の煮炊具と考えられる。内面を黒色処理しているが、調整は粗い。8は、須恵器坏 A で、口縁部は欠損するが底部径が6.6cm とやや大きく、切り離しは回転糸切り未調整である。12は、須恵器甕 A で、口縁端部で粘土を折り返しているため、口縁部が肥厚する。

北区出土土器は、南区出土土器と比較すると食膳具で黒色土器 A・軟質須恵器が目立つ。23は、須恵器の把手である。前述のとおり、今回の調査で北区から検出した竪穴建物跡は6住のみであり、出土遺物も基本的に6住出土と記録している。黒色土器 A・軟質須恵器の存在は、後述する6住の時期比定に整合する。

第5表 器種分類

種類	種別	器種	説明
食膳具	土師器	坏 A	体部から口縁部にかけて直線的に開く。
		埴 A	体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。高台は長く外傾する傾向がある。
		鉢	非ロクロ成形の鉢、形態は多様である。
	黒色土器 A	坏 A	体部から口縁部にかけて直線的に開く。
		埴 A	体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。高台は長く外傾する傾向がある。
		埴	埴のうち、残存状況が悪く詳細な形態が不明確なもの。
		皿 B	直線的に伸びる扁平な体部に、高台を付した皿。類例は少ないが、口縁部を波状に波打たせたものもある。
	黒色土器 B	埴	埴のうち、残存状況が悪く詳細な形態が不明確なもの。
	須恵器	坏蓋 B	坏 B に対応する蓋で、口縁端部を折り曲げる。天井部に扁平なつまみを付ける。
		坏蓋	坏蓋のうち、残存状況が悪く詳細な形態が不明確なもの。
		坏 A	体部から口縁部にかけて直線的に開く。無高台となる。
		坏 B	箱形の体部に高台を付ける。
		坏	坏のうち、残存状況が悪く詳細な形態が不明確なもの。
		埴 B	体部の腰が強く張り、まるみをもって立ち上がり口縁部で外反する。高台を付す。金属器模倣と考えられる。
		高坏	浅めの坏部に高い脚台を付けた器。
	軟質須恵器	坏 A	須恵器坏 A の系譜だが、体部内面の見込部の指オサエがなく底部内面から体部にかけて滑らかに立ち上がる。
	灰釉陶器	埴 A	体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。高台は長く外傾する傾向がある。
		皿	直線的に伸びる扁平な体部をもつ。
	煮炊具	土師器	甕 A
甕 B			長胴甕のうち、器面をハケメで調整する長胴甕。
甕 C			体部外面をヘラケズリして薄く仕上げる、いわゆる武蔵型甕。
甕 D			長胴甕のうち、ロクロ（回転台）調整を行うもの。
甕			甕のうち、残存状況が悪く詳細な形態が不明確なもの。
小型甕 A			小型甕のうち、器面をナデ調整するもの。
小型甕 B			小型甕のうち、器面をハケ調整するもの。
小型甕 D			ロクロ調整の小型甕で体部にカキ目またはロクロ目を明瞭に残す。底部に糸切り痕を残す。
小型甕			小型甕のうち、残存状況が悪く詳細な形態が不明確なもの。
羽釜			体部に鏝状の突帯を付す羽釜のうち、残存状況が悪く詳細な形態が不明なもの。
貯蔵具			須恵器
	短頸壺 D	体部がやや長く、口縁部で強く外反して口縁帯を作る。	
	短頸壺	短頸壺のうち、残存状況が悪く詳細な形態が不明確なもの。	
	甕 A	卵形の体部に外反する口頸部を付すもの。	
	甕 D	平底の甕で肩部に凸帯を回し耳状の突起を付すもの。いわゆる凸帯付四耳壺。	
	甕	主として卵形の体部を持ち、外面にタタキ目、内面は当て具痕またはナデ調整を観察できる。	
	平瓶	扁平な体部で、口縁部を天井の一方の端に付す。	
	灰釉陶器	長頸壺	一般的呼称に従う。
		壺蓋	一般的呼称に従う。
		壺	灰釉陶器のうち、壺形の体部を持つもの。残存状況が悪く詳細な形態は不明確である。
		小瓶	一般的呼称に従う。
不明	不明	不明	残存状況が悪く、形態が不明なもの。

(2) 1住

1住出土土器類は、24～37の14点を資料化した(第24図)。24は、須恵器坏蓋Bである。ロクロ成形の後で頂部近くをケズリ調整し、端部は肥厚する。25・26は、須恵器坏Aで、いずれも底部が欠損する。復元口径は、15.6～15.8cmである。27～29は、須恵器坏Aの底部で、底部径は5.0～8.4cmである。30は、須恵器坏Bの底部で、回転糸切り後にナデ調整を施す。31・32は、同一個体の可能性が高い資料である。金属器模倣で、須恵器坏Bとした。31は、口縁部内面をケズリ取り、口縁部外面に沈線を1条巡らせる。体部は垂直に近く立ち上げており、中央に2条の沈線を巡らせる。体部下半から底部にかけては、直角に近く折り曲げる。32は、体部～底部が残存する。底部は回転ヘラ切りの後、回転ヘラケズリを施し、外側に強く開く高台を有する。33は、土師器甕Bで縦ハケ調整後に疎らな横ナデを施す。34は、土師器甕Cで外面を強くケズリ取り器壁を薄くする、いわゆる武蔵型甕である。口頸部の断面形状は、「く」字に近い。35は、土師器小型甕とした。口頸部には、横ナデを施す。36は、須恵器長頸壺の底部と高台である。37は、灰釉陶器の壺蓋と考えられる。小破片であるため器形全体は不明であるが、器厚は2～4mmと薄く、釉薬はハケ塗りである。

松本盆地では、須恵器坏Aの口径が15cmを超えるのは3期の特徴であり、この時期は須恵器坏の底部切り離しに回転ヘラ切りと回転糸切りが混在する。31・32の底部は回転ヘラ切りであり、この傾向に矛盾しない。土師器甕Cは、松本盆地古代2～8期に存在し、口頸部断面形態は「く」字から「コ」字へ変化する。34は、「く」字に近い形態であり、土師器甕Cでは古い特徴をもつ。これらの様相から、1住出土土器類は3期に比定できる。

(3) 2住

2住出土土器類は、38～62の25点を資料化した(第24～26図)。38・39は、須恵器坏蓋Bである。38は、胎土が緻密で明るい灰黄褐色を呈するため、他地域からの搬入品と考えられる。松本盆地では、美濃須衛窯産とされる須恵器の消長について中央自動車道関連埋蔵文化財発掘調査の所見でまとめられている(小平1990)。これによると、美濃須衛窯産の須恵器は1～5期に存在する。このうち坏蓋Bは2期に出現し、量を減じながら5期まで存在する。形態的な特徴としては、2期の坏蓋Bは天井の高い器形でつまみの径が大きく扁平である。3・4期になると器形が扁平になり、つまみは径が小さく厚みをもつ。38の形態的な特徴は、3・4期に該当する。39は、胎土が灰色～赤褐色で、38と区別でき、在地窯産と考えられる。40～42は、須恵器坏Aである。40は、口径14.8cmであり、やや大型である。41は、口縁端部を薄く仕上げている。43・44は、須恵器坏Bである。いずれも底部は回転糸切り後にヘラケズリをする。45・46は、全体的な形態の詳細が不明であったため詳細分類できなかった須恵器坏である。47～49は、器面をナデ調整する土師器甕Aである。47は、内面底部付近がハケメに近い調整となっている。48・49は、1住・2住を主として遺構間接合した個体である。50～52は、器面をハケメで調整する土師器甕Bである。50・51は、口縁部～体部最大径までが残存している。いずれも頸部で折れるように強く外反するやや短めの口頸部をもつ。50は、外面に縦方向のハケメ調整を施した後、体部上半に4段の横方向のナデ調整を施す。ハケメの単位は51に比較して長い。51は、外面にやや短めの単位で縦

方向のハケメ調整を施す。内面調整は、基本的に横方向のナデまたはハケメである。53～56は、外面を強くケズリ取り器壁を薄くする土師器甕Cで、いずれも胎土は緻密で暗褐色であるという特徴をもつ。53は、頸部の屈曲が緩やかで断面形態は「く」字と「コ」字の中間的な形態である。54～56は同一個体の可能性のある資料で、頸部の断面形態は「コ」字に近い。57～59は、土師器小型甕である。57は、頸部の屈曲は強く、外面は横方向のナデ調整が施される。58は、口縁部から体部にかけてロクロナデ状の横ナデが広く施される。頸部の屈曲は「く」字状で強い。59は、内外面をハケメ状の工具で調整する。60は、底部付近のみが残存している須恵器で、内外面がロクロ調整であることから短頸壺とした。61は、須恵器甕の体部で外面にタタキ目、内面には同心円状の当具痕が残る。62は、須恵器平瓶の体部上半で、胎土は明灰色である。

食膳具では、須恵器坏Aの口径が13～15cmに分布し、3～4期の特徴といえる。これは、38の搬入品須恵器坏蓋Bの時期比定とも矛盾しない。煮炊具では、ナデ調整の土師器甕Aは1・2期に主体があり3期以降急激に減少して5期まで存在するとされる。これに対し、ハケメ調整の土師器甕Bは、1～10期に存在する。2住では、50・51の器形・調整の特徴が3～4期に比定できる。土師器甕Cは、頸部断面形態が「コ」字に近い段階になっている。また、4期以降に存在するロクロ調整の小型甕Dも存在する。これらの様相から、2住出土土器類は3～4期と考えられる。

(4) 3住

3住出土土器類は、63～87の25点を資料化した(第26・27図)。63は、ロクロ成形の土師器坏Aの底部である。64は、鉢形土器である。口径は26.6cmを測り、内外面ともにナデ調整後にミガキを施し黒色処理している。口縁部と体部上半の境界付近では、口縁部外面をケズリとって段を作出する。この類型は、古墳時代後半に存在する器種である。65・66は、ともにロクロ成形の黒色土器Aで、65は碗、66は皿Bで高台が剥落している。67～69は、須恵器坏蓋Bである。67は、天井部が高く端部が内側に折れる。これに対し、68は、天井部が低く扁平な器形で、端部はわずかに外反する。69は、端部の折れがほとんど認められない。70～72は、須恵器坏Aである。70は、口径15.2cmとやや大きい。須恵器坏Aで口径15cmを上回る法量は、3期にみられる。71・72は、ともに底部破片で切り離しは回転糸切りである。73は、軟質須恵器坏Aである。胎土は灰褐色で、内面は体部から底部にかけて緩やかに移行する。74は、ナデ調整を施す土師器甕Aの口縁部である。75は、ハケメ調整を施す土師器甕Bで、頸部の屈曲はなく、口縁部が外に向かって開く。ハケメ単位の長さは短い。76・77は、土師器小型甕Aで、いずれもナデ調整を主体とする。78～80は、土師器小型甕Bで、底部破片である。78・79は、同一個体の可能性がある。81は、土師器小型甕Dの底部破片で、回転糸切りの痕跡がある。82は、須恵器長頸壺の底部破片で、高台を有する。高台は、外側で接地している。83は、須恵器短頸壺の口縁部と判断した。84～87は、須恵器甕、このうち84～86は、口頸部形態から須恵器甕Aとした。87は、体部破片で、内面はナデ調整を施しており当具痕はない。

3住出土土器類を概観すると、64・70等の古墳時代の伝統を引く3期前後の一群と、65・66・73にみられる7・8期の一群が存在する。出土状況から検討すると、3住でカマド付近から出土した資料は、

第6章 遺物

67・75・81・84である。このうち67は、須恵器坏蓋Bであり、前述では3期の一群に含まれる。75は、ナデ調整の土師器甕であるため単体では詳細な時期を決定しがたいが、67の年代観とは矛盾しない。このことから、3住の廃絶は3期に比定でき、7・8期の土器群が客体的に存在する理由は別に想定する必要はある。

(5) 4住

4住出土土器類は、88・89の2点を資料化した(第27図)。88は、須恵器坏Aの底部で、底部切り離しでは回転ヘラ切りの後にヘラ削りを施す。松本盆地では、須恵器坏Aの回転ヘラ切りは1～4期にみられ、その割合は3・4期で減少し5期には回転糸切りにかわる。回転ヘラ切り後にヘラ削り調整する特徴は、1・2期に存在し、1期で割合が高い。89は、土師器甕Dの口縁部破片である。小破片のため、器形全体は不明である。

4住出土土器類は2点の破片のみであるため、ここから時期を検討することは慎重にならなければならないが、88の特徴からは1・2期の可能性が高いといえる。

(6) 5住

5住出土土器類は、90～102の13点を資料化した(第28図)。90・91は、黒色土器Aで、90は坏Aの底部、91は壺の口縁～体部である。92・93は、軟質須恵器坏Aである。いずれも色調は乳白色に近い。93は、内面底部付近に一周する凹線を作成することで体部と底部を分けている。これは、須恵器坏Aの成形意識に共通すると考えられる。94～96は、土師器甕である。94・95は、内外面をナデ調整する土師器甕Aで、いずれも体部は長い単位で縦方向にナデ調整している。96は、口頸部のみが残存しており体部調整が不明のため、土師器甕とした。97～101は、土師器小型甕とした。97・98は、体部に縦方向のやや長めのナデ調整を施す土師器小型甕Aである。99・100は、体部にハケメ調整を施す土師器小型甕Bで、99は、ハケメ調整後に部分的にナデ調整をしている。100は、体部下半～底部の破片であり、底部付近にやや短めの縦方向のハケメ調整を施している。101は、土師器小型甕の口縁部破片で、体部調整は不明である。102は、須恵器甕の体部破片である。

5住出土土器類を概観すると、食膳具では7・8期に存在する軟質須恵器坏Aに、黒色土器A坏A・壺が伴う。黒色土器A坏Aは、6～8期に食器の主体となり、黒色土器A壺は、7～15期に主体的に使用される。このことから、食膳具は7・8期に比定できる。続いて煮炊具では、土師器甕・小型甕を8点資料化している。器面調整では、ナデ調整及びハケメ調整が主体的である。ナデ調整の土師器甕及びハケメ調整の土師器小型甕は1～5期、ナデ調整の土師器小型甕は1～4期に存在する。このため、煮炊具は食膳具よりも古い様相を呈するといえる。したがって、5住は4・5期に廃絶し、7期までに埋没したと考えられる。

(7) 6住

6住出土土器類は、103～203の101点を資料化した(第29～32図)。種別は、土師器、黒色土器A・B、

須恵器、軟質須恵器、灰釉陶器で構成される。このうち軟質須恵器が30点 (29.7%) を占め、次いで須恵器が25点 (24.8%)、黒色土器 A が21点 (20.8%)、土師器が15点 (14.9%) となっている (第6表)。

種別・器種組成は、第7表に示した。最も多く出土したのは軟質須恵器杯 A で、30点 (29.7%) となっている。6住出土の軟質須恵器は、全点が杯 A である。軟質須恵器杯 A の法量をみると、口径を確認できた資料は23点で、11.6～15.8cm (平均13.3cm、標準偏差1.1) に分布する。このうち12.0～14.9cm に20点が分布しており、86.9%を占める。また、口径・器高を確認できた9点を、第22図に示した。9点は、口径12.2～13.7cm、器高3.3～4.1cm の範囲に分布し、集約的であるといえる。なお、中央自動車道関連埋蔵文化財発掘調査の所見 (小平1990) では軟質須恵器杯 A の口径は12.7～13.7cm に分布しており、6住の口径分布と整合的である。なお、軟質須恵器杯 A では、墨書土器を3点 (153～155) 確認した。153は、「+」の上に「×」を重ね「米」字状の記号を描出したものと判断した。154・155は、文字の可能性が高いが、破片資料で残存部分が少なく全容は不明である。

軟質須恵器杯 A に次いで、黒色土器 A 杯 A が13点 (12.9%) と多い。このうち口径を確認できたものが7点で、そのうち5点が12.0～14.9cm (平均14.3cm、標準偏差1.9) に分布する。口径・器高分布では、4点を示した。このうち2点は軟質須恵器杯 A の分布範囲に収まる。これ以外の2点は、口径14.0cm・器高5.0cm を超える大型品である。中央自動車道関連埋蔵文化財発掘調査の所見 (小平1990) では5期以降に黒色土器 A 杯 A は法量分化し、口径17.0cm 以上・器高4.0cm 以上の大型品とそれ以外の小型品に2別できる。6～8期で、この傾向は定着している。今回の6住から出土した黒色土器 A 杯 A のうち、111・112は法量分化した大型品に該当すると考えられる。なお、黒色土器 A 杯 A のうち115は、非クロコ成形で外面は横方向のケズリ調整を施しており、成形・調整技法が他と異なる。

続いて、須恵器杯が全12点出土した。内訳は、須恵器杯 A が7点 (6.9%)、須恵器杯 B が4点 (4.0%)、細別不明が1点 (1.0%) である。一見して須恵器杯 A が多いが、完形品はない。底部切り離しは、須恵器杯 A・B ともに回転糸切りが主体であるが、141は、回転ヘラ切りである。

この他、杯では土師器杯 A が4点 (4.0%) 出土している。この4点のうち口径のわかる資料は2点で、

第6表 種別組成

種別	点数	割合
土師器	15	14.9%
黒色土器 A	21	20.8%
黒色土器 B	3	3.0%
須恵器	25	24.8%
軟質須恵器	30	29.7%
灰釉陶器	7	6.9%
総計	101	100.0%

第7表 種別・器種組成

種別・器種	点数	割合
土師器杯 A	4	4.0%
土師器碗 A	1	1.0%
黒色土器 A 杯 A	13	12.9%
黒色土器 A 碗 A	5	5.0%
黒色土器 A 碗	3	3.0%
黒色土器 B 碗	3	3.0%
須恵器杯蓋 B	1	1.0%
須恵器杯 A	7	6.9%
須恵器杯 B	4	4.0%
須恵器杯	1	1.0%
須恵器高杯	1	1.0%
軟質須恵器杯 A	30	29.7%
灰釉陶器碗 A	3	3.0%
灰釉陶器皿	1	1.0%
土師器甕 B	1	1.0%
土師器甕 D	4	4.0%
土師器甕	2	2.0%
土師器小型甕 D	3	3.0%
須恵器甕 A	2	2.0%
須恵器甕 D	3	3.0%
須恵器甕	6	5.9%
灰釉陶器長頸壺	1	1.0%
灰釉陶器壺	1	1.0%
灰釉陶器小瓶 (手付瓶)	1	1.0%
総計	101	100.0%

第6章 遺物

まだ坏Aで主体とはならない。6住から全種別を合算した坏類は59点(58.4%)出土しており、過半数を占める。また、土師器碗A、黒色土器A・B碗も複数個体が出土している。

食膳具では、灰釉陶器碗A及び皿が4点出土した。176・178・179は、施釉がハケ塗りである。177は、施釉部分が残存していないため、施釉方法は不明であった。碗Aは、口縁端部が外反し、皿ではこの外反の程度が強い。これらの形態的傾向は、美濃ひかりがおかの光ヶ丘1号窯式で特徴的である。灰釉陶器では、この他に貯蔵具として壺瓶類が出土した。

203は、小瓶(手付瓶)の把手接着部分と判断したが、把手自体は欠損している。

煮炊具の土師器甕・小型甕では、外面口クロ調整の甕D・小型甕Dが目立つ。187は、外面カキ目の小型甕Dで、189が同一個体となる可能性がある。

貯蔵具では、須恵器甕Dが3点出土した。192・194は、耳部が残存している。いずれも断面形態では穿孔はない。平面形態は、粘土を貼り付けて断面が台形状になるよう整形したのみで、整った四角形・三角形の形状はとらない。凸帯の断面形態は、三角形・四角形となっている。

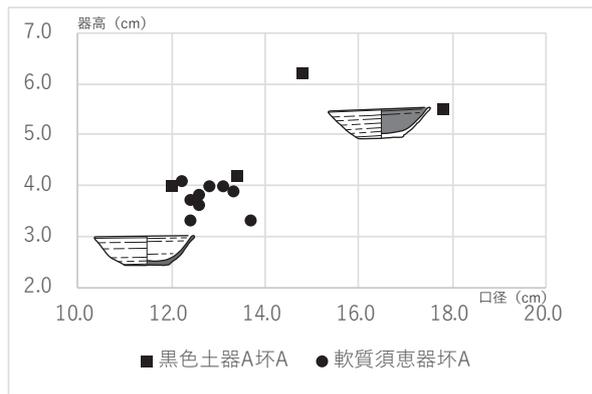
6住出土土器類の最大の特徴は、土器組成での坏類の多さである。中でも軟質須恵器坏Aの割合が高く、ここに黒色土器A坏A、須恵器坏A・B、土師器坏Aが加わる。須恵器坏A・Bは残るものの、新しい要素として土師器坏Aが一定量加わることから、6住を8期に比定したい。なお、灰釉陶器碗A・皿にみられる光ヶ丘1号窯式が土器組成に加わることで、須恵器甕Dの存在及び形態の特徴は、この時期比定に整合する。

2 石製品

石製品は2点を図化した(第33図)。また、図示した資料以外に黒曜石剥片、凹部を多く持つ礫も出土している。

204は、2住出土の砂岩製の砥石である。10.3×(20.8)cmの長方形で、最大厚3.3cmの板状を呈する。砥石として使用したのは3面で、研磨の方向に規則性は見られない。

205は、6住出土で凹石・敲石とした。楕円形の安山岩の中央に直径約11cm、深さ約5.5cmの凹部を作り出している。6住は、覆土中に多量の礫が包含されており、205もこれらの礫に混入していた。中央部で欠損していることと併せて、二次的な堆積である可能性が高い。



第22図 6住出土土器口径・器高分布

3 金属製品

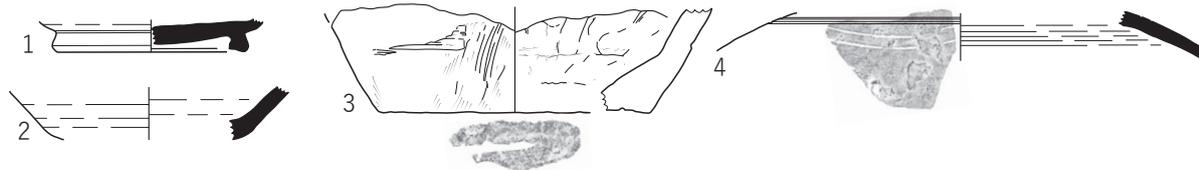
金属製品としては、鉄製品が4点出土した(第33図)。記載に際しては、吉田川西遺跡報告書(長野県埋文セ1989)を参考にした。

206は、3住出土の芋引金具である。刃部幅は8.6cmで、長野県内出土の芋引金具の刃部幅分布が7～11cmであることから、やや小型といえる。肩部は丸みをおび、刃部は直線を基本とするが少し丸みをおびる。刃端部は3mm程度の厚みで平坦である。厚みは5mm程度で、断面は長方形を呈する。安曇野市では、菖蒲平^{しょうぶだいら}窯跡群菖蒲平10地区1号住居址(豊科町東山遺跡調査会編1999)、三角原遺跡^{さんかくぼら}3号住居跡(長野県埋文セ2005)、堀金小学校付近遺跡^{ほりがね}4号住居(堀金村教委2005)に出土例がある。

207～209は、釘である。207は、基部を単に曲げて頭部にしたもので、断面は方形である。頭部の約1寸が残存しているのみで、全長は不明である。吉田川西遺跡のⅢ類に該当する。208・209は、全長4寸の鉄釘で断面は方形を呈し、基部上面に皿を載せている。吉田川西遺跡ではⅦ類に該当し、古代の遺構から出土している。いずれも皿の残存状況が良好でないため正確な形状は不明確であるが、おそらく円形になると考えられる。保存処理前に皿部分が剥落したため、基部と接合してあることが確認できた。断面は方形を呈する。

第6章 遺物

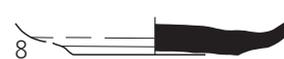
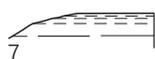
南区試掘
Eトレンチ



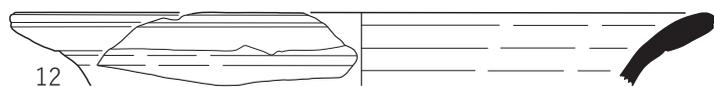
Nトレンチ



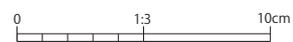
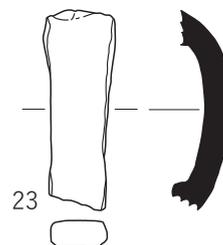
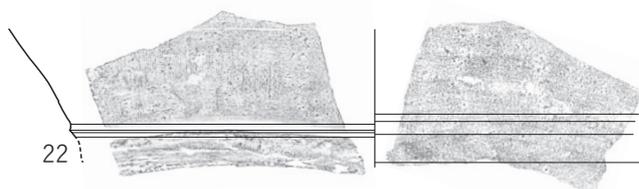
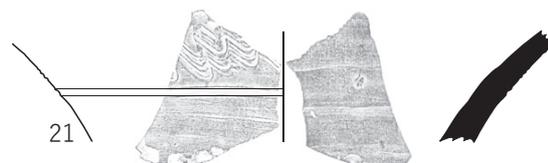
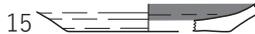
Wトレンチ



不明

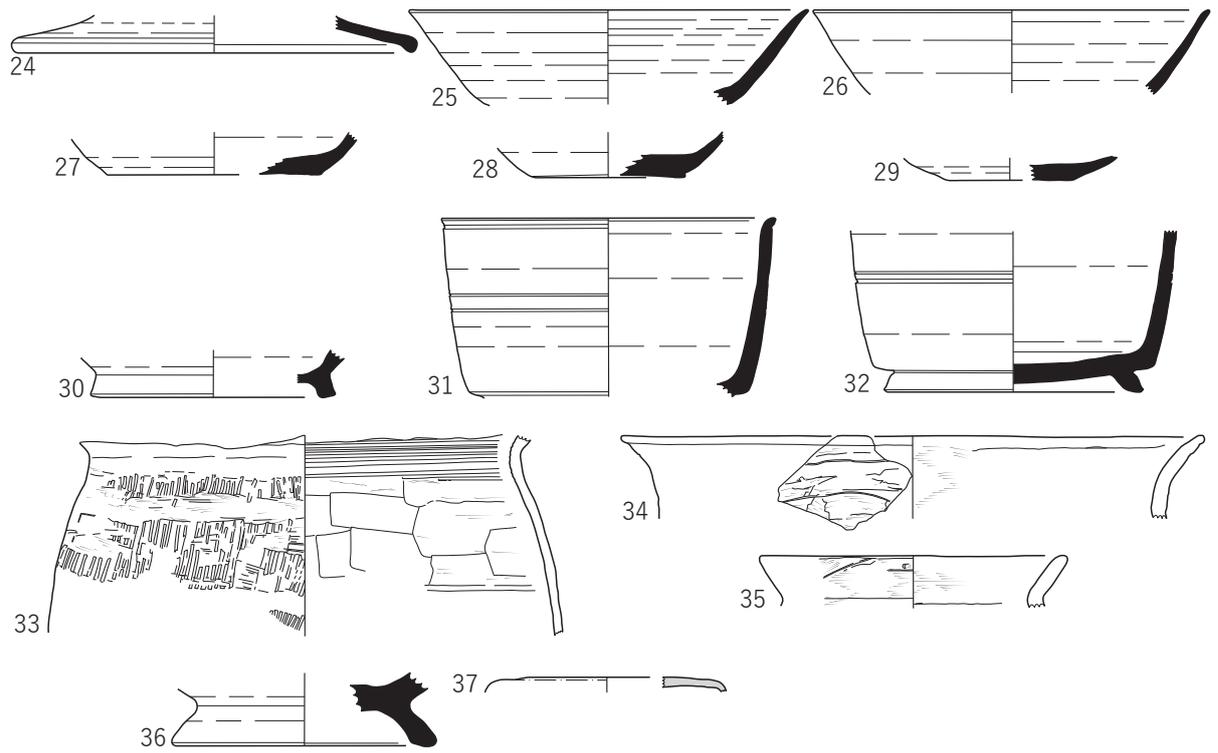


北区試掘
不明

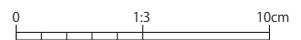
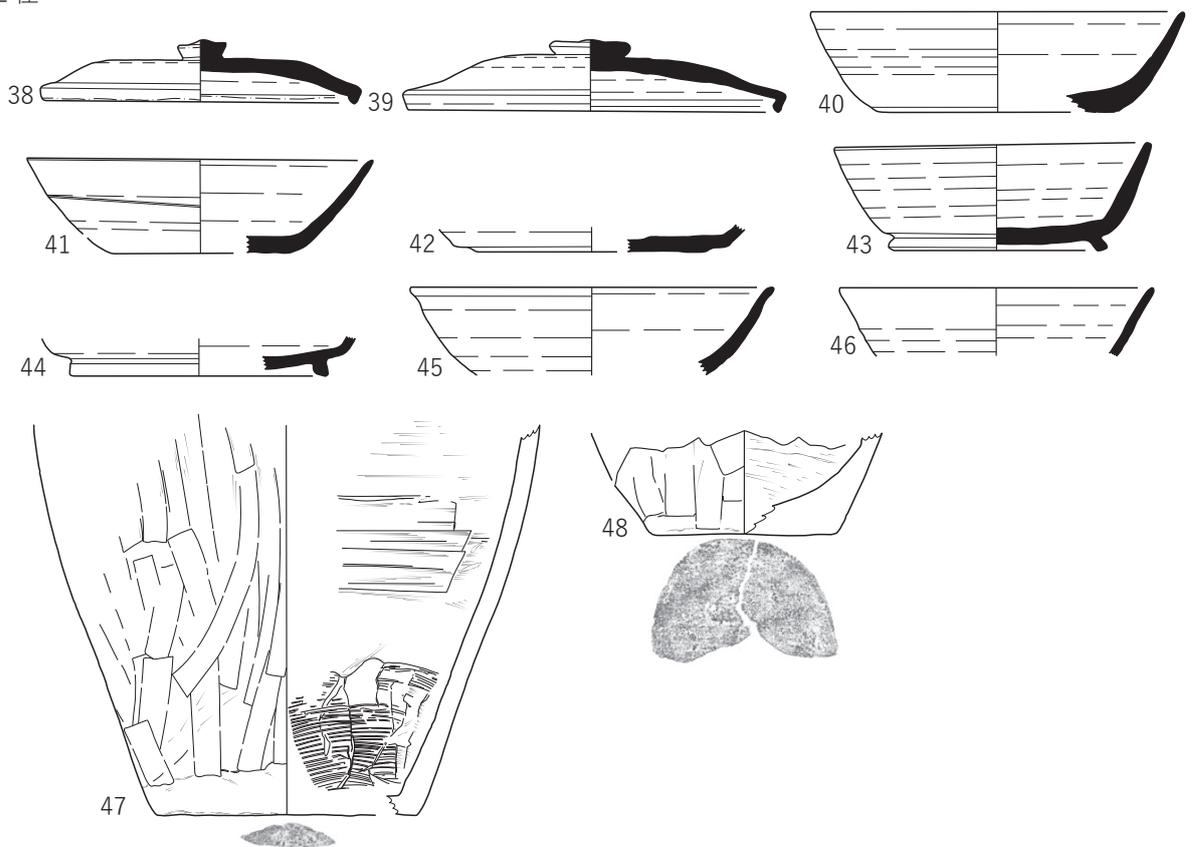


第23図 土器類 (試掘)

1 住

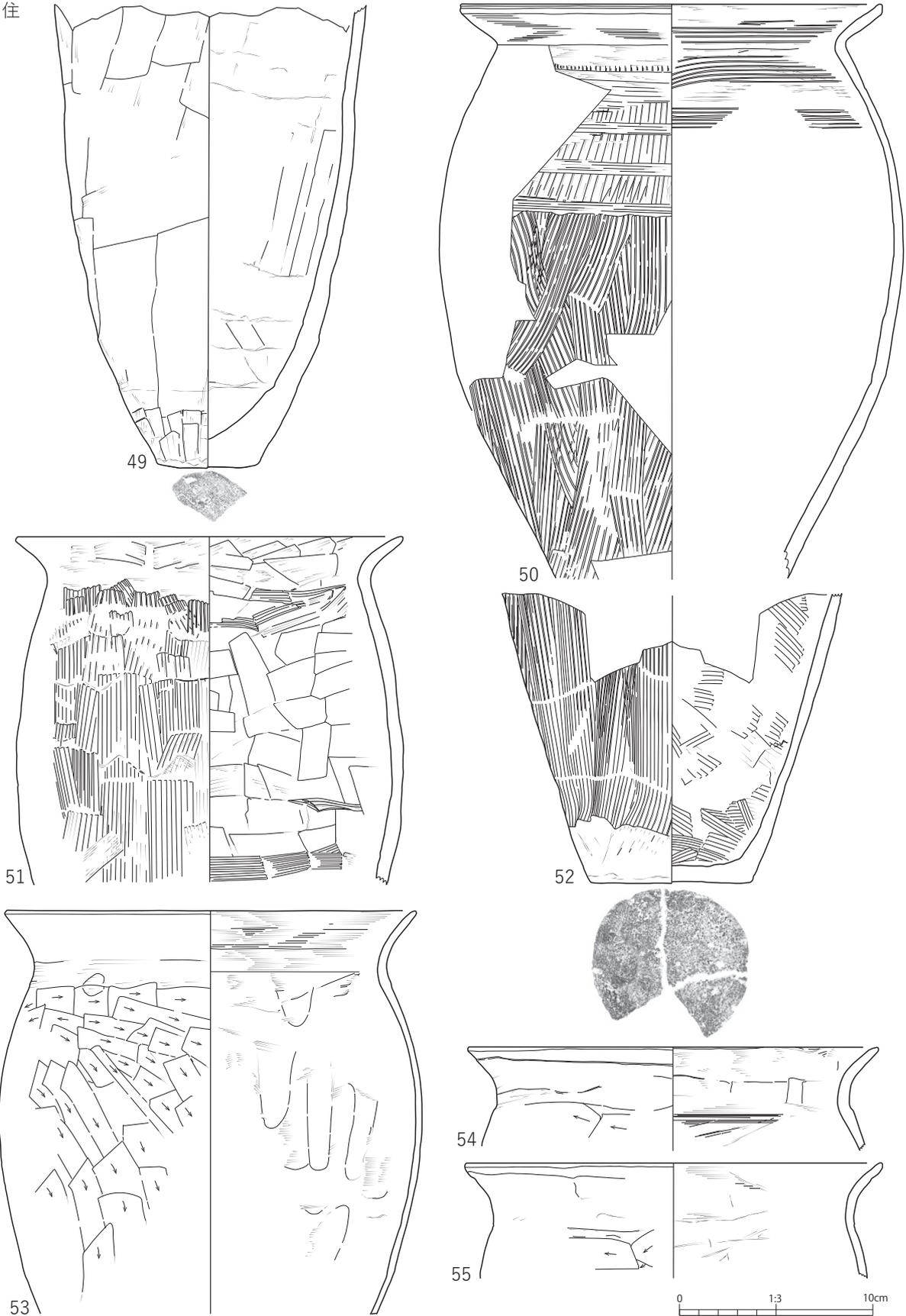


2 住

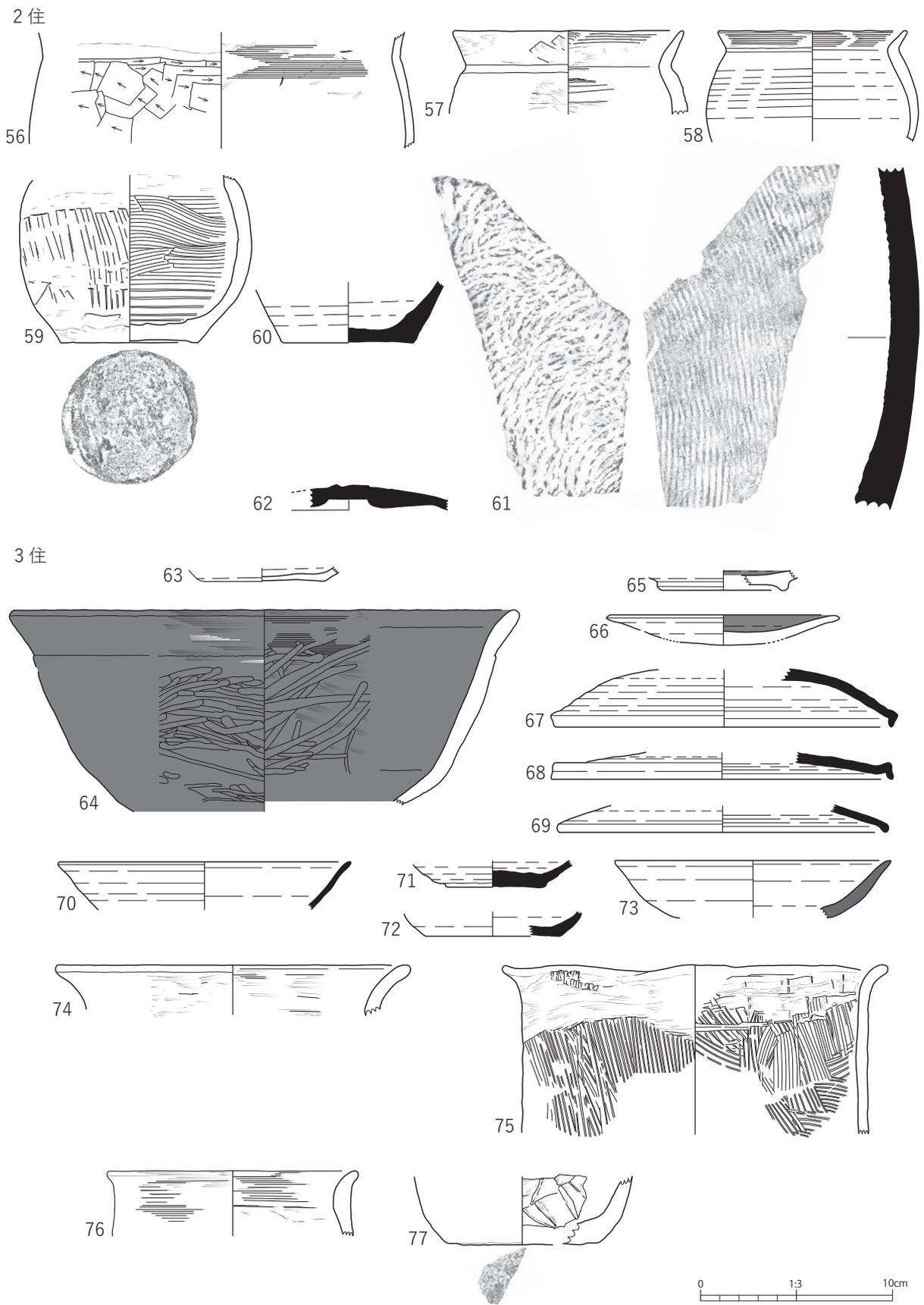


第24図 土器類 (1住・2住)

2住



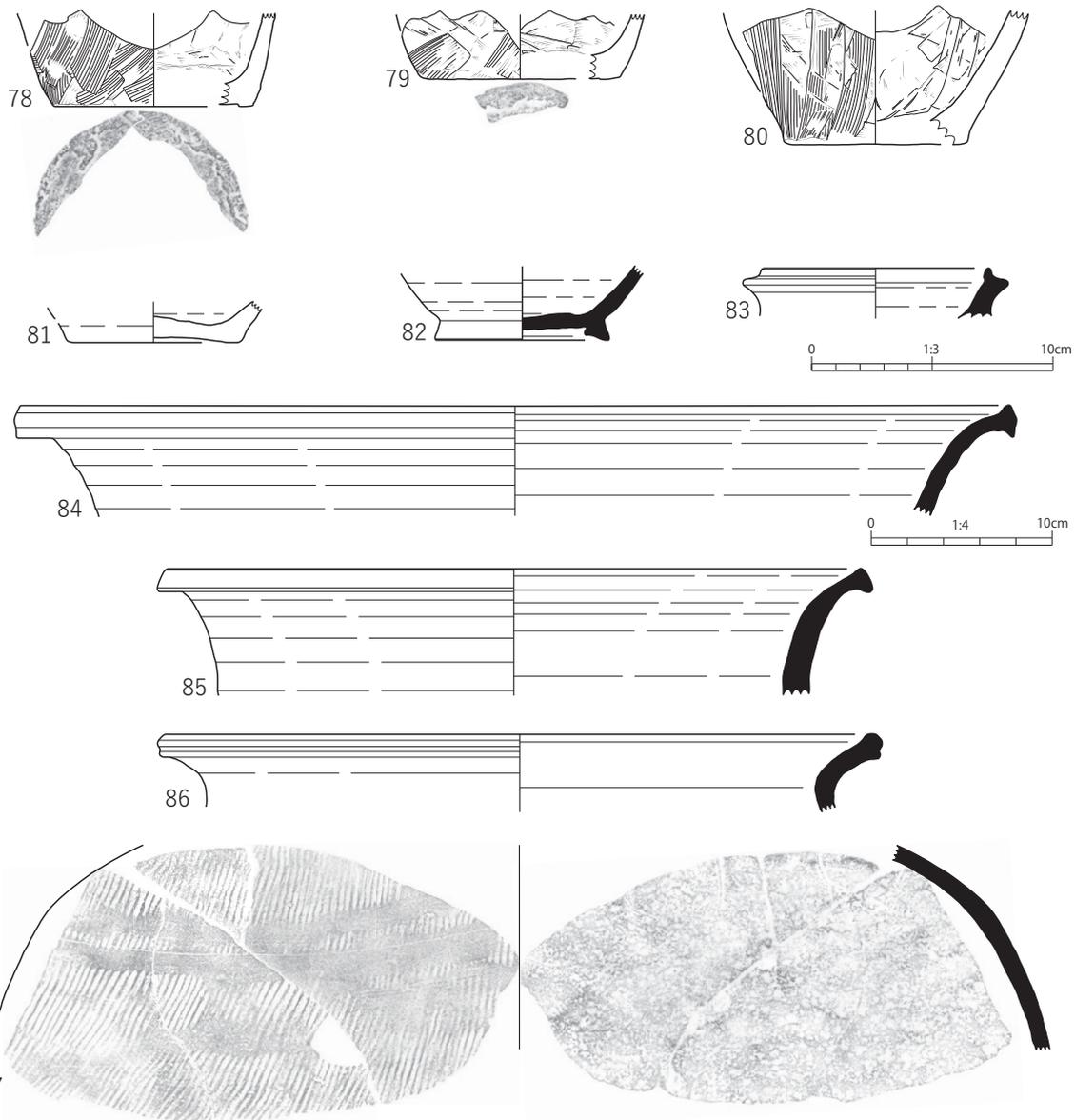
第25図 土器類（2住）



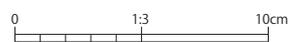
第26図 土器類 (2住・3住)

第6章 遺物

3住

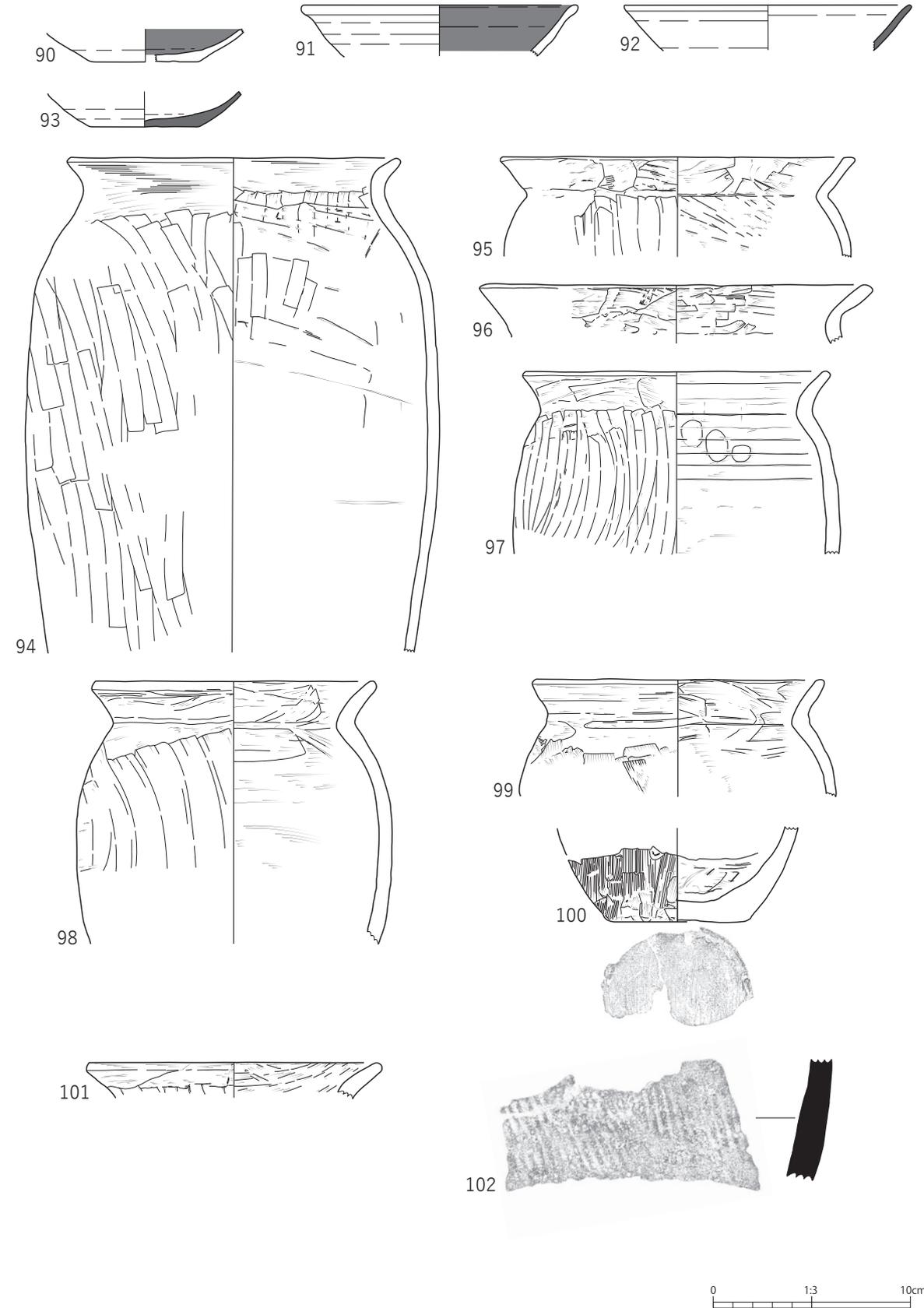


4住

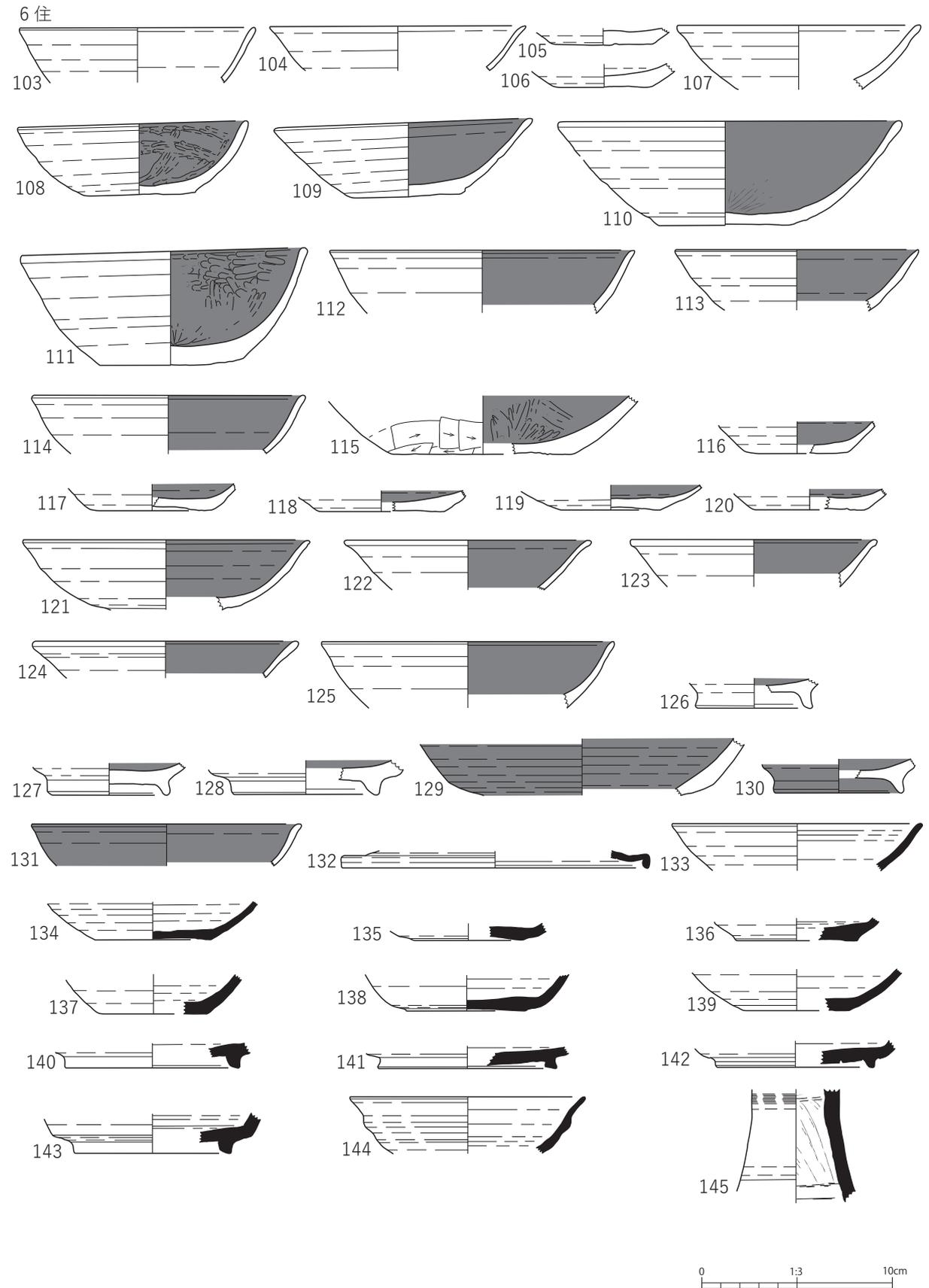


第27図 土器類（3住・4住）

5住

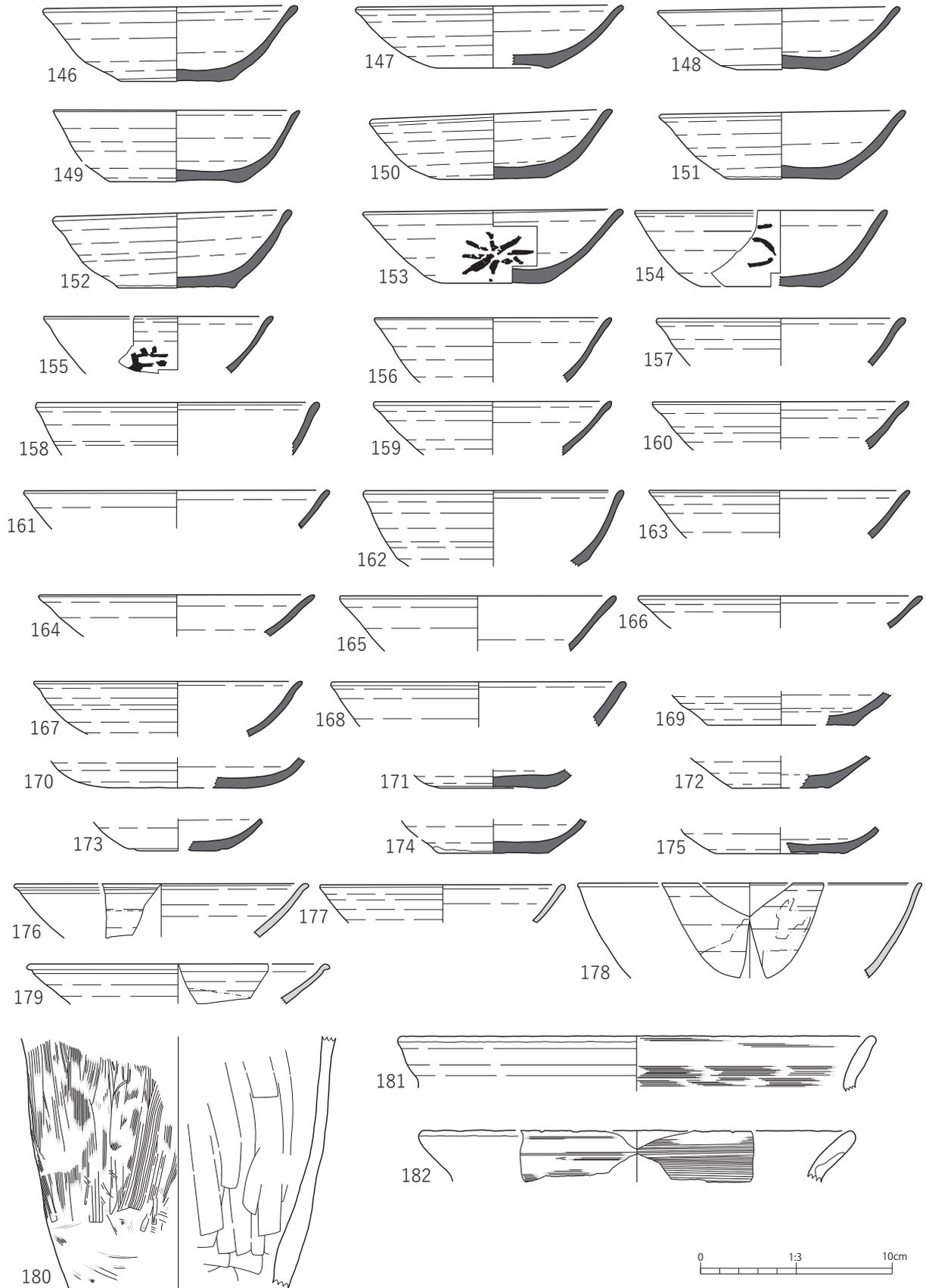


第28図 土器類 (5住)



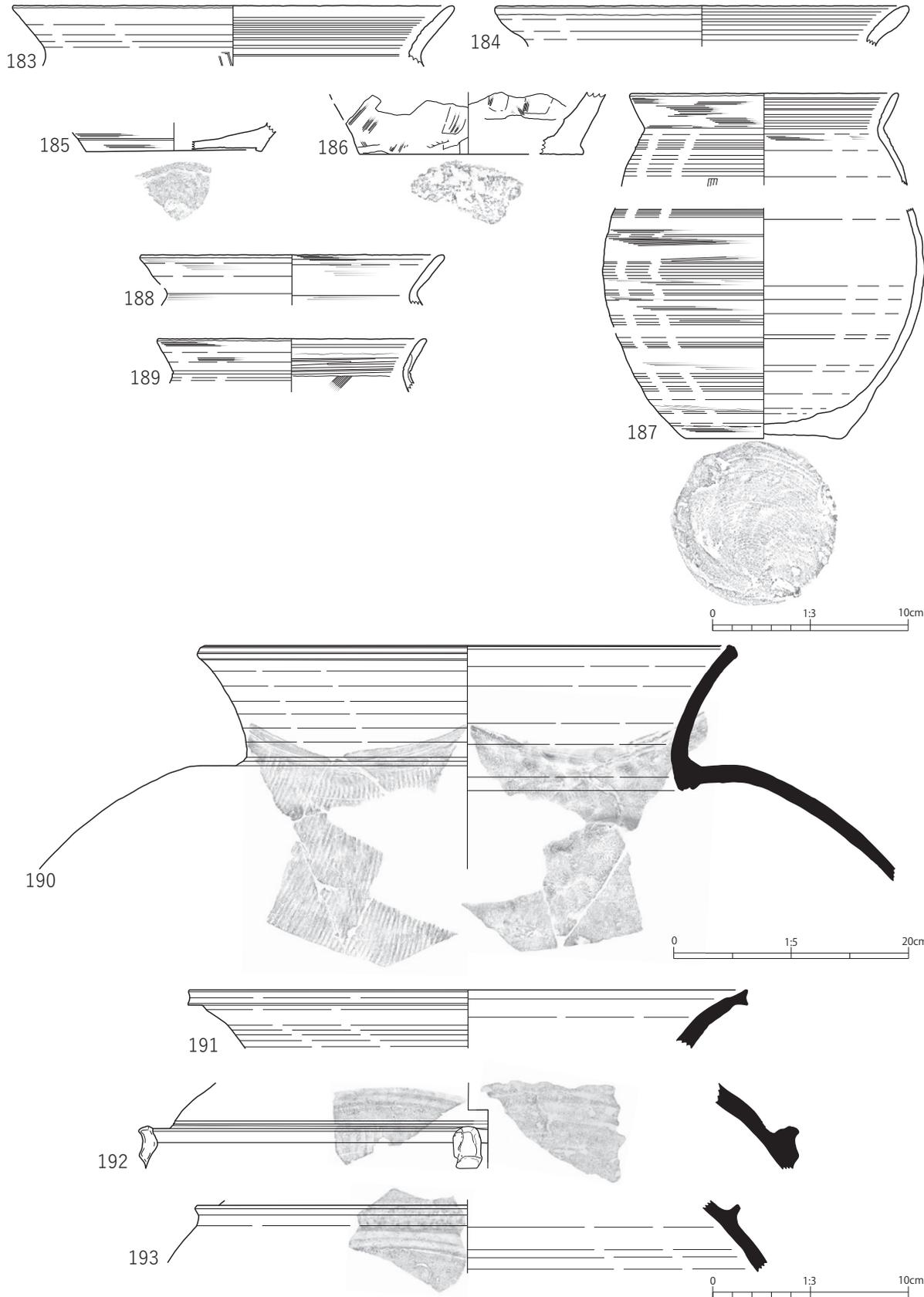
第29図 土器類（6住）

6住



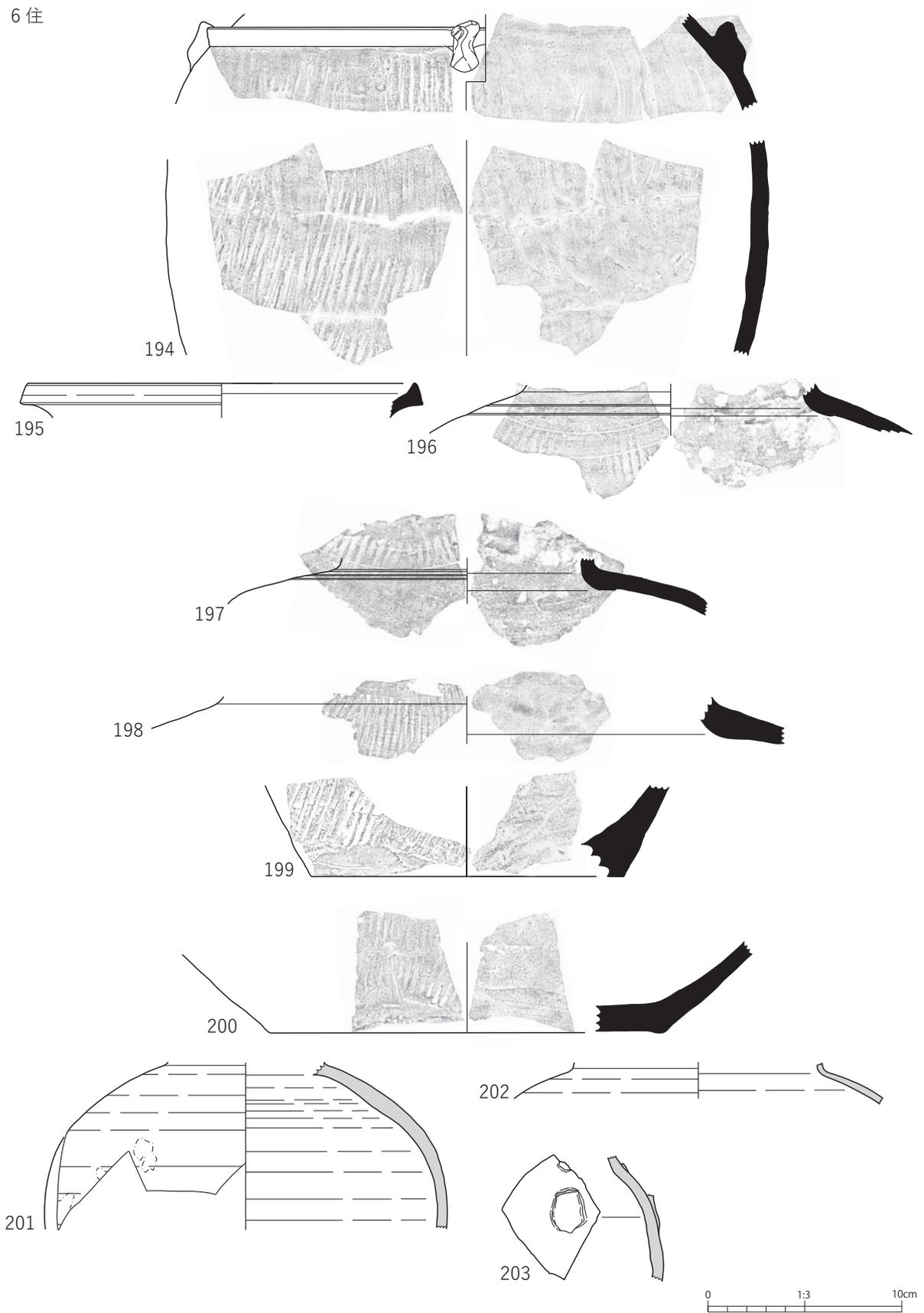
第30図 土器類 (6住)

6住



第31図 土器類（6住）

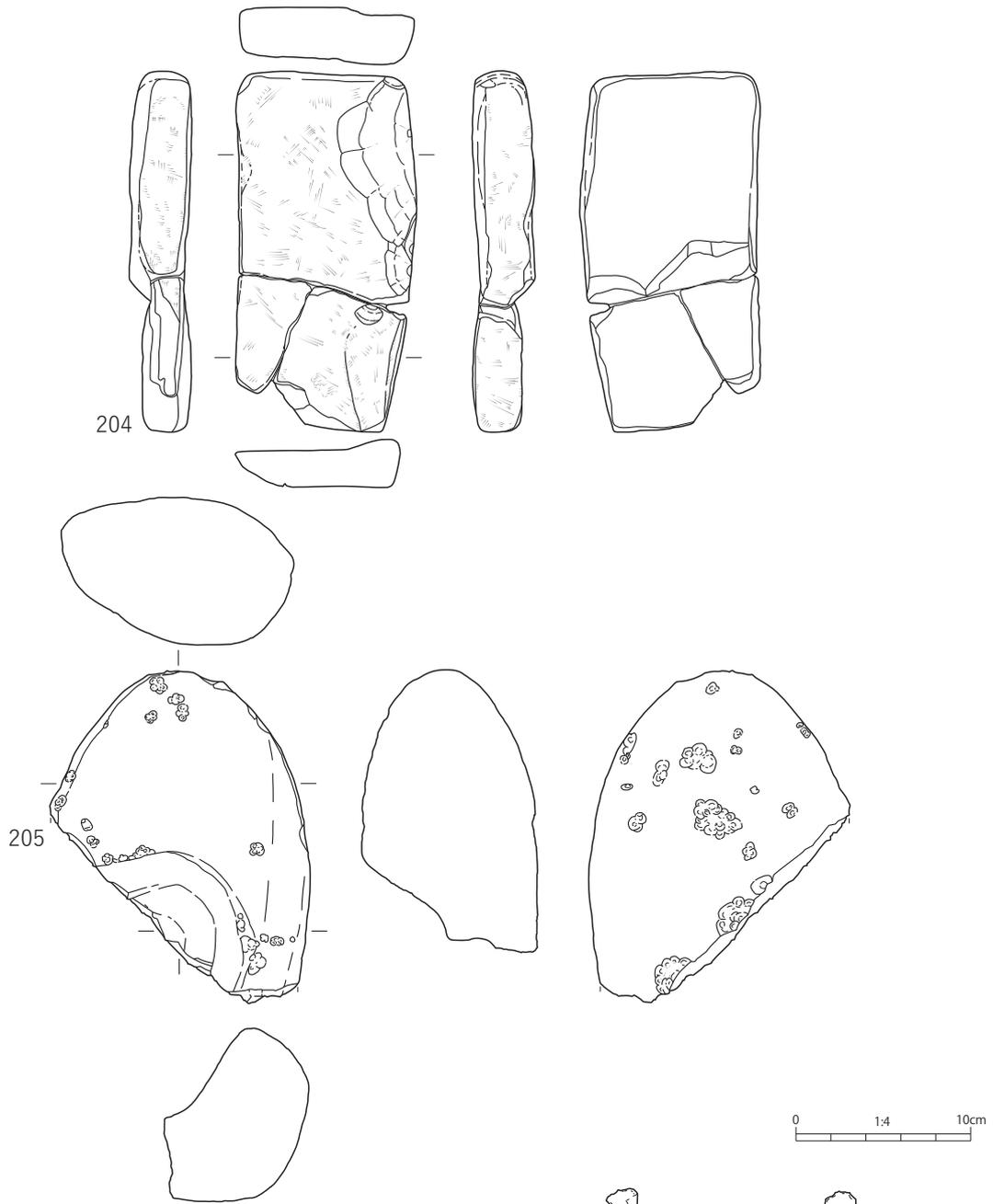
6住



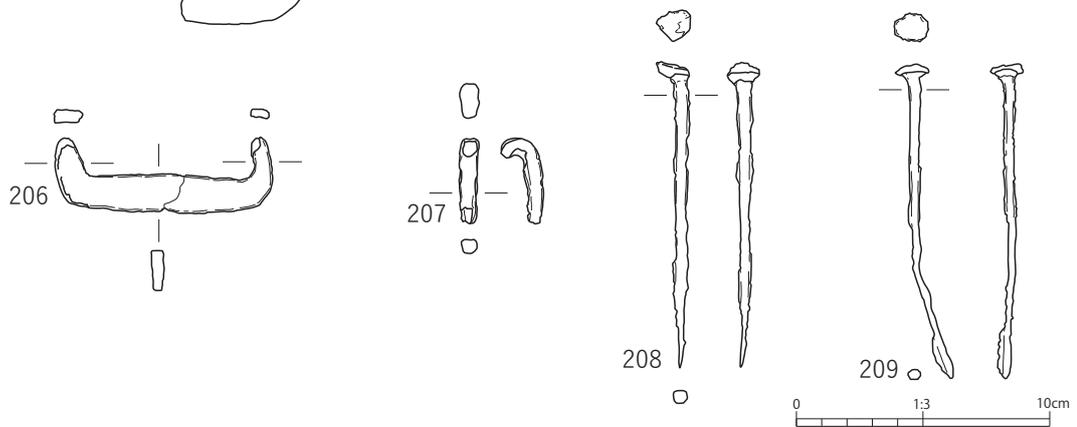
第32図 土器類 (6住)

第6章 遺物

石製品



金属製品



第33図 出土石製品・金属製品

第8表 土器類観察表

No.	遺構等	層位等	種別	器種	残存部位	口径 ^{*1} (cm)		底径 ^{*1} (cm)		器高 ^{*2} (cm)		技法の特徴		
												外面	内面	底部
1	南区試掘	E トレンチ	須恵器	坏 B	体部～底部	不明	—	7.4	復	1.3	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り
2	南区試掘	E トレンチ	須恵器	坏	体部	不明	—	不明	—	2.1	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
3	南区試掘	E トレンチ	土師器	甕	体部～底部	不明	—	10.6	復	4.2	残	ハケメ	ナデ	ナデ
4	南区試掘	E トレンチ	須恵器	短頸壺	体部	不明	—	不明	—	1.9	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
5	南区試掘	E トレンチ	須恵器	甕	底部	不明	—	5.8	復	1.3	残	ロクロナデ	なし	回転糸切り
6	南区試掘	N トレンチ	土師器	羽釜か	体部	不明	—	不明	—	2.8	残	ナデ 粗いナデ (羽の下)	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	不明
7	南区試掘	W トレンチ	須恵器	坏蓋	蓋部	不明	—	—	—	1.4	残	ロクロナデ +回転ヘラケ ズリ	ロクロナデ	—
8	南区試掘	W トレンチ	須恵器	坏 A	体部～底部	不明	—	6.6	実	1.5	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
9	南区試掘	不明	須恵器	坏 A	体部～底部	不明	—	5.2	復	1.0	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
10	南区試掘	不明	土師器	甕	口縁～頸部	16.0	復	不明	—	2.5	残	横ナデ	布状工具横ナデ	不明
11	南区試掘	不明	土師器	甕	体部～底部	不明	—	8.0	実	2.6	残	工具横ナデ (下部)	工具縦ナデ	木葉痕
12	南区試掘	不明	須恵器	甕	口縁～頸部	27.0	復	不明	—	2.8	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
13	南区試掘	不明	須恵器	甕	頸部～体部	不明	—	不明	—	3.1	残	タタキ (下部)	ナデ	不明
14	北区試掘	不明	黒色土器 A	坏 A	口縁～底部	14.6	復	6.6	復	3.9	完	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	回転糸切り
15	北区試掘	不明	黒色土器 A	坏 A	体部～底部	不明	—	6.2	復	1.1	残	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	回転糸切り
16	北区試掘	不明	須恵器	坏 A	口縁～体部	12.4	復	不明	—	3.0	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
17	北区試掘	不明	須恵器	坏 A	体部～底部	不明	—	5.8	復	1.2	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
18	北区試掘	不明	軟質須恵器	坏 A	体部～底部	不明	—	5.4	復	0.7	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
19	北区試掘	不明	軟質須恵器	坏 A	体部～底部	不明	—	6.8	実	1.9	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
20	北区試掘	不明	須恵器	短頸壺 D	口縁～頸部	15.0	復	不明	—	4.1	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
21	北区試掘	不明	須恵器	甕 A	頸部	不明	—	不明	—	4.4	残	横ナデ+沈線 +波状文	横ナデ	不明
22	北区試掘	不明	須恵器	甕 A	頸部	不明	—	不明	—	5.5	残	横ナデ	横ナデ	不明

※1 実：残存箇所を計測 復：図上復元

※2 完：完形資料を計測 残：残存高を計測

第6章 遺物

No.	遺構等	層位等	種別	器種	残存部位	口径 ^{※1} (cm)		底径 ^{※1} (cm)		器高 ^{※2} (cm)		技法の特徴		
												外面	内面	底部
23	北区試掘	不明	須恵器	不明	把手	不明	—	不明	—	7.9	残	ナデ+面取り	ナデ+面取り	不明
24	1住	床面	須恵器	坏蓋B	蓋部	15.6	復	—	—	1.5	残	ロクロナデ+ヘラケズリ	ロクロナデ	—
25	1住	床面	須恵器	坏A	口縁~体部	15.8	復	不明	—	3.8	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
26	1住	床面	須恵器	坏A	口縁~体部	15.6	復	不明	—	3.3	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
27	1住	床面	須恵器	坏A	体部~底部	不明	—	8.4	復	1.7	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
28	1住	床面	須恵器	坏A	体部~底部	不明	—	6.0	復	1.8	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
29	1住	カマド	須恵器	坏A	体部~底部	不明	—	5.0	復	0.9	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
30	1住	覆土	須恵器	坏B	体部~底部	不明	—	9.6	復	1.9	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り+ナデ
31	1住	床面	須恵器	坏B	口縁~底部	13.0	復	不明	—	7.1	残	ロクロナデ	ロクロナデ+ケズリ(口縁)	不明
32	1住	覆土	須恵器	坏B	体部~底部	不明	—	10.0	復	6.4	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラケズリ
33	1住	床面	土師器	甕B	頸部~体部	不明	—	不明	—	8.0	残	縦ハケ+横ナデ	横ナデ	不明
34	1住	床面	土師器	甕C	口縁~頸部	22.8	復	不明	—	3.3	残	ケズリ	ナデ	不明
35	1住	床面	土師器	小型甕	口縁~頸部	12.0	復	不明	—	2.1	残	横ナデ	横ナデ	不明
36	1住	床面	須恵器	長頸壺	体部~底部	不明	—	10.4	復	2.9	残	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ
37	1住	覆土	灰釉陶器	壺蓋	蓋部	不明	—	—	—	0.6	残	ロクロナデ+灰釉	ロクロナデ+灰釉	—
38	2住	床面	須恵器	坏蓋B	蓋部	12.2	実	—	—	2.5	完	ロクロナデ+ヘラケズリ	ハケメ	—
39	2住	覆土	須恵器	坏蓋B	蓋部	14.6	実	—	—	2.9	完	ロクロナデ+ヘラケズリ	ロクロナデ	—
40	2住	床面	須恵器	坏A	口縁~底部	14.6	復	9.6	復	4.0	完	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
41	2住	カマド	須恵器	坏A	口縁~底部	13.6	復	7.0	復	3.8	完	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
42	2住	カマド	須恵器	坏A	体部~底部	不明	—	8.8	復	1.0	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
43	2住	覆土	須恵器	坏B	口縁~底部	12.4	実	8.6	実	4.3	完	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り+回転ヘラケズリ
44	2住	床面	須恵器	坏B	体部~底部	不明	—	10.2	復	1.5	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り+回転ヘラケズリ
45	2住	カマド	須恵器	坏	口縁~体部	14.2	復	不明	—	3.5	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明

No.	遺構等	層位等	種別	器種	残存部位	口径 ^{*1} (cm)			底径 ^{*1} (cm)			器高 ^{*2} (cm)			技法の特徴			
							復	不明	—		復	不明	—		残	不明	—	外面
46	2住	床面	須恵器	坏	口縁～体部	12.4	復	不明	—	2.7	残	不明	—	2.7	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
47	2住	カマド	土師器	甕 A	体部～底部	不明	—	不明	—	10.2	復	不明	—	15.5	残	ナデ	ナデ+ハケメ	ナデ
48	2住	床面	土師器	甕 A	体部～底部	不明	—	不明	—	7.2	実	不明	—	4.1	残	ナデ	ナデ	ナデ
49	2住	床面	土師器	甕 A	体部～底部	不明	—	不明	—	5.2	復	不明	—	24.1	残	ナデ	ナデ	ナデ
50	2住	カマド	土師器	甕 B	口縁～体部	21.6	実	不明	—	30.0	残	不明	—	30.0	残	ハケメ+ナデ +横ナデ	ハケメ+横ナデ	不明
51	2住	カマド	土師器	甕 B	口縁～体部	19.8	復	不明	—	18.1	残	不明	—	18.1	残	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	不明
52	2住	床面	土師器	甕 B	体部～底部	不明	—	不明	—	8.1	実	不明	—	15.0	残	ハケメ	ハケメ	ナデ
53	2住	カマド	土師器	甕 C	口縁～体部	21.2	復	不明	—	21.0	残	不明	—	21.0	残	ケズリ+ナデ	ナデ	不明
54	2住	カマド	土師器	甕 C	口縁～体部	21.2	復	不明	—	5.4	残	不明	—	5.4	残	ケズリ+ナデ	ナデ	不明
55	2住	カマド	土師器	甕 C	口縁～体部	21.4	復	不明	—	6.0	残	不明	—	6.0	残	ケズリ+ナデ	ナデ	不明
56	2住	カマド	土師器	甕 C	頸部～体部	不明	—	不明	—	6.1	残	不明	—	6.1	残	ケズリ+ナデ	ナデ+ハケメ	不明
57	2住	カマド	土師器	小型甕 A	口縁～体部	11.9	復	不明	—	4.3	残	不明	—	4.3	残	ナデ	ナデ	不明
58	2住	カマド	土師器	小型甕 D	口縁～体部	9.7	復	不明	—	5.8	残	不明	—	5.8	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
59	2住	覆土	土師器	小型甕	頸部～底部	不明	—	不明	—	7.0	実	不明	—	8.8	残	ハケメ	ハケメ+横ナデ	ナデ
60	2住	カマド	須恵器	短頸壺	体部～底部	不明	—	不明	—	6.8	実	不明	—	3.2	残	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ
61	2住	カマド	須恵器	甕	体部	不明	—	不明	—	17.9	残	不明	—	17.9	残	タタキ	当具痕	不明
62	2住	床面	須恵器	平瓶	体部	不明	—	不明	—	1.3	残	不明	—	1.3	残	ヘラケズリ?	ロクロナデ+ ナデ	不明
63	3住	覆土	土師器	坏 A	体部～底部	不明	—	不明	—	6.4	実	不明	—	1.2	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転系切り
64	3住	覆土	土師器	鉢	口縁～体部	26.0	復	不明	—	10.6	残	不明	—	10.6	残	ナデ+ミガキ	ナデ+ミガキ	不明
65	3住	覆土	黒色土器 A	壺	体部～底部	不明	—	不明	—	6.0	復	不明	—	1.0	残	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	不明
66	3住	覆土	黒色土器 A	皿 B	口縁～底部	11.8	復	不明	—	6.4	復	不明	—	1.6	残	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	ナデ
67	3住	カマド	須恵器	坏蓋 B	蓋部	17.4	復	—	—	3.0	残	不明	—	3.0	残	ロクロナデ+ ケズリ	ロクロナデ	—
68	3住	覆土	須恵器	坏蓋 B	蓋部	17.8	復	—	—	1.4	残	不明	—	1.4	残	ロクロナデ+ ケズリ	ロクロナデ	—

第6章 遺物

No.	遺構等	層位等	種別	器種	残存部位	口径 ^{*1} (cm)		底径 ^{*1} (cm)		器高 ^{*2} (cm)		技法の特徴		
						復	—	復	—	残	—	外面	内面	底部
69	3住	覆土	須恵器	坏蓋 B	蓋部	17.0	復	—	—	1.4	残	ロクロナデ+ケズリ	ロクロナデ	—
70	3住	覆土	須恵器	坏 A	口縁~体部	15.2	復	不明	—	2.5	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
71	3住	覆土	須恵器	坏 A	体部~底部	不明	—	5.2	実	1.4	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
72	3住	覆土	須恵器	坏 A	体部~底部	不明	—	7.0	復	1.3	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
73	3住	覆土	軟質須恵器	坏 A	口縁~体部	14.4	復	不明	—	3.0	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
74	3住	覆土	土師器	甕 A	口縁~頸部	17.8	復	不明	—	2.6	残	ナデ	ナデ	不明
75	3住	カマド	土師器	甕 B	口縁~体部	19.4	復	不明	—	8.9	残	ハケメ+ナデ	ハケメ+ナデ	不明
76	3住	覆土	土師器	小型甕 A	口縁~頸部	12.4	復	不明	—	3.4	残	ナデ	ナデ	不明
77	3住	覆土	土師器	小型甕 A	体部~底部	不明	—	8.0	復	3.6	残	ナデ	ナデ	木葉痕
78	3住	覆土	土師器	小型甕 B	体部~底部	不明	—	8.2	実	3.9	残	ハケメ	ナデ	ハケメ
79	3住	覆土	土師器	小型甕 B	体部~底部	不明	—	8.2	復	2.7	残	ハケメ	ナデ	ナデ
80	3住	覆土	土師器	小型甕 B	体部~底部	不明	—	7.6	復	5.6	残	ハケメ	ナデ	ナデ
81	3住	覆土	土師器	小型甕 D	体部~底部	不明	—	7.2	実	1.7	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
82	3住	カマド	須恵器	長頸壺	体部~底部	不明	—	7.2	実	3.1	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
83	3住	覆土	須恵器	短頸壺	口縁~頸部	9.4	復	不明	—	2.1	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
84	3住	カマド	須恵器	甕 A	口縁~頸部	54.4	復	不明	—	6.1	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
85	3住	覆土	須恵器	甕 A	口縁~頸部	28.8	復	不明	—	5.3	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
86	3住	覆土	須恵器	甕 A	口縁~頸部	29.6	復	不明	—	3.0	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
87	3住	覆土	須恵器	甕	体部	不明	—	不明	—	8.5	残	タタキ	ナデ	不明
88	4住	覆土	須恵器	坏 A	体部~底部	不明	—	7.5	実	1.1	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り+ヘラケズリ
89	4住	覆土	土師器	甕 D	口縁	不明	—	不明	—	2.1	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
90	5住	覆土	黒色土器 A	坏 A	体部~底部	不明	—	5.6	復	1.7	残	ロクロナデ	ロクロナデ+ミガキ+黒色処理	回転糸切り
91	5住	覆土	黒色土器 A	埴	口縁~体部	14.0	復	不明	—	2.6	残	ロクロナデ	ロクロナデ+ミガキ+黒色処理	不明

No.	遺構等	層位等	種別	器種	残存部位	口径 ^{*1} (cm)			底径 ^{*1} (cm)			器高 ^{*2} (cm)			技法の特徴		
															外面	内面	底部
92	5住	覆土	軟質須恵器	坏 A	口縁～体部	14.6	復	不明	—	2.3	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明			
93	5住	覆土	軟質須恵器	坏 A	体部～底部	不明	—	5.6	復	1.8	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り			
94	5住	覆土	土師器	甕 A	口縁～体部	16.4	復	不明	—	25.3	残	ナデ	ナデ	不明			
95	5住	覆土	土師器	甕 A	口縁～体部	17.8	復	不明	—	5.1	残	ナデ	ナデ	不明			
96	5住	覆土	土師器	甕	口縁～頸部	19.0	復	不明	—	3.0	残	横ナデ	横ナデ	不明			
97	5住	覆土	土師器	小型甕 A	口縁～体部	15.4	復	不明	—	9.3	残	ナデ	横ナデ	不明			
98	5住	覆土	土師器	小型甕 A	口縁～体部	14.0	復	不明	—	13.4	残	ナデ	ナデ	不明			
99	5住	覆土	土師器	小型甕 B	口縁～体部	14.4	復	不明	—	6.0	残	ハケメ+ナデ	横ナデ	不明			
100	5住	覆土	土師器	小型甕 B	体部～底部	不明	—	7.0	実	4.8	残	ハケメ	粗いナデ	ハケメ			
101	5住	覆土	土師器	小型甕	口縁～頸部	14.8	復	不明	—	1.8	残	ナデ	ハケメ	不明			
102	5住	覆土	須恵器	甕	体部	不明	—	不明	—	6.2	残	タタキ	横ナデ	不明			
103	6住	覆土	土師器	坏 A	口縁～体部	12.2	復	不明	—	2.9	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明			
104	6住	覆土	土師器	坏 A	口縁～体部	13.3	復	不明	—	2.4	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明			
105	6住	覆土	土師器	坏 A	体部～底部	不明	—	5.2	復	0.9	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り			
106	6住	覆土	土師器	坏 A	体部～底部	不明	—	5.2	復	1.3	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り			
107	6住	覆土	土師器	埴 A	口縁～体部	12.4	復	不明	—	3.4	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明			
108	6住	床面	黒色土器 A	坏 A	口縁～底部	12.0	実	5.9	実	4.0	完	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	回転糸切り			
109	6住	覆土	黒色土器 A	坏 A	口縁～底部	13.4	実	6.0	実	4.2	完	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	回転糸切り			
110	6住	覆土	黒色土器 A	坏 A	口縁～底部	17.8	復	7.2	実	5.5	完	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	回転糸切り			
111	6住	覆土	黒色土器 A	坏 A	口縁～底部	14.8	実	7.5	実	6.2	完	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	回転糸切り+ ケズリ			
112	6住	覆土	黒色土器 A	坏 A	口縁～体部	15.8	復	不明	—	3.3	残	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	不明			
113	6住	覆土	黒色土器 A	坏 A	口縁～体部	12.7	復	不明	—	3.2	残	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	不明			
114	6住	覆土	黒色土器 A	坏 A	口縁～体部	14.2	復	不明	—	3.1	残	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	不明			
115	6住	覆土	黒色土器 A	坏 A	体部～底部	不明	—	9.4	復	3.1	残	ナデ+ケズリ	ミガキ +黒色処理	摩耗			

第6章 遺物

No.	遺構等	層位等	種別	器種	残存部位	口径 ^{※1} (cm)		底径 ^{※1} (cm)		器高 ^{※2} (cm)		技法の特徴		
						—	—	—	—	残	外面	内面	底部	
116	6住	床面	黒色土器 A	坏 A	体部～底部	不明	—	5.4	復	1.7	残	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	回転糸切り
117	6住	床面	黒色土器 A	坏 A	体部～底部	不明	—	6.4	復	1.4	残	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	回転糸切り
118	6住	覆土	黒色土器 A	坏 A	体部～底部	不明	—	6.6	復	1.1	残	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	回転糸切り？
119	6住	覆土	黒色土器 A	坏 A	体部～底部	不明	—	5.2	実	1.3	残	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	回転糸切り
120	6住	覆土	黒色土器 A	坏 A	体部～底部	不明	—	5.8	復	1.1	残	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	回転糸切り
121	6住	覆土	黒色土器 A	埴 A	口縁～体部	14.9	復	不明	—	3.7	残	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	不明
122	6住	覆土	黒色土器 A	埴 A	口縁～体部	12.4	復	不明	—	2.6	残	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	不明
123	6住	覆土	黒色土器 A	埴 A	口縁～体部	12.8	復	不明	—	2.5	残	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	不明
124	6住	覆土	黒色土器 A	埴 A	口縁～体部	13.7	復	不明	—	2.0	残	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	不明
125	6住	覆土	黒色土器 A	埴 A	口縁～体部	15.2	復	不明	—	3.5	残	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	不明
126	6住	覆土	黒色土器 A	埴	体部～底部	不明	—	3.0	復	1.6	残	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	回転糸切り
127	6住	覆土	黒色土器 A	埴	体部～底部	不明	—	6.4	実	1.7	残	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	回転糸切り
128	6住	覆土	黒色土器 A	埴	体部～底部	不明	—	7.6	復	1.8	残	ロクロナデ	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	回転糸切り + ナデ
129	6住	覆土	黒色土器 B	埴	体部	不明	—	不明	—	3.0	残	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	不明
130	6住	床面	黒色土器 B	埴	体部～底部	不明	—	6.6	復	1.8	残	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	不明
131	6住	床面	黒色土器 B	埴	口縁～体部	14.1	復	不明	—	2.2	残	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	ロクロナデ +ミガキ +黒色処理	不明
132	6住	覆土	須恵器	坏蓋 B	蓋部	15.8	復	—	—	0.9	残	ロクロナデ	ロクロナデ	—
133	6住	覆土	須恵器	坏 A	口縁～体部	12.8	復	不明	—	2.5	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
134	6住	床面	須恵器	坏 A	体部～底部	不明	—	6.0	復	2.0	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
135	6住	覆土	須恵器	坏 A	体部～底部	不明	—	5.8	復	0.9	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
136	6住	覆土	須恵器	坏 A	体部～底部	不明	—	6.4	復	1.2	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
137	6住	覆土	須恵器	坏 A	体部～底部	不明	—	5.6	復	2.1	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
138	6住	覆土	須恵器	坏 A	体部～底部	不明	—	6.4	復	1.9	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り

No.	遺構等	層位等	種別	器種	残存部位	口径 ^{*1} (cm)			底径 ^{*1} (cm)			器高 ^{*2} (cm)			技法の特徴		
						—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	外面
139	6住	覆土	須恵器	坏A	体部～底部	不明	—	5.6	復	2.2	残	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
140	6住	覆土	須恵器	坏B	体部～底部	不明	—	9.2	復	1.3	残	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		
141	6住	覆土	須恵器	坏B	体部～底部	不明	—	9.4	復	1.2	残	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラケズリ		
142	6住	覆土	須恵器	坏B	体部～底部	不明	—	8.4	復	1.4	残	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		
143	6住	覆土	須恵器	坏B	体部～底部	不明	—	8.2	復	2.1	残	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		
144	6住	覆土	須恵器	坏	口縁～体部	12.2	復	不明	—	3.0	残	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		
145	6住	覆土	須恵器	高坏	脚部	不明	—	不明	—	5.9	残	ロクロナデ+ ナデ	ナメナデ	ナメナデ	不明		
146	6住	床面	軟質須恵器	坏A	口縁～底部	13.1	実	5.8	実	4.0	完	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		
147	6住	床面	軟質須恵器	坏A	口縁～底部	13.7	実	5.8	実	3.3	完	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		
148	6住	覆土	軟質須恵器	坏A	口縁～底部	12.4	実	4.8	実	3.3	完	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		
149	6住	覆土	軟質須恵器	坏A	口縁～底部	12.6	復	7.0	実	3.8	完	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		
150	6住	覆土	軟質須恵器	坏A	口縁～底部	12.4	実	5.8	実	3.7	完	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り+ ナデ		
151	6住	覆土	軟質須恵器	坏A	口縁～底部	12.6	実	6.0	実	3.6	完	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		
152	6住	覆土	軟質須恵器	坏A	口縁～底部	12.2	実	6.0	実	4.1	完	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		
153	6住	覆土	軟質須恵器	坏A	口縁～底部	13.3	実	5.8	実	3.9	完	ロクロナデ+ 墨書	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		
154	6住	覆土	軟質須恵器	坏A	口縁～底部	12.8	復	6.2	復	4.0	完	ロクロナデ+ 墨書	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		
155	6住	床面	軟質須恵器	坏A	口縁～体部	11.6	復	不明	—	3.0	残	ロクロナデ+ 墨書	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		
156	6住	床面	軟質須恵器	坏A	口縁～体部	12.2	復	不明	—	3.4	残	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		
157	6住	床面	軟質須恵器	坏A	口縁～体部	12.4	復	不明	—	2.5	残	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		
158	6住	床面	軟質須恵器	坏A	口縁～体部	14.4	復	不明	—	2.8	残	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		
159	6住	覆土	軟質須恵器	坏A	口縁～体部	12.2	復	不明	—	2.8	残	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		
160	6住	覆土	軟質須恵器	坏A	口縁～体部	13.0	復	不明	—	2.5	残	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		
161	6住	覆土	軟質須恵器	坏A	口縁～体部	15.8	復	不明	—	2.0	残	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		

第6章 遺物

No.	遺構等	層位等	種別	器種	残存部位	口径 ^{※1} (cm)			底径 ^{※1} (cm)			器高 ^{※2} (cm)			技法の特徴		
						復	不明	—	復	不明	—	残	不明	—	外面	内面	底部
162	6住	覆土	軟質須恵器	坏 A	口縁～体部	13.2	復	不明	—	4.0	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明			
163	6住	覆土	軟質須恵器	坏 A	口縁～体部	13.2	復	不明	—	2.5	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明			
164	6住	覆土	軟質須恵器	坏 A	口縁～体部	14.2	復	不明	—	2.2	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明			
165	6住	覆土	軟質須恵器	坏 A	口縁～体部	14.2	復	不明	—	2.9	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明			
166	6住	覆土	軟質須恵器	坏 A	口縁～体部	14.4	復	不明	—	1.7	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明			
167	6住	覆土	軟質須恵器	坏 A	口縁～体部	14.8	復	不明	—	2.9	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明			
168	6住	覆土	軟質須恵器	坏 A	口縁～体部	15.2	復	不明	—	2.4	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明			
169	6住	床面	軟質須恵器	坏 A	体部～底部	不明	—	7.6	復	1.8	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り			
170	6住	床面	軟質須恵器	坏 A	体部～底部	不明	—	7.4	復	1.6	残	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ			
171	6住	覆土	軟質須恵器	坏 A	体部～底部	不明	—	5.4	復	1.0	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り			
172	6住	覆土	軟質須恵器	坏 A	体部～底部	不明	—	5.0	復	1.7	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り			
173	6住	覆土	軟質須恵器	坏 A	体部～底部	不明	—	5.2	復	1.7	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り			
174	6住	覆土	軟質須恵器	坏 A	体部～底部	不明	—	5.6	実	1.8	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明 (摩耗強)			
175	6住	覆土	軟質須恵器	坏 A	体部～底部	不明	—	6.6	復	1.4	残	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り			
176	6住	床面	灰釉陶器	碗 A	口縁～体部	15.0	復	不明	—	2.8	残	ロクロナデ+ 灰釉	ロクロナデ+ 灰釉	不明			
177	6住	覆土	灰釉陶器	碗 A	口縁～体部	12.6	復	不明	—	2.0	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明			
178	6住	覆土	灰釉陶器	碗 A	口縁～体部	17.5	復	不明	—	5.0	残	ロクロナデ+ 灰釉	ロクロナデ+ 灰釉	不明			
179	6住	床面	灰釉陶器	皿	口縁～体部	15.4	復	不明	—	2.1	残	ロクロナデ+ 灰釉	ロクロナデ+ 灰釉	不明			
180	6住	床面	土師器	甕 B	体部	不明	—	不明	—	13.3	残	ナデ+ハケメ	ナデ	不明			
181	6住	床面	土師器	甕 D	口縁～頸部	25.0	復	不明	—	2.9	残	ロクロナデ	ナデ	不明			
182	6住	床面	土師器	甕 D	口縁～頸部	22.8	復	不明	—	2.7	残	ナデ	ナデ	不明			
183	6住	覆土	土師器	甕 D	口縁～頸部	22.6	復	不明	—	3.1	残	ロクロナデ	ナデ	不明			
184	6住	覆土	土師器	甕 D	口縁～頸部	21.2	復	不明	—	2.1	残	ロクロナデ	ナデ	不明			

No.	遺構等	層位等	種別	器種	残存部位	口径 ^{*1} (cm)		底径 ^{*1} (cm)		器高 ^{*2} (cm)		技法の特徴		
												外面	内面	底部
185	6住	覆土	土師器	甕	体部～底部	不明	—	9.0	復	1.5	残	ロクロナデ+ ナデ	不明	ナデ
186	6住	覆土	土師器	甕	体部～底部	不明	—	11.5	復	3.2	残	工具ナデ	ナデ	木葉痕
187	6住	覆土	土師器	小型甕D	口縁部～底部	13.8	復	8.0	実	11.9	残	ロクロナデ	ロクロナデ+ ハケメ	回転糸切り
188	6住	覆土	土師器	小型甕D	口縁～頸部	15.6	復	不明	—	2.6	残	ロクロナデ+ ナデ	ロクロナデ+ ナデ	不明
189	6住	覆土	土師器	小型甕D	口縁～頸部	13.8	復	不明	—	2.8	残	ロクロナデ	ナデ+ハケメ	不明
190	6住	覆土	須恵器	甕A	口縁～体部	44.4	復	不明	—	20.2	残	ロクロナデ+ タタキ	ロクロナデ	不明
191	6住	覆土	須恵器	甕A	口縁～頸部	28.6	復	不明	—	3.0	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
192	6住	床面	須恵器	甕D	体部	不明	—	不明	—	4.5	残	ナデ	ナデ	不明
193	6住	覆土	須恵器	甕D	体部	不明	—	不明	—	3.6	残	ナデ	ナデ	不明
194	6住	床面	須恵器	甕D	体部	不明	—	不明	—	5.0	残	ナデ	ナデ	不明
195	6住	覆土	須恵器	甕	口縁～頸部	20.0	復	不明	—	1.8	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
196	6住	床面	須恵器	甕	頸部～体部	不明	—	不明	—	2.7	残	ハケ目	ナデ	不明
197	6住	覆土	須恵器	甕	体部	不明	—	不明	—	3.0	残	横ナデ	横ナデ	不明
198	6住	覆土	須恵器	甕	体部	不明	—	不明	—	2.5	残	タタキ+横ナデ	横ナデ	不明
199	6住	床面	須恵器	甕	体部～底部	不明	—	16.2	復	4.7	残	ナデ	横ナデ	ナデ
200	6住	覆土	須恵器	甕	体部～底部	不明	—	20.4	復	4.7	残	ナデ	横ナデ	ナデ
201	6住	覆土	灰釉陶器	長頸壺	肩部～体部	不明	—	不明	—	8.7	残	ロクロナデ+ 灰釉	ロクロナデ	不明
202	6住	覆土	灰釉陶器	壺	頸部～体部	不明	—	不明	—	2.1	残	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
203	6住	覆土	灰釉陶器	小瓶 (手付瓶)	体部	不明	—	不明	—	6.5	残	ロクロナデ+ 灰釉	ロクロナデ	不明

第6章 遺物

第9表 石製品観察表

No.	遺構	層位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
204	2住	覆土	砥石	砂岩	20.8	10.3	3.3	90.0	
205	6住	覆土	凹石・敲石	安山岩	19.2	14.9	10.0	250.0	

第10表 金属製品観察表

No.	遺構	層位	器種	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	備考
206	3住	覆土	苧引金具	鉄	8.6	3.0	0.5	17.9	
207	4住	覆土	釘	鉄	3.4	0.6	0.6	3.7	基部のみ残存
208	6住	覆土	釘	鉄	12.2	0.5	0.4	9.2	
209	6住	覆土	釘	鉄	12.6	0.3	0.4	8.3	

第7章 自然科学分析

1 放射性炭素年代（AMS測定）

株式会社加速器分析研究所

（1）測定対象試料

三枚橋遺跡第3次発掘調査地は、長野県安曇野市穂高1800番1外、同2に所在し、飛騨山脈から松本盆地東側へ流れる烏川の扇状地扇央に立地する。測定対象試料は、1995年の第3次発掘調査で検出された建物跡出土炭化材2点である（第11表）。なお、この2点については、樹種同定も実施されている（第7章2）。

炭化材試料1が出土した5住の年代は9世紀頃、試料2が出土した6住の年代は9世紀半ば頃と推定されている。

（2）化学処理工程

（1）メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

（2）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/ℓ（1 M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と第11表に記載する。

（3）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。

（4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（5）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（6）グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（3）測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（4）算出方法

（1） $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第11表）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（2）¹⁴C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、

1950年を基準年（0 yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第11表に、補正していない値を参考値として第12表に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい（ ^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（ ^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第11表に、補正していない値を参考値として第12表に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（ $1\sigma = 68.2\%$ ）あるいは2標準偏差（ $2\sigma = 95.4\%$ ）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.3較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第12表に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

(5) 測定結果

測定結果を第11・12表に示す。

三枚橋遺跡第3次発掘調査で出土した炭化材の ^{14}C 年代は、試料1が $1210 \pm 20\text{yrBP}$ 、試料2が $1320 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代（ 1σ ）は、試料1が771~869cal AD、試料2が660~760cal ADの間に各々2つの範囲で示される。試料1は推定と重なる年代値、試料2は推定より古い値となった。

試料1・2は炭化材で、1は枝状を呈し、樹皮を確認、2は樹皮を確認できなかった。試料2については次に記す古木効果を考慮する必要がある。

樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる（古木効果）。今回測定された試料2には樹皮が確認されていないことから、この木が死んだ年代は測定された年代値よりも新しい可能性がある。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

第11表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						LibbyAge (yrBP)	pMC (%)
IAAA-190607	試料1	1995年第3次発掘調査 (YS95) 5住	炭化材	AAA	-26.01 ± 0.17	$1,210 \pm 20$	85.98 ± 0.25
IAAA-190608	試料2	1995年第3次発掘調査 (YS95) 6住 床	炭化材	AAA	-22.71 ± 0.16	$1,320 \pm 20$	84.84 ± 0.23

[IAA 登録番号: #9732]

第12表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-190607	$1,230 \pm 20$	85.81 ± 0.25	$1,213 \pm 23$	771calAD - 779calAD (6.5%) 789calAD - 869calAD (61.7%)	720calAD - 741calAD (8.1%) 766calAD - 886calAD (87.3%)
IAAA-190608	$1,280 \pm 20$	85.24 ± 0.23	$1,320 \pm 22$	660calAD - 690calAD (59.1%) 751calAD - 760calAD (9.1%)	656calAD - 715calAD (77.5%) 743calAD - 766calAD (17.9%)

[参考値]

文献

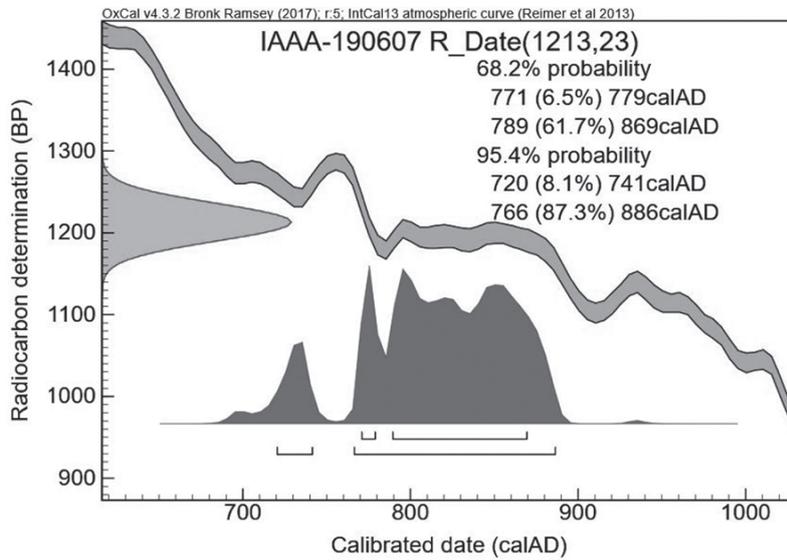
Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363



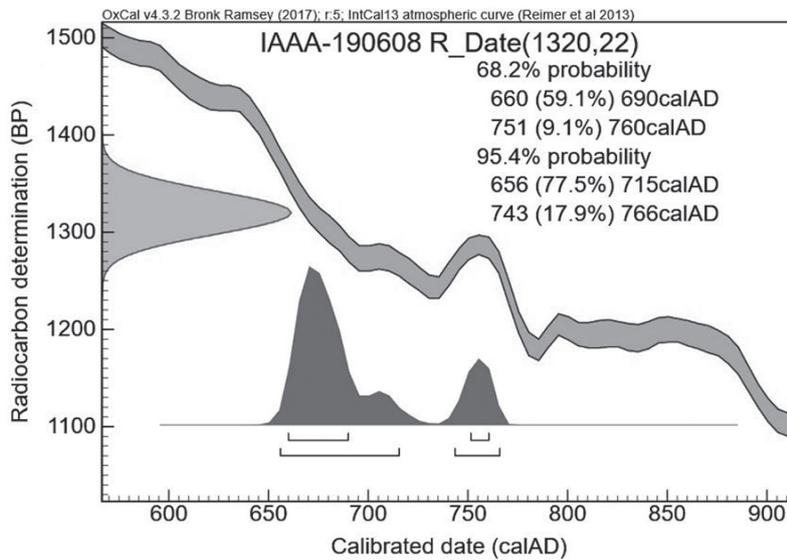
第34図 分析試料 (試料1)



第35図 分析試料 (試料2)



第36図 暦年較正年代グラフ (試料1)



第37図 暦年較正年代グラフ (試料2)

2 出土炭化材の樹種同定

株式会社加速器分析研究所

三枚橋遺跡第3次発掘調査地は、長野県安曇野市穂高1800番1、同2に所在し、飛騨山脈から松本盆地東側へ流れる烏川の扇状地扇央に立地する。本報告では、住居跡から出土した炭化材について、用材選択を検討するための樹種同定を実施する。

(1) 試料

試料は、1995年の第3次発掘調査で検出された建物跡出土炭化材2点である（第13表）。

試料1が出土した遺構の年代は9世紀頃、試料2が出土した遺構の年代は9世紀半ば頃と推定されている。なお、これらの炭化材については、放射性炭素年代測定が実施されており、試料1が8～9世紀頃、試料2が7～8世紀頃という結果が得られている（第7章1）。

(2) 分析方法

各試料について、木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する。走査型電子顕微鏡（低真空）で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995、1996、1997、1998、1999）を参考にする。

(3) 結果

樹種同定結果を第13表に示す。炭化材は、試料1が広葉樹のコナラ属クヌギ節、試料2が針葉樹のサワラに同定された。各分類群の解剖学的特徴等を以下に記す。

・サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endl. ヒノキ科ヒノキ属

軸方向を構成する組織は仮道管と樹脂細胞の2種類で、大部分を仮道管が占める。仮道管の大きさは、早材部から晩材部へやや急に小さくなる。晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められるが、数が少なく、炭化の影響で目立たない。放射方向を構成する組織は柔細胞のみ。分野壁孔はヒノキ型～スギ型で、1分野に1～3個。放射柔細胞は単列、1～10細胞高。

・コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Cerris* ブナ科

年輪の始めに大型の導管が並ぶ環孔材。孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

第13表 樹種同定結果

試料名	採取場所	形状	樹皮	年輪数	樹種
試料1	1995年第3次発掘調査 (YS95) 5住	半裁状	有	9年	コナラ属クヌギ節
試料2	1995年第3次発掘調査 (YS95) 6住 床	板目状	無	35年以上	サワラ

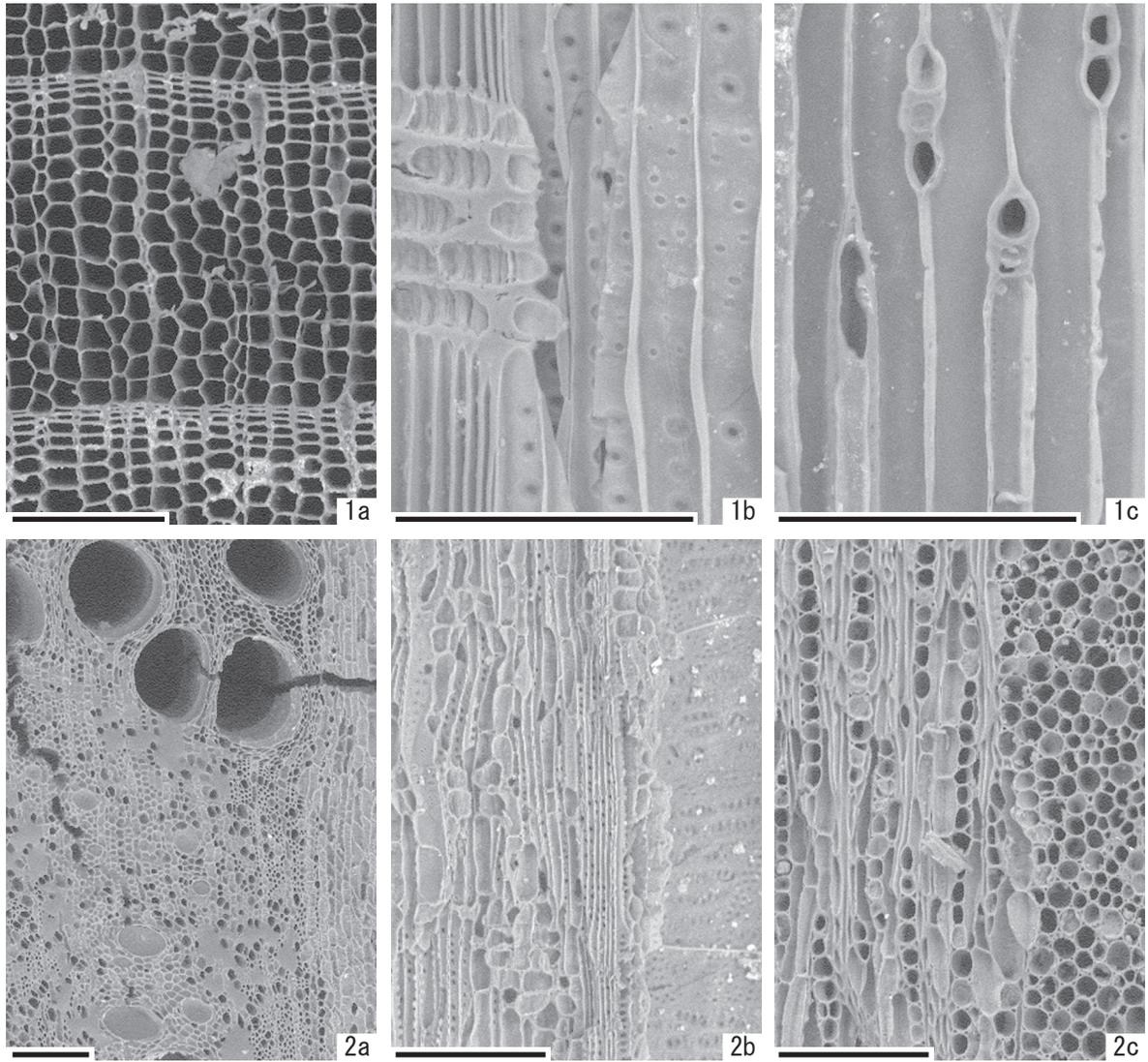
(4) 考察

出土した炭化材の樹種同定結果は、試料1が広葉樹のクヌギ節、試料2が針葉樹のサワラに同定された。クヌギ節は、二次林や河畔に生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度が高い。サワラは、山地に生育する常緑高木であり、木理が通直で割裂性や耐水性が高い。

試料1の炭化材については、クヌギ節であることから、強度を要する用途が推定される。ただし、樹皮付きの小径木であり、比較的小径の材でも利用可能な部位の可能性はある。一方、試料2の炭化材に認められたサワラは、クヌギ節に比べると軽軟で強度が低いことから、強度を要する部位というよりは、割裂性や耐水性を必要とする用途・部位が推定される。

文献

- 林昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料,31, 京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料,32, 京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,33, 京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料,34, 京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料,35, 京都大学木質科学研究所,47-216.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘 (日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織. 地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩 (日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



1. サワラ(試料2)
2. コナラ属クヌギ節(試料1)
a: 木口, b: 柁目, c: 板目

各写真のスケールは0.1mm

第38図 試料の走査型電子顕微鏡写真

第8章 調査の総括

三枚橋遺跡第3次発掘調査では、店舗建設に際し、調査面積366㎡の発掘調査を実施した。調査の結果、堅穴建物跡6棟、土壇1基、規則性をもって並ぶピット群を確認した。

1 遺構と遺物

(1) 遺物からみる奈良・平安時代集落

1住(3期)出土遺物のうち、31・32は金属製品模倣の埴と判断した。1住から共伴した須恵器と比較し、調整が丁寧で焼成状態も良好であった。体部に沈線を有する金属器模倣の須恵器埴は、穂高神社境内遺跡第1次調査のSB1(1期)からも出土しており(安曇野市教委2018)、当該時期に穂高地域に金属器模倣の須恵器が一定量流入していた証左となる。

3住からは、苧引金具が1点出土した(206)。原明芳氏による長野県内の集成では、苧引金具は7世紀後半に出現するが僅少で、8世紀後半から主体的に存在し、9世紀後半にピークを作って12世紀前半まで継続する(原2011)。3住自体の調査面積が狭く時期決定等に制約があるが、出土土器が3期、7～8期であるため、先述の集成にみられる時期的分布から推測すると7～8期に使用された可能性が高い。また、今回の調査で紡錘車は出土していないため、この集落で撚糸まで行っていたかの確認は今後の調査成果を待ちたい。

6住(8期)の覆土からは、長さ12cmを超える鉄釘2点が出土した。2点とも、頂部を曲げずに皿と基部を接合している。吉田川西遺跡報告書(長野県埋文セ1989)の分類では、この法量・構造の釘は飾り釘と推定されている。三枚橋遺跡において、平安時代に飾り釘を使用する格の建物が存在した事が確実といえる。また、6住の床面から出土した炭化物の放射性炭素年代測定では、1σで660～690calAD(59.1%)、751～760calAD(9.1%)、2σで656～715calAD(77.5%)、743～766calAD(17.9%)を得た(第7章1)。これは出土遺物の年代観と比較するとやや古い結果であり、分析者の指摘のとおり古木効果を考慮する必要がある。分析試料は樹齢35年以上のサワラで、直径20cm以上の太さを推定できる。構造材以外の強度を要しない建築部材や、耐水性が必要な道具の材として使用された可能性がある。飾り釘の存在と併せると、6住は1～3期(7～8世紀)に伐採されたサワラを建築材として用い、飾り釘を有する堅穴建物で8期に廃絶したと推測できる。

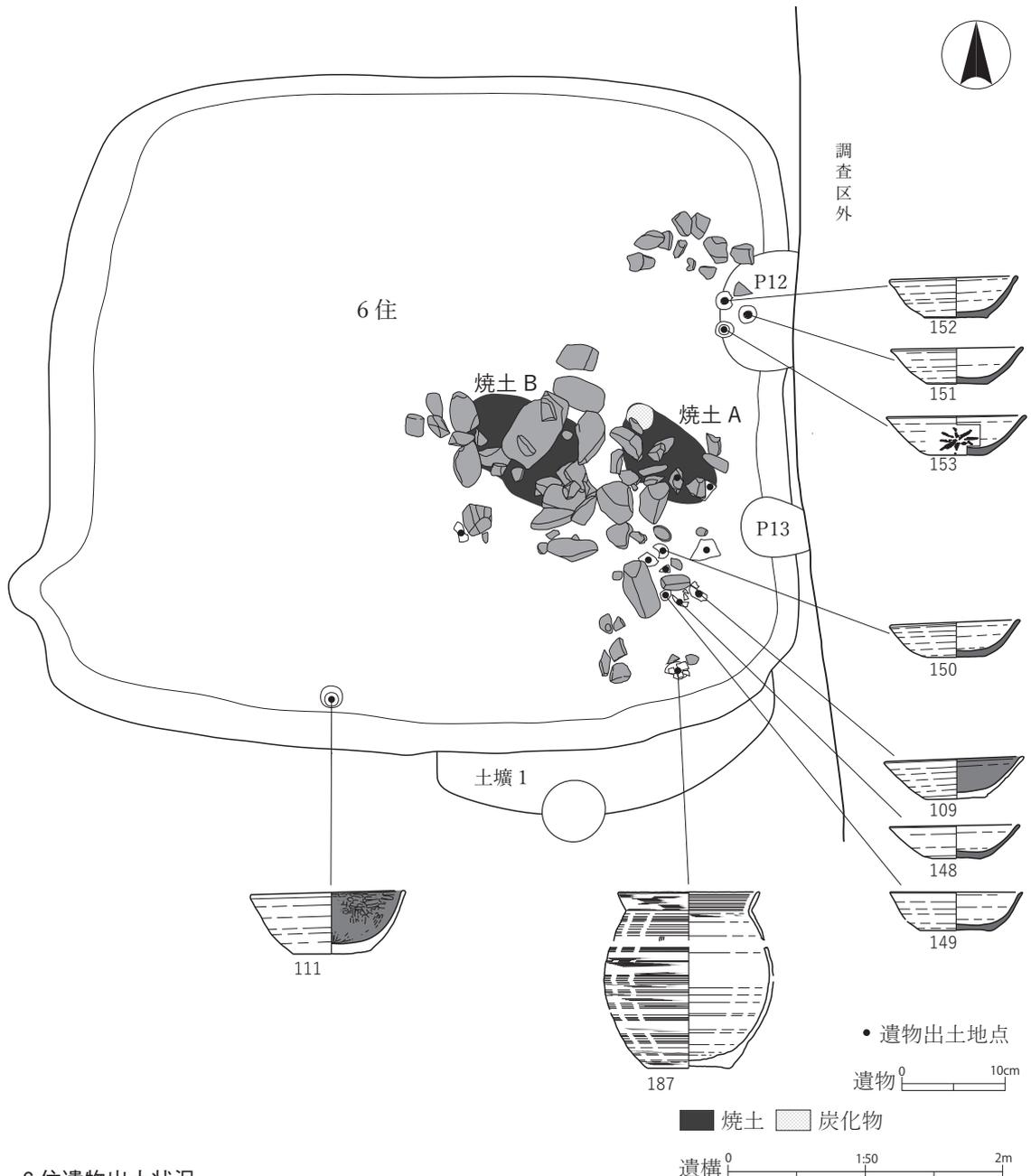
(2) カマド廃棄にかかわる儀礼的行為

今回の調査では、遺構の全容を明確に把握できたものはないが、堅穴建物跡のカマド廃棄について所見を得ることができた。

8期に比定した6住では、カマド自体の痕跡は確認できなかったが、遺構内東中央部の床面付近から被熱礫を含む礫群と硬化した焼土2箇所を検出した。この礫群は、石組を構造材として構築したカマドの痕跡と考えられる。焼土では、壁寄りの焼土Aが焚口部に由来し、焼土Bが燃焼室から掻き出され

た焼土である可能性が高い。この焚口由来と考えられる焼土 A の付近では、カマドの支脚及び袖・天井部の構築材が破碎されたと考えられる礫片がまとまって検出できた。この状況から、カマドの袖・天井部ともほぼ完全に破壊し、礫・焼土を散乱させたと推測できる。遺物は、この礫群東側と6住壁の間から礫群に混じって2箇所の集中区があり、軟質須恵器・黒色土器 A の坏 A がまとまって出土した（第39図）。土器組成における坏 A の割合の高さ、残存状態の良好さから、通常生活での使用・廃棄・埋没ではなく、カマド廃棄に伴い先述の礫群と共に食膳具を遺棄した痕跡であると想定できる。153の軟質須恵器坏 A に「+」「×」を重ねた形の墨書があることから、このカマド廃棄が儀礼的な意味合いをもっていたことがうかがえる。

遺構の帰属時期として前後するが、3～4期の2・3住でも、焚口部で礫を検出した点、袖部から食膳具や多孔の凹石が出土した点から、6住に類似したカマド廃棄の儀礼的行為を想定できる。



第39図 6住遺物出土状況



第40図 穂高・穂高柏原の主な古代遺跡（「安曇野市埋蔵文化財包蔵地図」（平成22年3月31日調整）を加工）

遺跡名	調査回数	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期
三枚橋遺跡	第3次(2017)		1住 2住 3住					6住		
三枚橋遺跡	第6次(2008)	SB3	SB4	SB5			SB2			
八ツ口遺跡	第2次(2008)	SB3		SB2 SB5			SB7			
藤塚遺跡	第2次(2007)		SB22	SB10						
追掘遺跡	試掘(2014) 工事立会(2019)				試掘(2014)				立会(2019)	
馬場街道遺跡	第1・2次(1984～1986)	6号住居址					4号住居址 5号住居址		11号住居址	
穂高神社境内遺跡	第1次(2015)	SB1 SB3	SB2				SB5			
矢原五輪畑遺跡	試掘(2017)	試掘(2017)								

第41図 「穂高・穂高柏原の古代遺跡群」の遺構別出土土器年代

2 「穂高・穂高柏原の古代遺跡群」と三枚橋遺跡

(1) 「穂高・穂高柏原の古代遺跡群」の時間的・空間的範囲

「矢原遺跡群」は、『倭名類聚抄』にある「安曇郡八原郷」、平安時代後期の「矢原御厨」に比定される遺跡の集合体として馬場街道遺跡第1・2次発掘調査報告書で用いられた概念である⁽¹⁾(長野県豊建・穂高町教委1987)。しかし、今日に至るまで「矢原遺跡群」の明確な範囲は示されず、研究者によって示す範囲が異なっていた。矢原遺跡群馬場街道遺跡第1・2次発掘調査報告書では、馬場街道遺跡と、矢原神明宮の南側に位置する宮地遺跡、西側に位置する矢原五輪畑遺跡を主な遺跡とし、藤塚遺跡を北限としている。『穂高町誌』は、昭和15・16年(1940・41)の銭坂藤七氏の矢原宮地遺跡・矢原五輪畑遺跡の調査成果を引用して、「上代遺跡」「原始的な農業集落」の広がり、烏川(穂高川)の右岸及び万水川の左岸の段丘上で南北に連続する矢原・白金・等々力を同一型式の遺跡地帯とし、西は穂高神社境内遺跡に及ぶと記述している(穂高町誌編纂委1991)。

当初、「矢原遺跡群」を設定する際に念頭に置かれた「安曇郡八原郷」「矢原御厨」は、地方行政の単位や農業経営体を示す概念であり、当然に集落外の生産域や河川等を含むだけでなく、土地以外の概念も包括する可能性が高い。しかし、現段階では発掘調査で把握しているのは集落跡のみであり、生産域についてはわかっていない。このため本書では、次の基準で安曇野市穂高、穂高柏原に広がる遺跡群の範囲を設定する。

- ① 発掘調査、試掘、工事立会で確認した古墳時代～平安時代の集落跡の分布の外郭を囲む。(遺物の地表面での散布状況、採集資料は参考とする。)
- ② 上記①の範囲で、集落跡の間に存在する現代の小河川、発掘調査等で確認した旧流路を取り込む。
- ③ 上記①の範囲で、扇状地・河岸段丘等に由来すると考えられる地形を参考とする。

この範囲を図示したものが第40図で、これは銭坂氏が提唱した「上代遺跡」「原始的な農業集落」の

広がりとはほぼ一致する。現在の地区名では、矢原、白金、等々力、等々力町、穂高、穂高町、柏原と広範囲に渡るため「矢原遺跡群」の名称が適切であるかは後論を待ち、本書では「穂高・穂高柏原の遺跡群」と仮称する⁽²⁾。

この遺跡群ではこれまでの調査で、弥生時代後期及び古墳時代中期～中世の竪穴建物跡及び掘立柱建物跡から当該期の遺物が多量に出土している。これらの調査地点では、洪水に由来する砂礫層を複数確認しており、これらの洪水が遺跡群における集落跡(居住域)の断絶・継続に影響していると予測できる。

(2) 三枚橋遺跡第3次発掘調査の位置づけ

『穂高町誌』は、矢原遺跡群馬場街道遺跡、矢原五輪畑遺跡、穂高神社境内遺跡等を古墳時代、平安時代の遺跡例として挙げ、奈良～平安時代、特に8～9世紀の考古資料の不足を指摘した。『穂高町誌』編纂後、1990～2010年代に「穂高・穂高柏原の古代遺跡群」内で調査が行われ、古代の遺構・遺物が多数発見されている。2000年代に入ってから、藤塚遺跡第2次発掘調査(2007)、八ツ口遺跡第2次発掘調査(2008)、三枚橋遺跡第6次発掘調査(2008)で、考古資料の不足が指摘された時期の遺物を伴う竪穴建物跡が発見された。今回、三枚橋遺跡第3次発掘調査では、3～4期の遺物を伴う3棟の竪穴建物跡と、8期の遺物を伴う1棟の竪穴建物跡を検出した。これらの調査成果から、遺跡群の中でも、藤塚遺跡、三枚橋遺跡、八ツ口遺跡周辺の少なくとも約0.6×0.4kmの範囲に3～4期の集落が存在していたことが推定できる。

「穂高・穂高柏原の古代遺跡群」では、三枚橋遺跡周辺から離れた遺跡からも3～4期の遺構・遺物が確認されている。今回の調査地点から北約1kmの位置で平成27年(2015)に実施した穂高神社境内遺跡第1次発掘調査(2015)では、1～3期及び7期の遺物を伴う竪穴建物跡を検出しているほか、調査地点から南約0.7kmの位置で平成29年(2017)に実施した矢原五輪畑遺跡の試掘では、2～4期の遺物が出土している(安曇野市教委2015、2019)。これらの遺構分布状況から、東西方向の水系(烏川扇状地では「縦堰」と呼ぶ。)等を単位として数百メートル間隔で同時期に複数の集落が立地するというモデルを提示できる。これらの集落を、遺跡群を構成する単位集落と呼称すると、この単位集落が律令制施行以降の地域経営の基礎単位であった可能性もある。

本書掲載の調査では、3～4期の竪穴建物跡がその前後の時期に帰属する遺構と切り合っている状況は見られなかった。このことは、「穂高・穂高柏原の古代遺跡群」として想定する八原郷・矢原御厨の時代の集落遺構が同一地点で重複せず、時期ごとに場所を移している可能性を示唆している。古墳時代後期から平安時代にかけての集落分布及び生産域の解明も今後の課題である。

註

(1) 「安曇郡八原郷」と「矢原御厨」は、歴史的に異なった脈絡にあるため、遺跡群としてその地理的範囲を同一のものとして扱うことが可能であるか否かは、本論では論及しない。

(2) この遺跡群の範囲は、今後の発掘調査成果により修正されていく性格であり、この意味で周知の埋蔵文化財包蔵地とは一致しない、いわゆる作業仮説である。



南区東側調査状況（南から）



南区西側調査状況（南から）



南区北側（東から）



南区南側（西から）

1 調査状況（南区）

写真図版



北区試掘トレンチ・南区調査前（北から）



1住（西から）



1住東壁土層（西から）



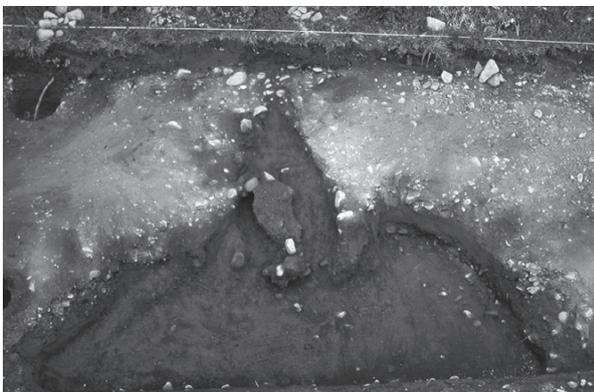
2住・5住（北から）



2住カマド（北東から）



2住カマド脇の出土状況（北から）



3住（東から）



3住カマド焚口の土器（No.64 東から）

2 調査状況（試掘・1住・2住・3住・5住）



4住（西から）



4住東西セクション（南西から）



P1～4（東から）



6住（西から）



6住遺物出土状況（No.111北から）



6住遺物出土状況（東から）



6住遺物出土状況（No.151・152・153北西から）

3 調査状況（4住・6住・ピット）



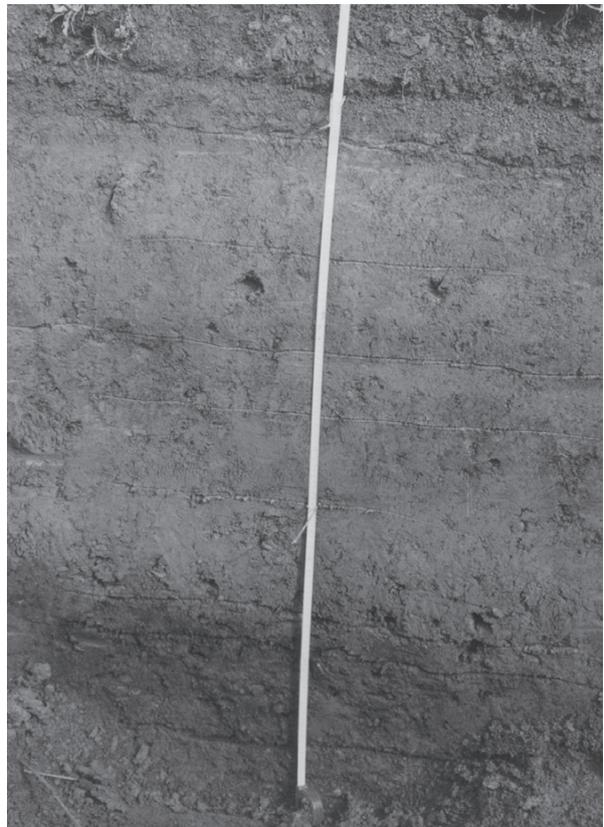
試掘調査北区地点1 東壁土層（西から）



試掘調査北区地点2 西壁土層（東から）



試掘調査北区地点3 北壁土層（南から）



試掘調査北区地点4 東壁土層（西から）

4 試掘土層（北区）



試掘調査北区地点 5 東壁土層（西から）



試掘調査南区地点 1 北壁土層（南から）



試掘調査南区地点 2 西壁土層（東から）



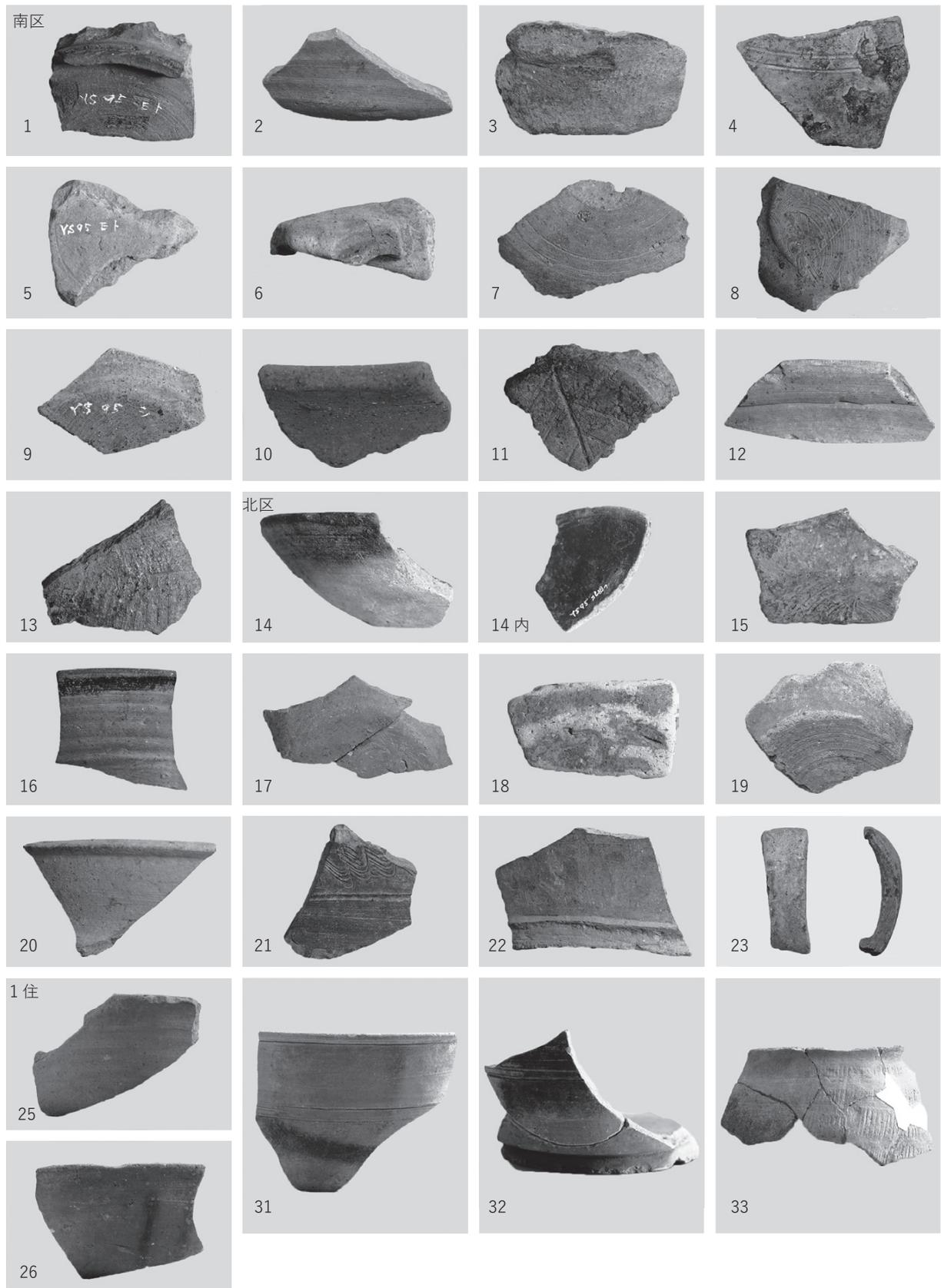
試掘調査南区地点 3 調査状況（西から）



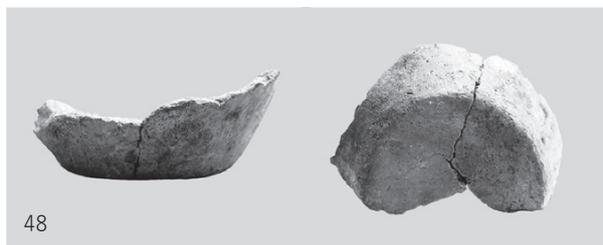
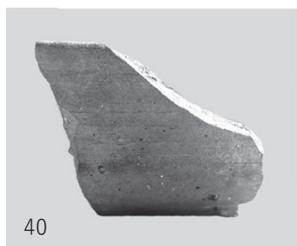
試掘調査南区東側トレンチ（南から）

5 試掘土層（北区・南区）、試掘トレンチ（南区）

写真図版



6 土器類 (試掘 (南区・北区)・1住)



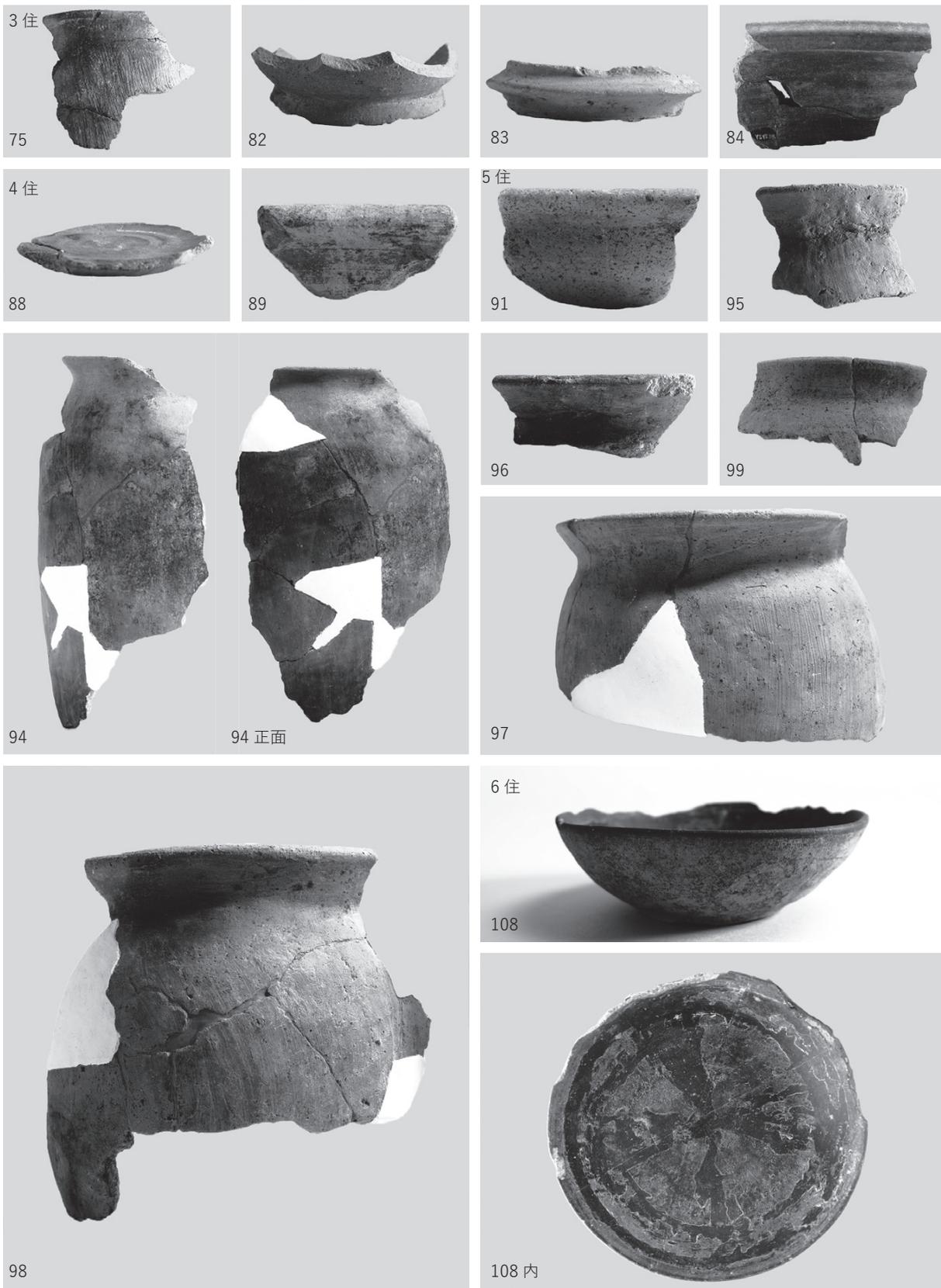
7 土器類 (2 住)

写真図版

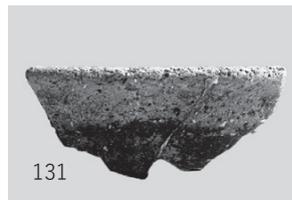
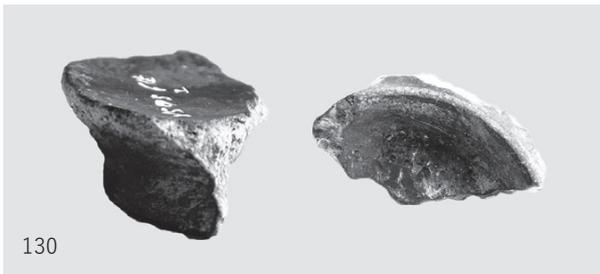
2 住



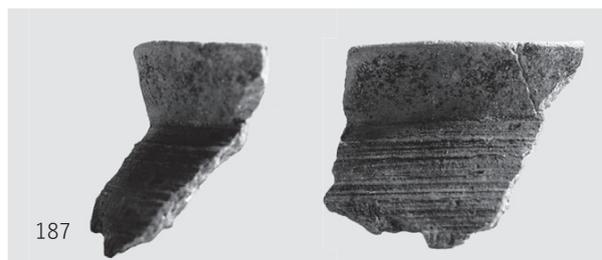
8 土器類 (2 住・3 住)



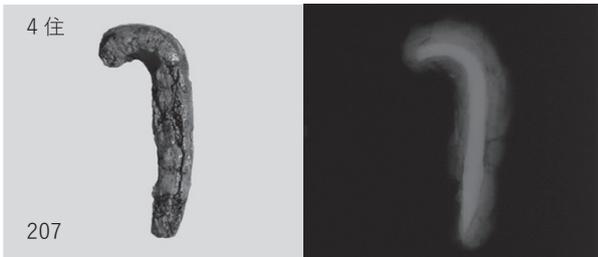
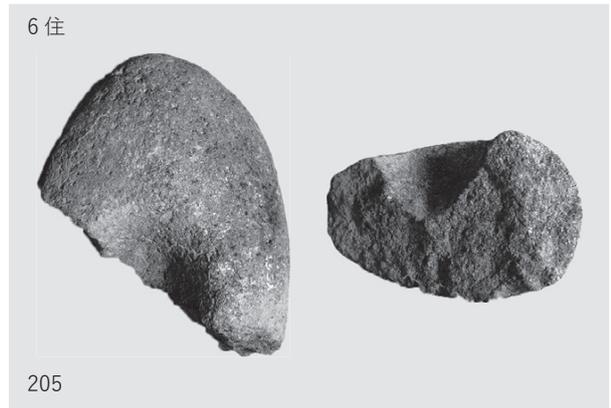
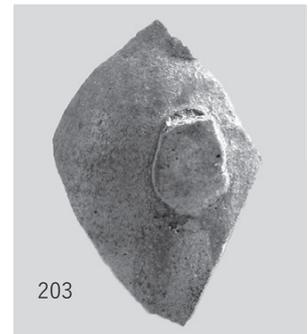
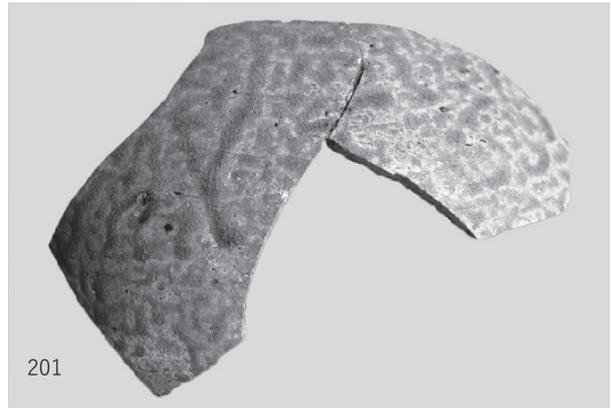
9 土器類 (3住・4住・5住・6住)



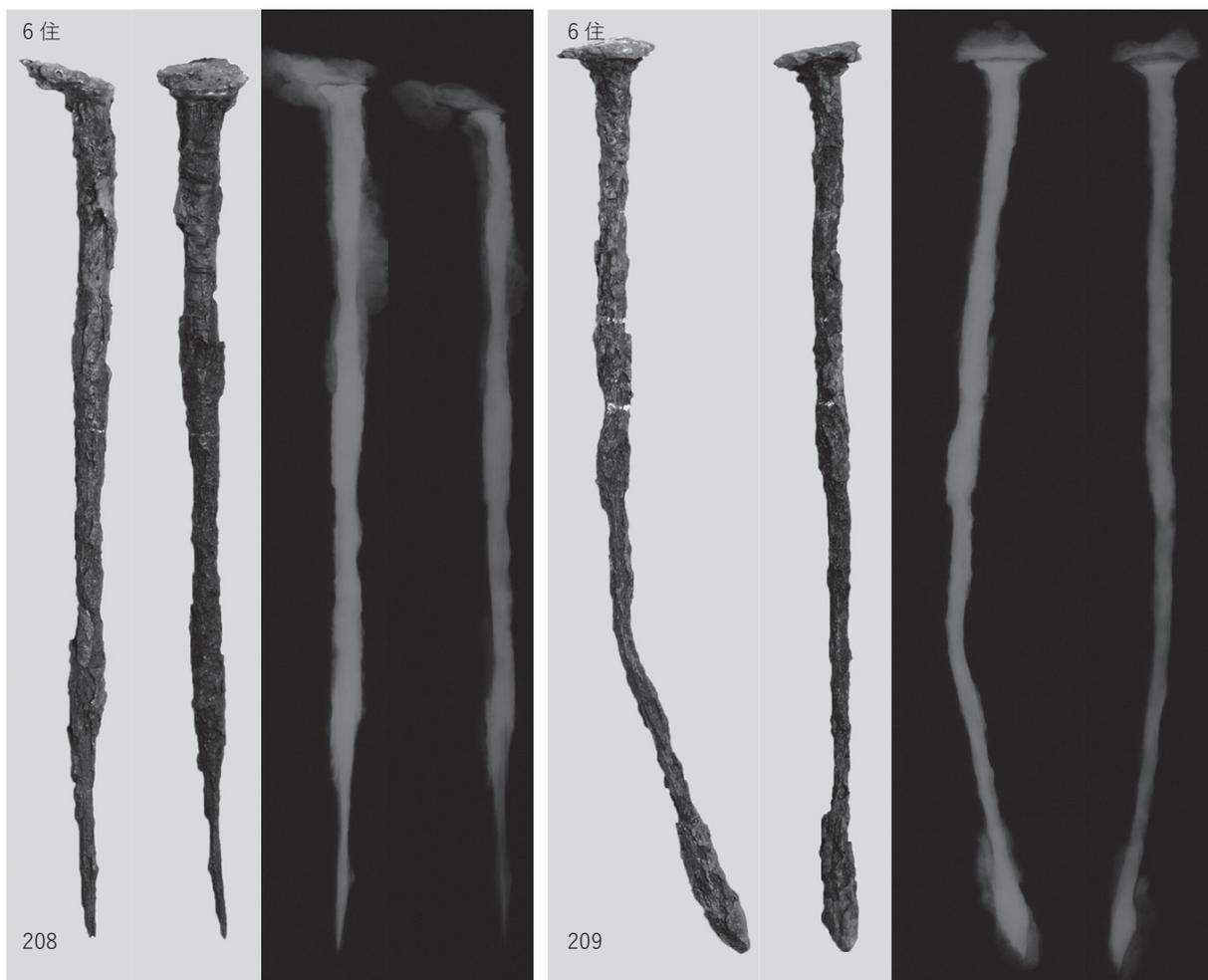
10 土器類 (6 住)



11 土器類 (6住)



12 土器類 (6 住)、金属製品



13 金属製品、石製品

引用・参考文献（五十音順）

- 安曇野市教育委員会 2009 『三枚橋・藤塚遺跡—安曇野市穂高交流学习センター建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』安曇野市の埋蔵文化財第2集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2010 『平成20年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書—八ツ口遺跡・三枚橋遺跡—』安曇野市の埋蔵文化財第3集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2018 『穂高神社境内遺跡1—新穂高支所建設事業に伴う第1次発掘調査報告書—』安曇野市の埋蔵文化財第14集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2019 『平成29年度安曇野市埋蔵文化財調査報告書』安曇野市の埋蔵文化財第17集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2020 『三枚橋遺跡7—店舗建設に伴う第7次発掘調査報告書—』安曇野市の埋蔵文化財第21集 安曇野市教育委員会
- 小穴喜一 1987 『土と水から歴史を探る—古代・中世の用水路を軸として—』信毎書籍出版センター
- 小平和夫 1990 「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—総論編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書4 長野県教育委員会 pp.97-158
- 豊科町東山遺跡調査会編 1999 『筑摩東山 上ノ山・菖蒲平窯跡群発掘調査報告書』豊科町教育委員会
- 長野県豊科建設事務所、穂高町教育委員会 1987 『古墳時代～中世を主とした複合遺跡 矢原遺跡群（馬場街道遺跡）—県道柏矢町～田沢停線拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告—』長野県豊科建設事務所、穂高町教育委員会
- 長野県埋蔵文化財センター 1989 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3—塩尻市内その2—吉田川西遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書3 長野県教育委員会
- 長野県埋蔵文化財センター 2005 『安曇野農業水利事業あづみ野排水路埋蔵文化財発掘調査報告書—三郷村内—三角原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書76 長野県埋蔵文化財センター
- 原明芳 2011 「長野県の古代生業」『一般社団法人日本考古学協会2011年度栃木大会研究発表資料集』日本考古学協会2011年度栃木大会実行委員会 pp.450-460
- 原明芳 2018 「『信濃布』の考古学」『信濃』70-8 信濃史学会 pp.25-46
- 堀金村教育委員会 2005 『堀金小学校付近遺跡—小学校の下に埋もれていた平安時代のムラー』堀金村の埋蔵文化財第2集 堀金村教育委員会
- 穂高町誌編纂委員会編 1991 『穂高町誌』第2巻（歴史編上・民俗編）穂高町誌刊行会
- 南安曇郡誌改訂編纂会 1968 『南安曇郡誌』第二巻上 南安曇郡誌改訂編纂会

調査報告書抄録

ふりがな	さんまいばしいせき 3
書名	三枚橋遺跡 3
副書名	店舗建設に伴う第 3 次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	安曇野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第21集
編著者名	横山幸子、土屋和章、中谷高志、山下泰永、株式会社加速器分析研究所
編集機関	安曇野市教育委員会
所在地	〒399-8281 長野県安曇野市豊科6000番地 TEL 0263-71-2000
発行年月日	西暦2020年10月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
さんまいばしいせき 三枚橋遺跡 (第 3 次)	ながのけんあづみのし 長野県安曇野市 ほたか 穂高1800番 1 外 1 筆	20220	2-47	36° 19' 52"	137° 53' 27"	19950408 ～ 19950428	366㎡	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三枚橋遺跡	集落跡	奈良時代 平安時代	竪穴建物跡 6 土壇 1 ピット	土師器、須恵器、灰釉陶器、 石製品、苧引金具、釘	竪穴建物跡 1 棟から、礫、焼土、 遺物の集積を確認 焼失建物跡あり
要約	三枚橋遺跡は、烏川扇状地に所在する集落跡である。7 次わたる発掘調査を実施し、弥生時代の集落跡、奈良～平安時代前半の竪穴建物跡や掘立柱建物跡を確認している。平成 7 年（1995）に店舗建設に先立ち試掘調査を実施したところ、埋蔵文化財が良好に残存していることを確認したため、第 3 次発掘調査を実施した。発掘調査では、竪穴建物跡 6 棟と、土壇と考えられるピット群を確認した。竪穴建物跡は、出土遺物から松本盆地古代 1～4 期、7～8 期の二つの時期に分けられる。特に、3～4 期にあたる奈良時代の竪穴建物跡は、安曇野市内で数少ない同時代の例となった。				

安曇野市の埋蔵文化財第21集

三枚橋遺跡 3

店舗建設に伴う第3次発掘調査報告書

発行	令和2年(2020)10月30日 安曇野市教育委員会 〒399-8281 長野県安曇野市豊科6000番地 電話0263-71-2000
編集	安曇野市教育委員会
印刷	電算印刷株式会社

